

富田新井遺跡 (前橋市0244遺跡)

主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群馬県前橋土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)

主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一六

群馬県前橋土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



富田新井遺跡 (前橋市 0244 遺跡)

主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群馬県前橋土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)は、前橋市富田町に所在し、平成26年度に群馬県前橋土木事務所から委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施しました。整理作業は平成27年度に行われ、本報告書が刊行されることとなりました。

藤岡大胡線は、群馬県南部の藤岡市本郷と前橋市大胡町を結ぶ主要幹線道路です。今回の事業により、国道50号小島田交差点から上武道路(国道17号バイパス)に至るまでの4車線化が完了し、地域間交流の活発化・産業経済の活性化に寄与するものと期待されています。

本遺跡は赤城山南麓地域の標高約90mに位置します。発掘調査の結果、9世紀代の集落、平安時代の区画溝などが確認されました。特に、赤城山南麓地域において、農耕社会における集落の変遷を考える上で貴重な情報を得ることができました。この調査成果をまとめた本報告書が、地元前橋市をはじめ、郷土群馬県の歴史理解の一助となることを願います。

本報告書の刊行に至るまでには、群馬県前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、諸機関並びに関係者の皆様に大変な尽力を賜りました。心から感謝申し上げますとともに、本報告書が広く活用されることを祈念し、序とします。

平成28年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 野 三 智 男

例 言

1. 本書は、平成26年度主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴い発掘調査され、平成27年度主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴い資料整理された富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)の調査成果を、発掘調査報告書として刊行したものである。
2. 遺跡は、群馬県前橋市富田町572-1、572-7、573-1に所在する。
3. 事業主体 群馬県前橋土木事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 発掘調査の期間と体制は次の通りである。
(平成26年度)
履行期間 平成26年6月1日～平成26年8月31日
調査期間 平成26年6月1日～平成26年6月30日
調査担当 須田正久(主任調査研究員)、藤井義徳(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負 株式会社飯塚組
地上測量委託 株式会社シン技術コンサル北関東支店
6. 整理事業の期間と体制は次の通りである。
(平成27年度)
履行期間 平成27年9月1日～平成28年2月29日
整理期間 平成27年9月1日～平成27年12月31日
整理担当 津島秀章(専門員(総括))
7. 本書作成担当は次の通りである。
編集 津島秀章
本文執筆 津島秀章
遺物観察 縄文土器：石坂茂(専門調査役)、土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)、金属器等：関邦一(補佐(総括))
・資料統括)、石器・石製品：津島秀章
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺物写真撮影 縄文土器：石坂茂、土師器・須恵器：津島秀章、金属器・土製品：関邦一
石器・石製品：津島秀章
8. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。
9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。記して感謝いたします。
群馬県教育委員会、前橋市教育委員会

凡 例

1. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。

2. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。

遺構平面図 竪穴住居 1 / 60、竈 1 / 30、土坑・ピット 1 / 40、溝 1 / 100。なお、平面図上の・は遺物を表す。

遺構断面図 竪穴住居 1 / 60、竈 1 / 30、土坑・ピット 1 / 40、溝 1 / 40。なお、断面図上のPは土器・陶磁器、Sは石器・石製品を表す。

竪穴住居の床面積は周溝を含めた面積であり、プランメーターにより計測した。

3. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。

縄文土器・土師器・須恵器・石器(石鏃・旧石器以外)・石製品・金属器・土製品 1 / 3、石器(石鏃) 1 / 1。

4. 本報告書のスクリーントーン表現は以下の通り。

	焼土	灰	攪乱	硬化面
遺構				
	内黒	灰釉	スス	熱変色
遺物				

5. 本報告書における遺構等の略称は以下の通り。

住…竪穴住居、竈…竈、貯…貯蔵穴、坑…土坑、ピ…ピット、P…柱穴(竪穴住居等)、外…遺構外

6. 遺構断面図や全体図等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。

7. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、『新版標準土色帖2005年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)によった。

8. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。

As-A…浅間A軽石、As-B…浅間B軽石、As-C…浅間C軽石、As-YP…浅間板鼻黄色軽石、As-0k1…浅間大窪沢1軽石、As-0k2…浅間大窪沢2軽石、As-BPgroup…浅間板鼻褐色軽石群、AT…始良Tn火山灰

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査	2
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 発掘調査の方法	3
第5節 整理作業の経過	3

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3節 基本土層	10

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 概要	16
第2節 竪穴住居	18
第3節 土坑	28
第4節 ピット	32
第5節 溝	40
第6節 遺構外出土の遺物	50
第7節 旧石器時代の調査	53

第4章 まとめ

第1節 地形と遺構の概況	54
第2節 集落の変遷	54
第3節 溝について	55

遺物観察表凡例

遺物観察表

報告書抄録

写真図版

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第22図	4～7号ピット平面	33
第2図	調査区位置図	4	第23図	8～10号ピット平面	34
第3図	周辺地形分類図	6	第24図	11～13号ピット平面	35
第4図	周辺遺跡分布図	11	第25図	14～16号ピット平面	36
第5図	基本土層断面図	15	第26図	17～19号ピット平面	37
第6図	遺構全体図	17	第27図	20～22号ピット平面	38
第7図	1号竪穴住居平面	18	第28図	23～25号ピット平面	39
第8図	1号竪穴住居竈平面、出土遺物	19	第29図	1・2号溝平面	40
第9図	2号竪穴住居平面	20	第30図	3・4号溝平面	41
第10図	2号竪穴住居断面、竈平面	21	第31図	6号溝平面	42
第11図	2号竪穴住居出土遺物	22	第32図	7・11・13号溝出土遺物	45
第12図	3号竪穴住居平面	23	第33図	5・7・8・9・11・13号溝平面	46
第13図	3号竪穴住居竈平面	24	第34図	5・7・8・9・11・13号溝断面	47
第14図	3号竪穴住居出土遺物	25	第35図	5・11号溝平面	48
第15図	4号竪穴住居平面、出土遺物	26	第36図	7・8・9・13号溝平面	49
第16図	5号竪穴住居平面、出土遺物	27	第37図	遺構外出土遺物(1)	50
第17図	1・2号土坑平面	28	第38図	遺構外出土遺物(2)	51
第18図	3～5号土坑平面、5号土坑出土遺物	29	第39図	遺構外出土遺物(3)	52
第19図	6～8号土坑平面、8号土坑出土遺物	30	第40図	旧石器時代調査坑配置・土層断面	53
第20図	9・10号土坑平面	31	第41図	遺跡周辺の遺構分布	56・57
第21図	1～3号ピット平面	32			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	12	第3表	遺物観察表(2)	60
第2表	遺物観察表(1)	59	第4表	遺物観察表(3)	61

写真目次

PL. 1	1. 遺跡から北を望む 2. 遺跡から南を望む			6. 2号竪穴住居床下土坑断面F-F' (南から) 7. 2号竪穴住居P 1・P 2 全景(西から) 8. 2号竪穴住居P 1・P 2 断面G-G' (西から)
PL. 2	1. 調査区北半全景(北から) 2. 調査区南端部(北から)		PL. 9	1. 2号竪穴住居P 3 全景(西から) 2. 2号竪穴住居P 3 断面H-H' (南から) 3. 2号竪穴住居P 4 全景(南から) 4. 2号竪穴住居P 4 断面I-I' (南から) 5. 2号竪穴住居P 5 全景(南から) 6. 2号竪穴住居P 5 断面J-J' (南から) 7. 2号竪穴住居P 6 全景(南から) 8. 2号竪穴住居P 6 断面K-K' (東から)
PL. 3	1. 調査区南端部(南から) 2. 1号竪穴住居全景(南東から)		PL. 10	1. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から) 2. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から) 3. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から) 4. 2号竪穴住居遺物出土状況(北から) 5. 3号竪穴住居全景(南から)
PL. 4	1. 1号竪穴住居掘方全景(南西から) 2. 1号竪穴住居断面(南東から) 3. 1号竪穴住居断面A-A' (南から) 4. 1号竪穴住居竈全景(西から) 5. 1号竪穴住居竈掘方全景(西から)		PL. 11	1. 3号竪穴住居遺物出土状況(南から) 2. 3号竪穴住居掘方全景(南から)
PL. 5	1. 1号竪穴住居竈断面C-C' (北から) 2. 1号竪穴住居竈断面C-C' (南から) 3. 1号竪穴住居竈断面D-D' (東から) 4. 1号竪穴住居貯蔵穴全景(北から) 5. 1号竪穴住居1号床下土坑断面F-F' (南から) 6. 1号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況(北から) 7. 1号竪穴住居遺物出土状況(東から) 8. 1号竪穴住居遺物出土状況(南から)		PL. 12	1. 3号竪穴住居断面A-A' (南から) 2. 3号竪穴住居掘方断面A-A' (南から) 3. 3号竪穴住居断面B-B' (東から) 4. 3号竪穴住居掘方断面B-B' (東から) 5. 3号竪穴住居竈全景(西から) 6. 3号竪穴住居竈掘方全景(西から) 7. 3号竪穴住居竈断面C-C' (南から) 8. 3号竪穴住居竈掘方断面C-C' (南から)
PL. 6	1. 2号竪穴住居全景(南西から) 2. 2号竪穴住居遺物出土状況(南西から)		PL. 13	1. 3号竪穴住居断面D-D' (西から) 2. 3号竪穴住居床下土坑全景(東から) 3. 3号竪穴住居床下土坑断面F-F' (東から) 4. 3号竪穴住居P 1 全景(東から) 5. 3号竪穴住居P 1 断面G-G' (東から)
PL. 7	1. 2号竪穴住居掘方全景(南から) 2. 2号竪穴住居断面A-A' (南から) 3. 2号竪穴住居断面B-B' (南から) 4. 2号竪穴住居掘方断面B-B' (南東から) 5. 調査風景(南から)			
PL. 8	1. 2号竪穴住居竈全景(西から) 2. 2号竪穴住居竈掘方全景(西から) 3. 2号竪穴住居竈断面C-C' (南から) 4. 2号竪穴住居竈断面D-D' (西から) 5. 2号竪穴住居床下土坑全景(西から)			

	6. 3号竪穴住居P 2 全景(東から)		
	7. 3号竪穴住居P 2 断面H-H' (南から)		
	8. 3号竪穴住居P 4 全景(東から)		
PL. 14	1. 3号竪穴住居P 5 全景(東から)		
	2. 4号竪穴住居断面A-A' (南から)		
	3. 4号竪穴住居全景(南西から)		
	4. 4号竪穴住居断面B-B' (北西から)		
	5. 4号竪穴住居断面C-C' (北から)		
PL. 15	1. 4号竪穴住居掘方全景(西から)		
	2. 4号竪穴住居床下土坑全景(北から)		
	3. 4号竪穴住居P 1 全景(南から)		
	4. 4号竪穴住居P 1 断面E-E' (南から)		
	5. 調査風景(南から)		
PL. 16	1. 5号竪穴住居全景(西から)		
	2. 5号竪穴住居掘方全景(西から)		
PL. 17	1. 5号竪穴住居断面A-A' (南から)		
	2. 5号竪穴住居断面B-B' (北西から)		
	3. 5号竪穴住居床下土坑・P 1 全景(南から)		
	4. 5号竪穴住居床下土坑・P 1 断面C-C' (南から)		
	5. 1号土坑全景(南から)		
	6. 1号土坑断面A-A' (南から)		
	7. 2号土坑全景(西から)		
	8. 2号土坑断面A-A' (西から)		
PL. 18	1. 3号土坑全景(南から)		
	2. 3号土坑断面A-A' (南から)		
	3. 4号土坑全景(北から)		
	4. 4号土坑断面A-A' (北から)		
	5. 5号土坑全景(北から)		
	6. 5号土坑断面A-A' (北から)		
	7. 6号土坑全景(東から)		
	8. 6号土坑断面A-A' (西から)		
PL. 19	1. 7号土坑全景(東から)		
	2. 7号土坑断面A-A' (東から)		
	3. 8号土坑全景(東から)		
	4. 8号土坑断面A-A' (西から)		
	5. 9号土坑全景(東から)		
	6. 9号土坑断面A-A' (東から)		
	7. 10号土坑全景(南から)		
	8. 10号土坑断面A-A' (南から)		
PL. 20	1. 1号ピット全景(南から)		
	2. 1号ピット断面A-A' (南から)		
	3. 2号ピット全景(南から)		
	4. 2号ピット断面A-A' (南西から)		
	5. 3号ピット全景(南から)		
	6. 3号ピット断面A-A' (南西から)		
	7. 4号ピット全景(南から)		
	8. 4号ピット断面A-A' (南西から)		
	9. 5号ピット全景(南から)		
	10. 5号ピット断面A-A' (南から)		
	11. 6号ピット全景(南から)		
	12. 6号ピット断面A-A' (南から)		
	13. 7号ピット全景(南から)		
	14. 7号ピット断面A-A' (南から)		
	15. 8号ピット全景(南から)		
		PL. 21	1. 8号ピット断面A-A' (南から)
			2. 9号ピット全景(南から)
			3. 10号ピット全景(西から)
			4. 11号ピット全景(西から)
			5. 11号ピット断面A-A' (西から)
			6. 12号ピット断面A-A' (南から)
			7. 13号ピット全景(南から)
			8. 13号ピット断面A-A' (南から)
			9. 14号ピット全景(西から)
			10. 14号ピット断面A-A' (西から)
			11. 15号ピット全景(東から)
			12. 16号ピット断面A-A' (南から)
			13. 17号ピット断面A-A' (南から)
			14. 18号ピット全景(南から)
			15. 18号ピット断面A-A' (南から)
		PL. 22	1. 19号ピット全景(南から)
			2. 19号ピット断面A-A' (南から)
			3. 20号ピット全景(北から)
			4. 20号ピット断面A-A' (南から)
			5. 21号ピット全景(南から)
			6. 21号ピット断面A-A' (南から)
			7. 22号ピット全景(南から)
			8. 22号ピット断面A-A' (東から)
			9. 23号ピット全景(南から)
			10. 23号ピット断面A-A' (南から)
			11. 24号ピット断面A-A' (西から)
			12. 25号ピット全景(東から)
			13. 調査風景(北から)
			14. 調査風景(北から)
			15. 調査風景(北から)
		PL. 23	1. 1・2号溝全景(南から)
			2. 1号溝断面A-A' (南から)
			3. 2号溝断面A-A' (南から)
			4. 3・4号溝全景(東から)
			5. 5号溝全景(南から)
		PL. 24	1. 3・4号溝断面A-A' (西から)
			2. 6号溝断面A-A' (南西から)
			3. 6号溝全景(南から)
			4. 7号溝全景(南から)
			5. 8・9号溝全景(北から)
		PL. 25	1. 11号溝全景(南から)
			2. 11号溝断面A-A' (北から)
			3. 13号溝全景(北から)
			4. 旧石器時代1号調査坑(東から)
		PL. 26	1. 旧石器時代2号調査坑(東から)
			2. 旧石器時代1号調査坑断面A-A' (南から)
			3. 旧石器時代2号調査坑A-A' (南から)
			4. 基本土層断面A-A' (東から)
			5. 調査風景
		PL. 27	1・2号竪穴住居出土遺物
		PL. 28	3・4・5号竪穴住居、5・8号土坑、7・11・13号溝出土遺物
		PL. 29	遺構外出土遺物

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

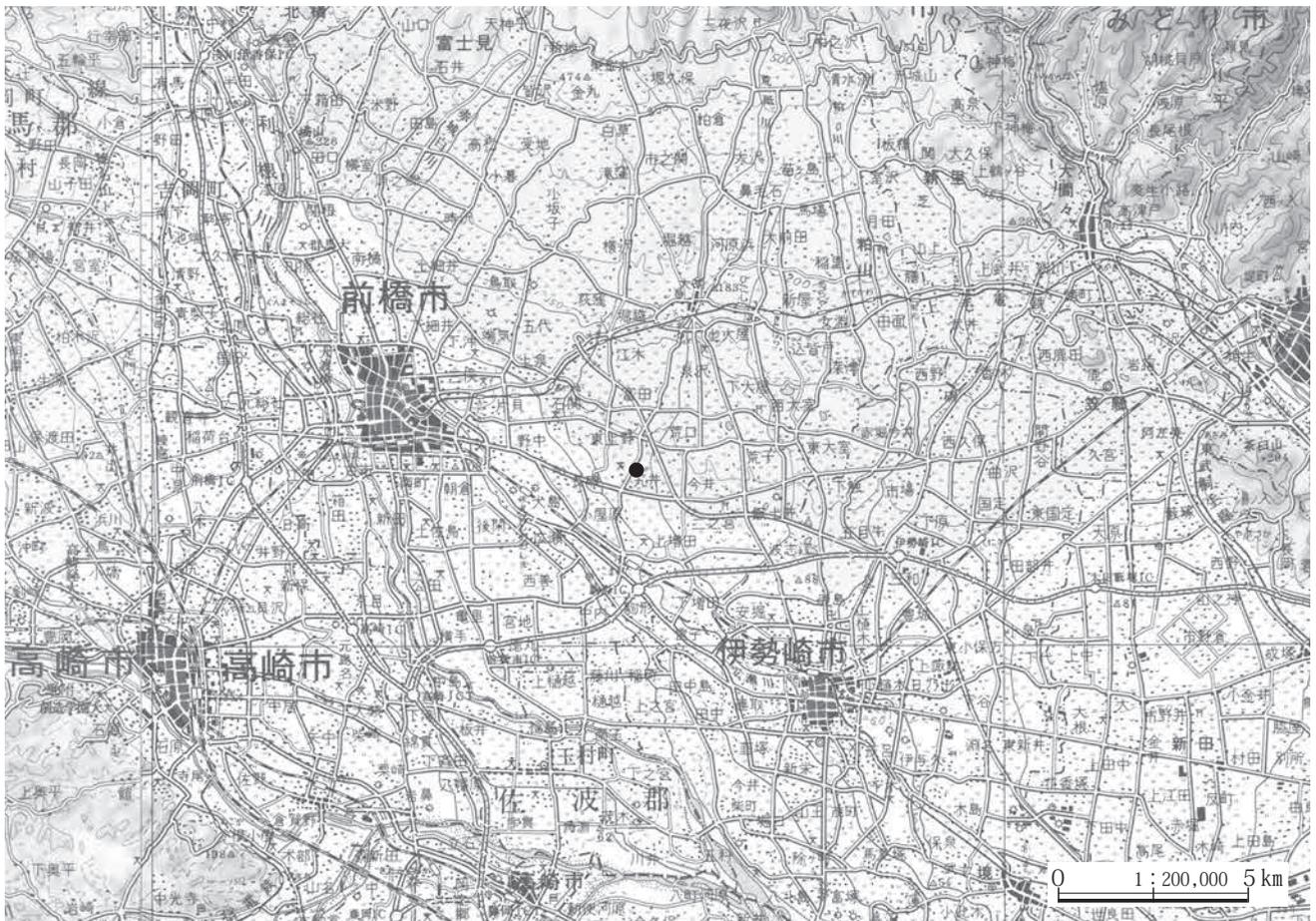
1. 事業実施に至る経緯

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)の調査は、平成26年度主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴い実施されたものである。

藤岡大胡線は、藤岡市本郷と前橋市大胡町とを結ぶ主要地方道である。この路線は全線にわたって交通量が多く、県はその改善のために4車線化等の整備を進めていた。その中でも、国道50号小島田交差点から主要地方道前橋西久保線富田町交差点に至る区間は、前橋市富田町のローズタウン住宅団地へのアクセス道に位置づけられ整備事業が進行していた。

国道50号小島田交差点から主要地方道前橋西久保線富田町交差点に至る区間に関して、小島田交差点に近接する前橋市小島田町から同筑井町にかけては、平成5年度と平成6年度に発掘調査が実施された。さらにその北側の上武道路(国道17号バイパス)迄の区間では、平成16年から平成20年にかけて発掘調査が実施された。これにより国道50号小島田交差点から上武道路に至る区間では、一部区間を残して片側2車線の4車線道路として供用開始されていた。

今回、用地等の関係で整備が遅れていた一部区間において発掘調査が実施され、当該区間に関しては4車線道路として完成することとなる。



第1図 遺跡位置図 (国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」使用)

2. 発掘調査に至る経緯

平成25年度における群馬県前橋土木事務所と群馬県教育委員会事務局文化財保護課との協議を踏まえ文化財保護課による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、発掘調査が必要と判断された。継続して群馬県前橋土木事務所と群馬県教育委員会事務局文化財保護課との調整が行われ発掘調査の実施が決定された。

先述のような調整を経て、平成26(2014)年度に前橋土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査に当たることが決せられた。試掘調査の詳細については、第2節に記す。

なお、主要地方道藤岡大胡線に係る事業については、本調査以前に次の通り発掘調査されている。平成4(1992)年6月～平成5(1993)年12月に小島田八日市遺跡、平成5(1993)年6月～平成8(1996)年5月に筑井中屋敷遺跡、平成16(2004)年11月～平成18(2006)年12月に富田新井遺跡、平成16(2004)年10月～平成20(2008)年3月に富田大泉坊B遺跡、平成17(2005)年2月～平成20(2008)年3月に富田大泉坊A遺跡、平成17(2005)年11月～平成19(2007)年4月に富田宮田遺跡、平成18(2006)年10月～平成20(2008)年2月に富田宮下遺跡。

また、これらの遺跡については、次のとおり報告書が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団から刊行されている。平成6(1994)年3月に『小島田八日市遺跡』、平成9(1997)年3月に『筑井中屋敷遺跡』、平成21(2009)年3月に『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』。

第2節 試掘調査

本遺跡は、前橋市の遺跡台帳に登録されている周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、本事業にかかる調査範囲確定のための試掘調査が群馬県教育委員会事務局文化財保護課(担当:石田真指導主事)によって実施された。

試掘調査の実施日は、平成26(2014)年3月26日である。これらの試掘調査は幅1m程度のトレンチ掘削によって行われた。試掘トレンチは4箇所設定された。

試掘調査の結果、1～3号トレンチにおいて表土下30～40cmの深度で竪穴住居、溝、土坑等の遺構の存在を

確認し、出土遺物を得た。また、発掘の南端近くには大規模な攪乱が認められ、攪乱の南側に設定した4号トレンチからは遺構・遺物は確認されなかった。

こうした試掘調査成果に基づいて群馬県教育委員会事務局文化財保護課は、前述の攪乱以南の事業区域に関して発掘調査は不要であると判断した。そして、攪乱より北側の1～3号トレンチを設定した事業区域については、発掘調査が必要であると結論した。

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成26(2014)年6月の1ヶ月間実施された。対象面積は633㎡である。

【調査概要】

調査は、6月1日から30日までの1ヶ月間、実施した。調査時に生じる排土の仮置き場の確保といった発掘調査を適切に実施するための都合により、調査区を1区と2区に便宜的に二分した。1区は調査範囲の南半分、2区は北半分に相当する。また、1区のほぼ中央には既存道路があるため、道路の北側を1区北と南側を1区南として調査区分けした。

調査は2区から着手し、6月3日から重機(バックホー)による表土除去を行い、にぶい黄橙色土上面で古代～中近世の遺構を確認した。後世の攪乱により遺構の残存状態は良好といえる状態ではなかったが、竪穴住居3軒をはじめ、溝、土坑などを確認した。続けてこれらの遺構の精査を実施した。精査終了後、旧石器確認調査を行い、6月19日に埋戻しが終了した。

1区の調査は、2区の調査終了後に実施した。1区南は6月19日から、1区北は6月20日から重機による表土除去を行い、にぶい黄橙色土上面で古代～中近世の遺構を確認した。2区と同様に後世の攪乱により遺構の残存状態は良好といえる状態ではなかったが、竪穴住居2軒をはじめ、溝、土坑などを確認した。それらの遺構の精査を実施し、終了後に旧石器確認調査を行った。1区の埋戻しは6月27日に終了した。

詳細は以下、調査日誌抄に記す。

【調査日誌抄】

- 6月2日(月) 調査準備。
- 6月3日(火) 2区、表土除去。遺構確認作業。
- 6月4日(水) 2区、古代～中近世の遺構精査開始。
- 6月16日(月) 2区、全景写真(高所作業車)、旧石器確認調査開始。
- 6月18日(水) 2区、遺構精査及び旧石器確認調査終了。
- 6月19日(木) 2区、埋戻し。1区南、表土掘削、遺構確認作業。
- 6月20日(金) 1区南、古代～中近世の遺構精査開始。
1区北、表土掘削、遺構確認作業。
- 6月23日(月) 1区南、遺構精査終了、埋戻し。1区北、
古代～中近世の遺構精査開始。
- 6月27日(金) 1区北、遺構精査終了、旧石器確認調査
及び埋戻し。
- 6月30日(月) 調査終了。

第4節 発掘調査の方法

発掘調査に用いた座標・グリッドは世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用い、10m×10mを基本とし設定した。なお、第IX系の原点は、北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″(千葉県野田市)であり、本遺跡はX=42062～42129、Y=-62075～-62038に位置する。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=42100、Y=-62070」の場合、「100-070」のように表記した。

調査の方法はごく標準的な方法を用いた。表土除去は基本的に重機(バックホー)を用いて行った。表土除去後、平面精査を行い、遺構確認を行った。確認された遺構は、埋没土層確認用ベルトを任意に設定した後、発掘作業員が移植鍬等で掘削し、測量・写真等で記録した。遺構番号は、通し番号とした。埋め戻しは基本的に重機(バックホー)を用いて行った。

遺構図は断面図・平面図とも縮尺1/20を基本とし、遺構の状況に応じて縮尺1/10・1/40とした。

遺構写真は、調査担当者が撮影した。デジタルカメラを中心とし(DVDに記録データを保存)、一部ブローニー版モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影した。遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、全景等を撮影

し、さらに必要に応じて接写を行った。また、調査区全景写真については、適宜、高所作業車にて撮影を行った。

第5節 整理作業の経過

整理作業は、平成27(2015)年9月1日から12月31日までの4ヶ月間、群馬県前橋土木事務所の委託を受けて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団がこれに当たることとなった。

出土遺物は土器及び石器であり、遺物に対する整理作業内容の概要は次のとおりである。土器は、分類・接合・復元したものを写真撮影・実測・トレースした。土器の接合にあたっては、遺構ごとに接合記録を作成しながら行った。接合作業は、遺構内の遺物出土状況を平面図及び写真と確認しながら実施した。遺構内から出土した土器は、近接するグリッド取り上げ土器とも接合を試みた。そして、遺物出土状態や個体数・形態差等を考慮し報告書に掲載する遺物を選択した。選択できなかった土器については、遺構・出土位置ごとに種別等を分類し、出土遺構単位で集計し収納した。

石器は、器種分類したのちから報告書掲載遺物を決定した後、写真撮影・実測・トレースした。最初に、遺構等の出土位置を確認しながら器種分類した。次に、出土遺構、器種の種類、出土点数等を勘案し、報告書掲載遺物を決定した。報告書掲載外のものも含め出土石器の全点について、各種属性を表形式にまとめた。石器石材の同定は、群馬地質研究会の飯島静男氏に依頼した。

発掘調査で確認された遺構は、竪穴住居、土坑、ピット、溝である。遺構図に関しては、それぞれの遺構に対して平面図、土層断面図等があるが、それら各種図面に対して点検・修正・編集を行い、報告書掲載図をデジタルデータとして作成した。また、遺構写真は、デジタル写真から編集を行った。

これらの作業と並行して、本文原稿・遺物観察表等を執筆した。最終的に、各種遺構図、遺物図、遺構写真、遺物写真、本文原稿及び遺物観察表、それらをあわせてレイアウトした後に、デジタル編集を行い本報告書を作成した。



第2図 調査区位置図（前橋市作成の地形図2千分の1を使用し編集した）

第2章 周辺環境

第1節 地理的環境

1. 地理的現況

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)は前橋市の南東部、群馬県庁の東約5.7km、県立前橋東高校の北東約200mに位置し、前橋市富田町に所在する。現在の前橋市は、平成の大合併で平成16(2004)年に旧前橋市と旧勢多郡大胡町・宮城村・粕川村の1市1町2村が合併し、さらに平成21年(2009)に勢多郡富士見村の1村が合併して成立した。

前橋市は県庁所在地であり、地域の文化・産業・交通等において重要な位置を果たしている。特に、政治・経済・文化の中心都市として、数多くの行政機関やサービス産業が集中しており、第三次産業人口の比率が高い傾向にある(『平成25年度群馬県市町村要覧』より)。

交通網に着目すると、鉄道では、前橋市表町の前橋駅から、西方向にJR両毛線(上り)、東方向にJR両毛線(下り)が伸びており、市内には前橋駅のほか、新前橋(上り)・前橋大島・駒形(以上下り)の各駅が設置されている。新前橋駅からは北方向にJR上越線が伸びており、群馬総社駅が設置されている。また、上毛電鉄上毛線が始発駅である中央前橋駅から東方に伸び、終点の西桐生駅まで地域住民の重要な路線となっている。

前橋市街地は、前橋駅の周辺と北側に発展している。道路では、国道17号バイパス(上武道路)が市南部を北西-南東方向に走り、前橋市今井町で国道50号と立体交差している。国道50号は群馬県庁から東に向かい市南部を横断する。国道17号は市西部を縦貫し、高崎方面と県北部方面を結ぶ重要な路線となっている。国道353号は市北部を横断し、東方の桐生市方面と西方の渋川市方面への路線として利用頻度が高い。

高速道路では、北関東自動車道が南部を横断し、前橋市鶴光路町に前橋南インターチェンジ、前橋市駒形町に駒形インターチェンジが設置されている。関越自動車道は市の西部、前橋市と高崎市の行政区境付近を縦貫している。

2. 地形的環境

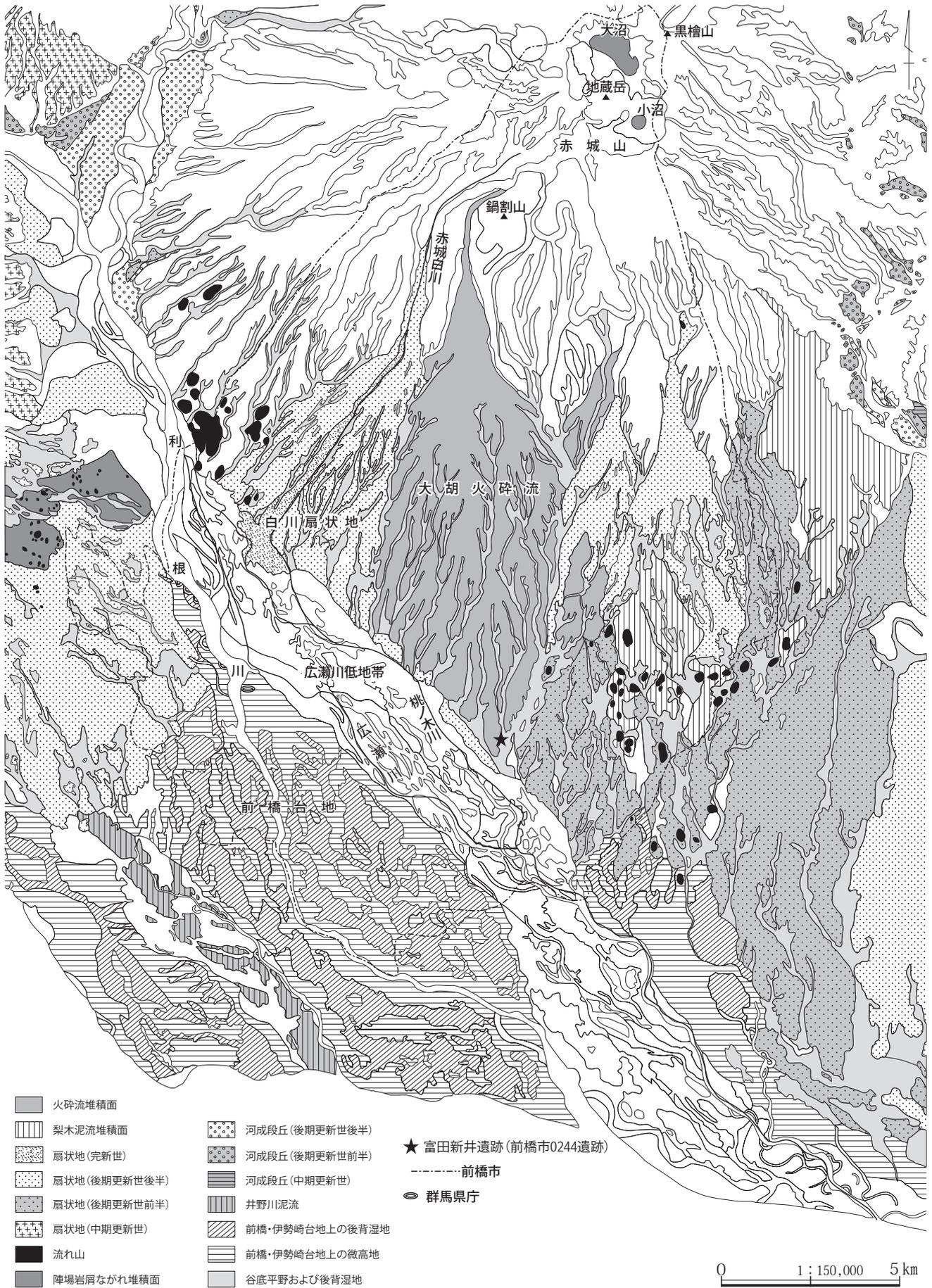
前橋市近辺の地形を概観すると、もっとも顕著な地形は赤城山及びその南麓地域と利根川及びそれに付随する低地域である。赤城山は、前橋市の北端に位置し広く裾野を広げる。利根川は赤城山の西を流れ、前橋市の南の佐波郡玉村町で東方に大きく流れを変える。赤城山の南麓地域では、数多くの小河川が下り最終的に利根川に合流する。

赤城山は、群馬県のほぼ中央に位置する第四紀火山である。赤城火山は約40~50万年前に活動を開始し、その活動史は古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期に三期区分されている。

古期成層火山形成期では、約20~30万年前に発生した梨木泥流が特に注目される。これは山体崩落による大規模な岩屑なだれであり、南西麓及び東麓から南東麓に岩屑なだれの痕跡が認められる。それらの一部は通称「ながれ山」とされる丘陵であり、前橋市と伊勢崎市の境界付近に広がる多田山丘陵はその代表的なものである。古期成層火山形成期は約13万年前までと理解されている。

新期成層火山形成期は、主に溶岩流とテフラの噴出からなり、浸食の進んだ古期火山体を覆っている。この活動期には火砕流を伴う噴火が多く認められ、南麓地域の大胡火砕流はその一つである。新期成層火山形成期は約4.5万年前までとされる。

中央火口丘形成期には、山頂部にカルデラが形成され、赤城鹿沼軽石が噴出された。この鹿沼軽石を伴う噴火の後に、カルデラの中では地蔵岳、長七郎山など中央火口丘が形づくられた。現在、長七郎山の西に小沼こぬまと呼ばれる小さな湖がある。これは約2.5万年前の水蒸気爆発によって生じた火山湖であり、その噴火により小沼のラピリが噴出した。小沼のラピリは赤城山の東麓から南西麓にかけて堆積が観察される。その後、現在に至るまでの赤城火山の変遷は浸食作用が卓越している。浸食によって削られた土砂は山麓に堆積し、白川扇状地、荒砥川扇状地、粕川扇状地を形成している。



第3図 富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)周辺地形分類図 (群馬県『群馬県史通史編1』付図2を改変)

前橋市田口町から駒形町方面にむかい、比較的幅の広い低地域が赤城山麓を開析し走っている。これは現在の広瀬川沿いに広がる低地で広瀬川低地帯と呼ばれ、最終的には伊勢崎市にて現在の利根川に至る。この低地帯は、かつて旧利根川が流下することで形成されたものと考えられている。

旧利根川がその低地帯を流れていた年代に関して、榛名山麓で発生した陣場岩屑なだれを契機とする見解が優勢である。陣場岩屑なだれは約2万年前に発生したとされ、榛名山の山体崩落に起因したイベントである。それまでの旧利根川の谷は、岩屑なだれ堆積物により埋められ、河道が赤城山よりに押しやられた結果、広瀬川低地帯の方に東遷したとするものである。

一方、旧利根川が広瀬川低地帯から現在の流路に移った年代について、天文年間(1532～1554年)に発生した洪水を原因とする説が有力である。

3. 本遺跡周辺の環境

本遺跡は、赤城山南麓地域の標高約90mの地点に立地する。赤城山を起源とし約6万年前に発生したとされる大胡火砕流の堆積が認められる区域に立地し、その南端近くに位置する。本遺跡の北北東約500mに位置する富田宮下遺跡では、平成11年度に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査時に、表土下約4mで厚さ20cmほどの大胡火砕流堆積物を確認するとともに、その上に厚く堆積するローム層が認められた。

赤城山の南麓地域では数多くの小河川が流れ下り、最終的には群馬県と埼玉県の県境付近を東流する利根川に至る。当該地域では、それらの小河川に伴う低地域と台地が入り組んだ複雑な地形的様相をみせる。本遺跡の東約500mには、赤城山南麓の主要河川の一つである荒砥川が南流し、それに伴う低地が広がる。

遺跡地の東側近接地には大泉坊川が南流し、それに伴う低地が広がる。また西には、江木新沼方面から下る小河川とそれに付随する低地が認められる。これら二つの低地域は、遺跡の南約600mの場所で合流し、二つの低地に挟まれた台地は南北に細長く延びて舌状台地を形成している。この舌状台地は、遺跡地付近で最も東西方向に広がりを見せるが、それでもその距離は500mほどしかない。

本遺跡は、そのような舌状台地の先端付近から約600m北方向の台地側に入った場所にあり、台地の東端に立地する。まさに台地から低地への移行部分にあたり、南東方向に緩やかに傾斜している。現在、遺跡周辺での台地と低地との比高差は1m程度であり、低地域は専ら水田として、台地上は集落域として土地利用されている。

参考文献

群馬県史編纂委員会1990『群馬県史通史編1』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は数多く発見されている。特に始良丹沢火山灰下のローム層「暗色帯」に帰属する石器群が多いのが特徴である。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(41)では当該期の環状ブロック群が検出されている。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(41)と今井道上Ⅱ遺跡(42)では、刃部磨製石斧が出土している。また、富田宮下遺跡(10)、富田高石遺跡(13)、萱野Ⅱ遺跡(19)などでは、黒色安山岩を主要な石材とする石器製作活動が認められる。

始良丹沢火山灰の極大層付近に帰属する石器群としては、亀泉坂上遺跡(21)が上げられる。信州産の黒曜石を石材とする石刃技法が認められる。遺跡内での石刃生産も観察され、それに関する複数の接合資料が確認されている。

浅間板鼻褐色軽石群を含むロームに帰属する石器群は、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(41)、富田宮下遺跡(10)、萱野Ⅱ遺跡(19)で検出されている。特に萱野Ⅱ遺跡(19)では、黒色安山岩を主要石材とする石器群が検出されており、角錐状石器に類する資料も確認されている。萱野Ⅱ遺跡(19)では、黒曜石製の国府型ナイフ形石器に類する資料が、古墳時代の竪穴住居覆土から検出されている。

当該地域では尖頭器石器群は、浅間大窪沢第1軽石を含むローム層から検出されている。富田下大日遺跡(16)、

亀泉坂上遺跡(21)などで当該期石器群が確認されている。特に、富田下大日遺跡(16)では、信州産の黒曜石を使用石材とする尖頭器石器群が検出されており、彫刻刀形石器とエンドスクレイパーが伴う。

頭無遺跡(65)からは、細石刃石器群が検出されている。これは硬質頁岩を主要な使用石材とし、湧別技法による細石刃生産が認められる石器群である。そして、荒屋型彫刻刀形石器も複数共伴している。

2. 縄文時代

縄文時代の遺跡分布については、全体的に小河川支流の台地縁辺部や開析谷の谷頭周辺に立地する傾向がうかがえる。縄文時代の草創期及び早期の遺跡は少ない。小島田八日市遺跡(3)では草創期の遺物包含層が確認されている。微隆起線土器群と有舌尖頭器・両面加工尖頭器が出土し、局部磨製石斧も1点確認されている。

また、小島田八日市遺跡(3)、荒砥北三木堂遺跡(40)、柳久保遺跡群(63)では、早期の燃糸土器群等が出土している。富田大泉坊B遺跡(5)でも、早期の遺物包含層が確認された。萱野Ⅱ遺跡(19)では、早期に帰属する土坑2基を検出している。頭無遺跡(65)からも30基を越える土坑群が確認されており、陥穴と想定されている。

前期についてはやや小規模な遺跡が多く、中期は比較的大規模な遺跡が分布する傾向にある。萱野Ⅱ遺跡(19)、江木下大日遺跡(17)、富田下大日遺跡(16)、荒砥北三木堂遺跡(40)、荒砥宮田遺跡(61)、荒砥北原遺跡(38)、下鶴谷遺跡(62)では、前期の竪穴住居が確認されている。稲荷前遺跡(22)からは、竪穴状遺構が検出された。また、富田新井遺跡(4)と富田大泉坊B遺跡(5)では、前期の遺物包含層が検出された。

萱野遺跡(18)では、中期に帰属する竪穴住居を確認するとともに大量の土器等が検出されている。上ノ山遺跡(31)では、中期後半の竪穴住居55棟を確認している。萱野Ⅱ遺跡(19)、富田下大日遺跡(16)、富田漆田遺跡(15)でも、中期の竪穴住居が確認された。今井白山遺跡(34)では、中期の敷石住居が検出されている。

後期及び晩期に関しては、遺構・遺物ともに検出例は比較的少ない。特に、晩期の遺構・遺物の少なさが際立っている。頭無遺跡(65)では、後期に帰属する土坑が検出されている。また、今井道上Ⅱ遺跡(42)、今井道上・道

下遺跡(48)、諏訪遺跡(66)、荒砥宮田遺跡(61)、下鶴谷遺跡(62)では、後期の遺物包含層が検出された。晩期に関しては、今井道上Ⅱ遺跡(42)で浮線網状文のある浅鉢破片が検出されている。

その他、縄文時代の詳細な時期は不明であるが、萱野Ⅱ遺跡(19)では、けつ状耳飾りと垂飾が検出されており、富田宮田遺跡(7)では旧河道が確認されている。

3. 弥生時代

弥生時代の遺跡数は比較的少ない。当該地域で弥生時代の遺跡が検出されるようになるのは中期前半である。富田西原遺跡(12)では、中期前半に位置づけられる土坑1基が確認されている。この土坑は再葬墓と評価されている。

中期後半段階としては、富田宮下遺跡(10)で竪穴住居3軒、荒砥北三木堂遺跡(40)で竪穴住居5軒、荒砥島原遺跡(59)で竪穴住居2軒が検出されており、当該期として良好な資料が確認されている。特に荒砥島原遺跡では、2軒の竪穴住居が宮川沖積地に面した地点に立地しており、居住域と生産域との関係をとらえる上で重要なものである。また、荒砥北三木堂遺跡(40)では続く古墳時代の遺構・遺物も豊富であり、水田開発に移行していく地域社会発展の様相を考える上で欠かせないものとなっている。荒口前原遺跡(37)、荒砥宮川遺跡(54)、鶴谷遺跡群(44)、頭無遺跡(65)では、中期後半段階の土坑が検出されている。中期後半段階としては、住居が検出された遺跡であってもその検出件数はごく少数であり、この時期の集落は小規模であったと考えられる。

後期段階に位置づけられるものとしては、箕井中屋敷遺跡(2)で遺物包含層が確認されている。竪穴住居等の遺構は確認されていないが、近接地に集落が展開している可能性が考えられる。富田西原遺跡(12)からは、後期後半に位置づけられる竪穴住居が6軒検出されている。これはまとまった資料として当該地域の弥生社会を考える上で非常に貴重なものである。

富田宮下遺跡(10)からは、後期末から古墳時代前期にかけての竪穴住居が8軒確認されている。また、荒砥前田Ⅱ遺跡(36)では、弥生時代最終末の土器が検出されている。前述した荒砥北三木堂遺跡(40)と同様に、弥生時代から古墳時代への移行を考える上で重要な遺跡である。

4. 古墳時代

古墳時代前期になると、弥生時代後期から遺跡数は急増する。前期の遺跡は、谷頭周辺や小河川縁辺に立地し、特に小河川とその支流の合流点付近の台地縁辺部に立地する傾向がある。富田宮下遺跡(10)、富田西原遺跡(12)、富田高石遺跡(13)、北原遺跡(76)、丸山遺跡(78)、荒砥諏訪西遺跡(67)、荒砥宮田遺跡(61)、荒砥前田Ⅱ遺跡(36)、荒砥北原遺跡(38)、柳久保遺跡群(63)などでは竪穴住居がまとまって検出されている。これらの中には周溝墓が検出された遺跡も多く、居住域に墓域が付随して集落が展開している。堤東遺跡(74)では、大型の前方後方形周溝墓が確認されている。

古墳時代前期の生産域を表す遺跡も確認されている。二之宮千足遺跡(53)、二之宮宮下東遺跡(57)からは、浅間C軽石により埋没した水田が検出された。また、荒砥宮川遺跡(54)、荒砥天之宮遺跡(55)では、浅間C軽石を鋤込んだ畠が確認された。

古墳時代前期の集落の多くは、中期以降も継続して営まれる。このように前期から継続する集落は、台地の内部に居住域を変化させていく。それは水田耕作地が台地縁辺部の傾斜地にまで拡大していくからと考えられている。丸山遺跡(78)、北原遺跡(76)、荒砥宮田遺跡(61)、荒砥前田Ⅱ遺跡(36)、柳久保遺跡群(63)などで、中期の竪穴住居が検出されている。

一方、中期以降になって新たな場所に集落が形成される場合がある。例えば荒砥天之宮遺跡(55)では、古墳時代中期に開始された集落が検出されている。これは、溜井の掘削といった新規の灌漑土木技術の導入によるさらなる水の確保と、それに裏付けられた生産域の拡大が背景にあると考えられている。荒砥北三木堂遺跡(40)も古墳時代中期に新たに集落の展開をみる遺跡である。

古墳時代後期に関しては、前述したように中期以降継続して営まれる集落が多い。荒砥諏訪西遺跡(67)、荒砥北原遺跡(38)、柳久保遺跡群(63)、大久保遺跡(71)、北原遺跡(76)、新山遺跡(77)、丸山遺跡(78)などで後期の竪穴住居群が確認されている。

ところで、当該地域では数多くの古墳が確認されているが、前期古墳は知られていない。5世紀前半段階の古墳は未確認であり、5世紀後半になり今井神社古墳群

(47)において前方後円墳が出現する。また、5世紀後半に比定されるおとうか山古墳(14)など、小円墳が造営されるようになる。東原遺跡(11)でも当該期の円墳6基が確認されており、初期群集墳の形成が始まっている可能性が指摘されている。荒砥宮川遺跡(54)、荒砥宮原遺跡(58)、新山遺跡(77)などでも、5世紀後半の小円墳が検出されている。

また、筑井八日市遺跡(33)と丸山遺跡(78)では、5世紀後半の方形区画遺構が検出されている。これらは当該期の地域の有力者層の居館と考えられている。

5. 奈良・平安時代

律令制下において、群馬県域はほぼ上毛野国(和銅6(713)年までに上野国と改称)にあたり、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初は13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。

上西原遺跡(75)では、方形区画とその内部の礎石基壇建物、整然と配置された掘立柱建物群を検出している。そして、それらの遺構とともに、「勢」の文字が刻印された複数の瓦、塑像、銅製飾金具、緑釉陶器、瓦塔片、大量の鉄釘などが出土した。先述の掘立柱建物群は勢多郡の郡衙の一部施設である可能性が指摘されており、方形区画内の礎石基壇建物は郡衙に付随する寺院に比定されている。上西原遺跡の周辺地域は、古代勢多郡の中心的な地域であったと考えられている。また、上西原遺跡の周辺にある中鶴谷遺跡(64)、頭無遺跡(65)、大久保遺跡(71)、川籠皆戸遺跡(73)、荒子小学校校庭遺跡(72)などの集落遺跡からは多数の墨書土器が出土しており、上西原遺跡との関連性が指摘されている。

また、今井道上遺跡(85)からは、8世紀後半から9世紀中葉にかけての方形区画遺構が確認されている。それは、ほぼ一町(109m)四方を囲む二重の溝の一部であり、内部からは大形掘立柱建物と竪穴住居が検出された。その溝の規模や出土遺物から豪族の館と考えられている。

奈良・平安時代の集落遺跡をみると、分布域は多少変化しているが古墳時代後期から継続するものが多い。古墳時代に拓かれた水田耕地を継承していることが背後にあると考えられている。奈良・平安時代になると、さらにそれ以前には遺跡の存在しない場所にまで居住域が拡

大していき、集落の密度も増していく。それは、やはり生産域である水田の拡大に起因するものと考えられている。

富田細田遺跡(9)、荒砥前田遺跡(35)、荒砥宮田遺跡(61)では、奈良・平安時代の洪水層の下面で水田跡が検出されている。この洪水は、『類聚従国史』に記載される818(弘仁9)年の地震に起因した可能性と、水田はその時の洪水堆積物で埋没したものである可能性が指摘されている。

また、1108(天仁元)年に浅間山の大噴火が起きたことが知られており、多くの遺跡でその降下軽石(浅間B軽石)で埋没した水田が確認されている。富田西原遺跡(12)、富田宮下遺跡(10)、富田細田遺跡(9)、荒砥大日塚遺跡(43)、二之宮谷地遺跡(49)、二之宮千足遺跡(53)、荒砥島原遺跡(59)、荒砥天之宮遺跡(55)などで浅間B軽石により被覆した水田が検出されている。

6. 中近世

1108(天仁元)年の浅間B軽石降下後に、上野国内では荘園開発への動きが活発になる状況がうかがわれる。女堀(32)は、刈名荘の再開発のために掘られた農業用水路と考えられている。発掘調査によって、1108(天仁元)年の噴火後に掘削が開始されていること、工事途中とみられる遺構が存在し掘削工事が中断したことが明らかとなった。

1108(天仁元)年の浅間山の噴火により、特に高崎から前橋にかけての地域では相当量の軽石が降り積もったと想定されている。それにより当該地域にも甚大な被害があったと考えられる。荒砥前田遺跡(35)では、用水が被災して生産不能になったと考えられる水田が検出されており、その被災した水田域の上から火山灰や軽石を鋤込んで畠にしたものが見つかっている。また、女堀(32)の掘削時に生じる排土の下からも畠が見つかる地点が複数あり、水田耕作から畠作への変換が広範囲でおこったと考えられている。

中世以降の一般農民の居住形態については不明な部分が多い。竪穴住居のように地面に掘削の痕跡を残す形態の遺構が認められないことから、地表面にそのような痕跡を残しにくい上屋構造物に居住していたと考えられる。

一方、二之宮宮下西遺跡(56)、二之宮宮下東遺跡(57)、今井道上・道下遺跡(48)、荒砥宮田遺跡(61)、荒砥諏訪西遺跡(67)では、堀や掘立柱建物群が検出されており、支配者層や有力農民の館と考えられている。また、東原遺跡(11)では59基の中世墳墓群を検出し、五輪塔、板碑、骨蔵器などが確認された。

参考文献

前橋市教育委員会2013『前橋市遺跡分布地図―市内遺跡詳細分布報告書』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富田細田遺跡 富田宮下遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『荒砥前田Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『上武道路旧石器時代遺跡群(2)』

第3節 基本土層

赤城山南麓地域では、小河川及びそれに伴う低地と台地が入り組んだ複雑な地形的様相をみせる。本遺跡の東約500mには、赤城山南麓の主要河川の一つである荒砥川が南流し、それに伴う低地が広がる。

遺跡地の東側近接地には大泉坊川が南流し、それに伴う低地が広がる。また西には、江木新沼方面から下る小河川とそれに付随する低地が認められる。これら二つの低地域は、遺跡の南約600mの場所で合流し、二つの低地に挟まれた台地は南北に細長く延びて舌状台地を形成している。この舌状台地は、遺跡地付近で最も東西方向に広がりをもつ。

本遺跡は、そのような舌状台地の先端付近から約600m北方向の台地側に入った場所にあり、台地の東端に立地する。まさに台地から低地への移行部分にあたり、南東方向に緩やかに傾斜している。現在、遺跡周辺での台地と低地との比高差は1m程度である。

遺跡が、台地から低地への移行部に立地し南東に向かい緩やかに傾斜する地点に立地するため、遺跡の北側と南側とでは土層堆積状況が若干異なっている。発掘区の北側ではローム層の堆積は認められたが、より下層では白色粘土化する傾向が確認された。一方、発掘区南側ではローム層は認められず、黒褐色土の下には白色粘土化した土壌が観察された。

黒褐色土は表土層以外の層準には認められず、遺跡全



第4図 周辺遺跡分布図 (国土地理院2万5千分の1地形図「大胡」使用)

第2章 周辺の環境

第1表 周辺遺跡一覧(1)

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	近代	種別	文献
1	富田新井遺跡 (前橋市0244遺跡)					○	○		集落	本報告書
2	筑井中屋敷遺跡			○	○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1997『筑井中屋敷遺跡』
3	小島田八日市遺跡		○				○		散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『小島田八日市遺跡』
4	富田新井遺跡		○			○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
5	富田大泉坊B遺跡		○			○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
6	富田大泉坊A遺跡			○	○	○	○		集落、生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
7	富田宮田遺跡		○		○	○	○		集落、生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
8	富田宮下遺跡	○	○		○	○	○		集落、生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
9	富田細田遺跡					○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富田細田遺跡・富田宮下遺跡』
10	富田宮下遺跡	○		○	○	○	○		集落、墓その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富田細田遺跡・富田宮下遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
11	東原遺跡		○		○	○	○		集落、墓その他	前橋文化財研究会1980『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』
12	富田西原遺跡	○		○	○	○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『富田西原遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
13	富田高石遺跡	○			○	○	○		散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『富田高石遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
14	おとうか山古墳				○				古墳	前橋文化財研究会1980『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』
15	富田漆田遺跡	○			○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富田漆田遺跡・富田下大日遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
16	富田下大日遺跡	○	○		○	○			集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富田漆田遺跡・富田下大日遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
17	江木下大日遺跡	○	○		○	○			集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『江木下大日遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
18	萱野遺跡		○		○	○			集落、墓その他	群馬県企業局1991『萱野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』
19	萱野Ⅱ遺跡	○	○		○	○			集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『萱野Ⅱ遺跡』、2010『上武道路旧石器時代遺跡群(2)』
20	堤沼上遺跡	○				○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『堤沼上遺跡』、2010『上武道路旧石器時代遺跡群(2)』
21	亀泉坂上遺跡	○	○		○		○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『亀泉坂上遺跡』、2010『上武道路旧石器時代遺跡群(2)』
22	稲荷前遺跡		○		○				古墳	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1996『稲荷前遺跡』
23	大日遺跡					○			集落	
24	稲荷窪A地点遺跡		○		○	○			集落、生産遺跡、その他	大胡町教育委員会1996『茂木遺跡群 稲荷窪A地点遺跡』
25	稲荷窪B地点遺跡		○		○	○	○		集落、生産遺跡、その他	大胡町教育委員会1998『茂木遺跡群 稲荷窪B地点遺跡』
26	山神遺跡		○		○	○	○		散布地、集落、生産遺跡	大胡町教育委員会1992『中川原遺跡群 小林・山神・大畑遺跡』
27	小林遺跡				○	○	○		散布地、集落、生産遺跡	大胡町教育委員会1992『中川原遺跡群 小林・山神・大畑遺跡』
28	茂木山神Ⅱ遺跡		○		○	○			散布地、集落、生産遺跡	大胡町教育委員会2001『茂木山神Ⅱ遺跡』

周辺遺跡一覧(2)

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	近代	種別	文献
29	諏訪東遺跡		○			○			散布地、集落、生産遺跡	
30	西小路遺跡		○		○		○		集落、墓、その他	大胡町教育委員会1994『西小路遺跡』
31	上ノ山遺跡		○		○		○		集落、墓、その他	大胡町教育委員会1992『中川原遺跡群 山ノ上遺跡』
32	女堀					○			生産遺跡、その他	群馬県教育委員会1980『昭和54年度女堀遺跡詳細分布調査実績報告書』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『女堀』、伊勢崎市2015『史跡女堀』
33	筑井八日市遺跡		○		○	○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『筑井八日市遺跡』
34	今井白山遺跡		○		○	○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『今井白山遺跡』
35	荒砥前田遺跡					○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2004『荒砥宮田遺跡 荒砥前田遺跡』
36	荒砥前田Ⅱ遺跡			○	○	○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『荒砥前田Ⅱ遺跡』
37	荒口前原遺跡			○		○			集落	前橋市1971『前橋市史第1巻』
38	荒砥北原遺跡		○		○				集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』
39	荒砥北原Ⅱ遺跡		○						集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『荒砥北原Ⅱ遺跡』
40	荒砥北三木堂遺跡	○	○	○	○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』、1992『荒砥北三木堂遺跡Ⅱ』
41	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡	○	○		○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『荒砥北三木堂Ⅱ遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
42	今井道上Ⅱ遺跡	○	○		○				散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『今井道上Ⅱ遺跡』、2008『上武道路旧石器時代遺跡群(1)』
43	荒砥大日塚遺跡				○	○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『荒砥大日塚遺跡』
44	鶴谷遺跡群	○		○	○	○	○		散布地、集落	前橋市教育委員会1981『鶴谷遺跡群』、1982『鶴谷遺跡群Ⅱ』
45	荒砥中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡				○	○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』、前橋市教育委員会2013『前橋市遺跡分布地図—市内遺跡詳細分布報告書』
46	荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡				○	○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』
47	今井神社古墳群				○	○			古墳	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』
48	今井道上・道下遺跡	○	○		○	○	○		散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『今井道上・道下遺跡』
49	二之宮谷地遺跡	○			○	○			生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『二之宮谷地遺跡』
50	荒砥洗橋遺跡				○	○	○		散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』
51	二之宮洗橋遺跡				○	○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『二之宮洗橋遺跡』
52	荒砥宮西遺跡				○	○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』
53	二之宮千足遺跡	○			○	○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『二之宮千足遺跡』
54	荒砥宮川遺跡			○	○	○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡』
55	荒砥天之宮遺跡				○	○			集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『荒砥天之宮遺跡』
56	二之宮宮下西遺跡				○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『二之宮宮下西遺跡』
57	二之宮宮下東遺跡				○	○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『二之宮宮下東遺跡』
58	荒砥宮原遺跡				○				散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡』
59	荒砥島原遺跡			○	○	○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『荒砥島原遺跡』

第2章 周辺の環境

周辺遺跡一覧(3)

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	近代	種別	文献
60	荒砥青柳遺跡					○			散布地、集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』
61	荒砥宮田遺跡		○		○	○	○		集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『荒砥宮田遺跡Ⅰ』、2004『荒砥宮田遺跡Ⅱ 荒砥前田遺跡』
62	下鶴谷遺跡		○			○			散布地、集落、生産遺跡	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985『柳久保遺跡群Ⅰ』、1987『柳久保遺跡群Ⅳ』
63	柳久保遺跡群	○	○		○	○			生産遺跡、その他	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985『柳久保遺跡群Ⅲ』、1987『柳久保遺跡群Ⅳ』
64	中鶴谷遺跡				○	○			古墳、生産遺跡	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1988『柳久保遺跡群Ⅵ』
65	頭無遺跡	○	○		○	○			集落、生産遺跡	前橋市1988『柳久保遺跡群Ⅶ』
66	諏訪遺跡		○			○			散布地、集落、生産遺跡	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1986『柳久保遺跡群Ⅲ』
67	荒砥諏訪西遺跡				○	○	○		生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』、2003『荒砥諏訪西遺跡Ⅱ・荒砥諏訪遺跡』
68	諏訪西遺跡				○				古墳	群馬県教育委員会1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
69	荒砥諏訪遺跡				○				生産遺跡、その他	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『荒砥諏訪西遺跡Ⅱ・荒砥諏訪遺跡』
70	諏訪遺跡				○				墓その他	群馬県教育委員会1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
71	大久保遺跡				○	○			集落、生産遺跡	前橋市1971『前橋市史第1巻』
72	荒子小学校校庭遺跡				○	○			集落、生産遺跡	前橋市埋蔵文化財発掘調査団1990『荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡』
73	川籠皆戸遺跡				○	○			集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
74	堤東遺跡				○	○			集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1985『堤東遺跡』
75	上西原遺跡					○			集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『上西原・向原・谷津』、1999『上西原遺跡』
76	北原遺跡				○	○			集落	群馬県教育委員会1987『丸山・北原』
77	新山遺跡				○				集落	群馬県教育委員会1986『昭和61年度荒砥北部遺跡群 谷津遺跡・昆布替戸遺跡・新山遺跡・上鶴谷遺跡』
78	丸山遺跡				○				集落	群馬県教育委員会1987『丸山・北原』、1988『丸山・北田下・中畑・村主・中山B』
79	向原遺跡				○	○			集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『上西原・向原・谷津』、1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
80	東前田北遺跡				○		○		集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『昭和60年度荒砥北部遺跡群 山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
81	東原西遺跡				○				集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『昭和60年度荒砥北部遺跡群 山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
82	寺前遺跡				○				集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『昭和60年度荒砥北部遺跡群 山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
83	寺東遺跡				○				集落、生産遺跡	群馬県教育委員会1986『昭和60年度荒砥北部遺跡群 山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
84	泉沢谷津遺跡		○		○		○		集落、生産遺跡	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『泉沢谷津遺跡』
85	今井道上遺跡				○	○			集落	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『今井道上遺跡』

体をとおしてその層厚も薄い。遺跡地は、少なからず土地の改変を受けているものと考えられる。また、基本土層中には起源を特定できるようなテフラも認められなかった。

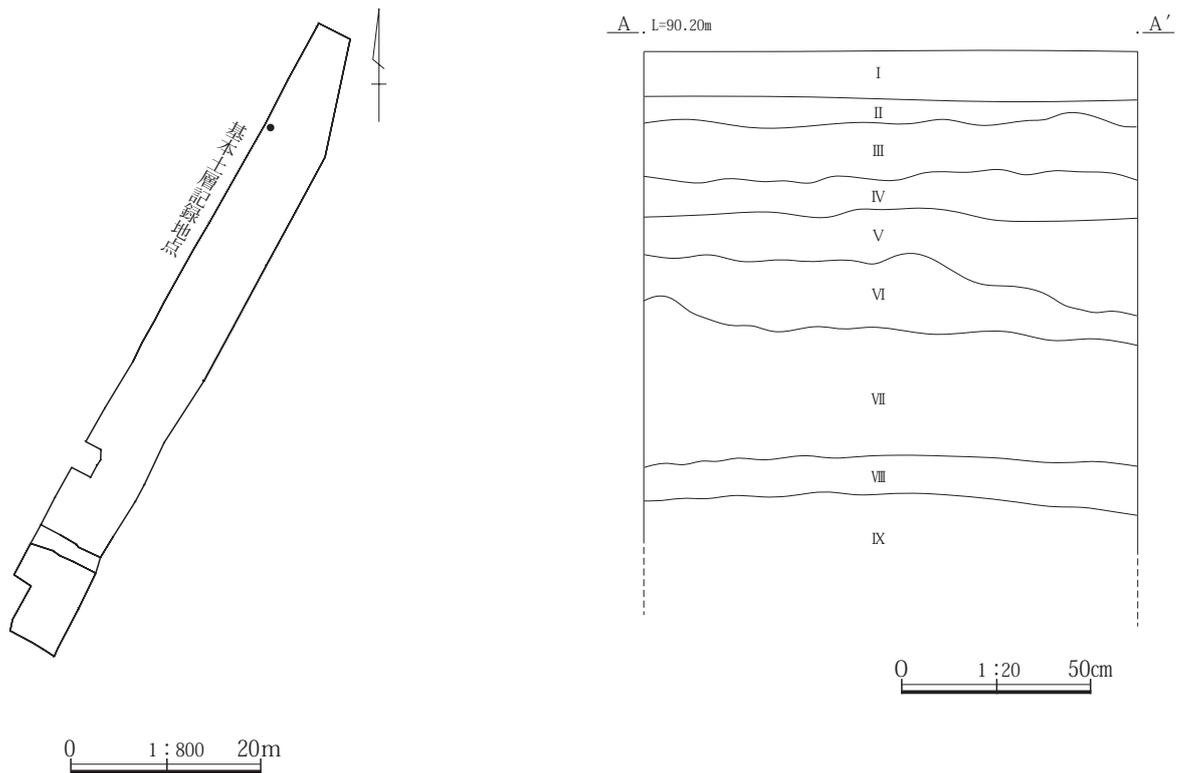
現表土から下層の基本土層(柱状図)を第5図に示した。基本土層は、ローム層の堆積が認められた発掘区北側で記録した。

【基本土層】

- I層 黒褐色土(10YR3/1)細粒白色軽石、黄橙色土粒含む。
- II層 にぶい黄橙色土(10YR6/3)黄褐色ロームブロックを多量に含む。細粒白色軽石、黒色土ブロック含む。

- III層 黄褐色土(10YR5/8)細粒白色軽石を全体に含む。ローム層。
- IV層 明黄褐色土(2.5Y7/6)細粒白色軽石を少量含む。しまりあり。ローム層。
- V層 黄色土(2.5Y8/6)細粒白色軽石を少量含む。しまりあり。ローム層。
- VI層 淡黄色土(2.5Y8/3)細粒白色軽石をわずかに含む。
- VII層 灰白色土(2.5Y8/2)粘性強い。
- VIII層 黄色土(5Y8/8)灰白色土ブロックを含む。細粒白色軽石を少量含む。粘質土。
- IX層 黄褐色土(10YR5/6)灰白色土ブロックを少量含む。褐色土ブロックを含む。粘質土。始良丹沢火山灰下の暗色帯に相当する。

基本土層



第5図 基本土層断面図

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 概要

本遺跡は、赤城山南麓地域の標高約90mの地点に立地する。赤城山の南麓地域では数多くの小河川が流れ下り、最終的には群馬県と埼玉県の間境付近を東流する利根川に至る。当該地域では、それらの小河川に伴う低地域と台地が入り組んだ複雑な地形的様相をみせる。遺跡地の東側近接地には大泉坊川が南流し、それに伴う低地が広がる。また西には、江木新沼方面から下る小河川とそれに付随する低地が認められる。これら二つの低地域は、遺跡の南約600mの場所で合流し、二つの低地に挟まれた台地は南北に細長く伸びて舌状台地を形成している。本遺跡は、そのような舌状台地の先端付近から約600m北方向の台地側に入った場所にあり、台地の東端に立地する。まさに台地から低地への移行部分にあたり、南東方向に緩やかに傾斜している。

竪穴住居は5軒検出された。調査区範囲の幅が狭いため、一軒の竪穴住居を全体的に検出したものはなく、いずれの竪穴住居も部分的な検出にとどまっている。年代別にみると、9世紀第2四半期に帰属するものが2棟(1・3号竪穴住居)、9世紀第3四半期に帰属するものが1棟(2号竪穴住居)、9世紀後半に帰属するものが2棟(4・5号竪穴住居)確認された。遺跡地は、9世紀代は主に集落として営まれていたと言える。

土坑は10基が確認された。発掘調査区の特定の地域に偏在することなく全体に散在する。帰属年代としては、出土遺物から9世紀前半の可能性のあるもの1基(5号土坑)、平安時代の可能性のあるもの1基(8号土坑)が確認された。また、埋没土層との関係から、浅間C軽石降下後に帰属するもの2基(3・7号土坑)、浅間B軽石降下後に帰属するもの3基(1・2・4号土坑)、浅間A軽石降下後に帰属するもの2基(6・10号土坑)が確認され、時期不明のもの1基(9号土坑)である。土坑の用途等については不明である。

ピットは25基が確認された。掘立柱建物、柵列の存在をうかがわせるような規格的なピットの並びは認められ

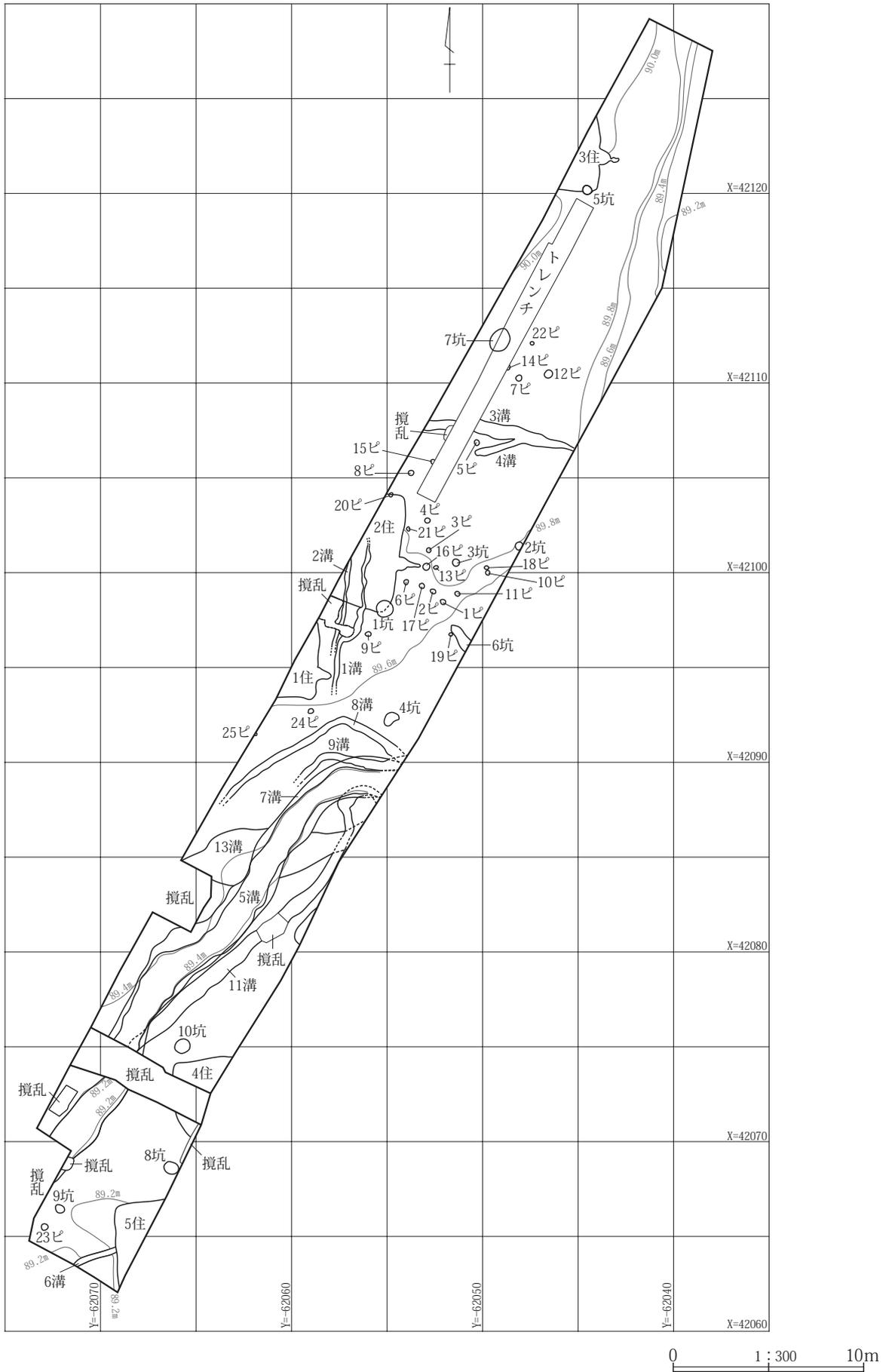
ない。時期的には、埋没土層との関係から浅間A軽石降下後に位置づけられる可能性があるものが23基(1～14、16～21、23～25号ピット)、時期不明のもの2基(15・22号ピット)が確認された。

溝は11条が確認された。いずれの溝も流水の形跡は認められず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。特に、溝6条(5・7・8・9・11・13号溝)は、いずれも走向がほぼ北東-南西方向であり、同一地点に切り合い関係をもち集中分布する。遺構の平面的な切り合い関係及び土層断面から、(古)11号溝→13号溝→7号溝→5号溝→8号溝→9号溝(新)という年代的な変遷が追える。さらに、5号溝の埋没土層最下部には、浅間B軽石の一次堆積層が確認されている。浅間B軽石降下を相前後する年代において、当該地周辺を区画する目的で繰り返し同じ場所に溝が作成されている。

前述した6条以外の溝は、発掘調査区内に分散する。そのうちの溝3条(1・2・6号溝)は、埋没土層との関係から浅間B軽石降下後に帰属する可能性が高い。また、溝2条(3・4号溝)は同じく埋没土層との関係から浅間A軽石降下後に帰属する可能性が高い。

表土や攪乱など遺構外からも遺物が出土している。特に、縄文時代の遺物としては、主に縄文時代早期・茅山式、縄文時代前期・諸磯b式、縄文時代前期末葉に帰属する土器が確認された。発掘調査区内では縄文時代の遺構は発見されていないが、付近には縄文時代の集落が展開すると予想される。

縄文時代以降の遺構調査が終了した後、調査坑を設定し旧石器時代の調査をおこなった。調査坑は2箇所(1号調査坑・2号調査坑)を設定した。いずれの調査坑からも、旧石器時代の遺物は確認されなかった。



第6図 遺構全体図

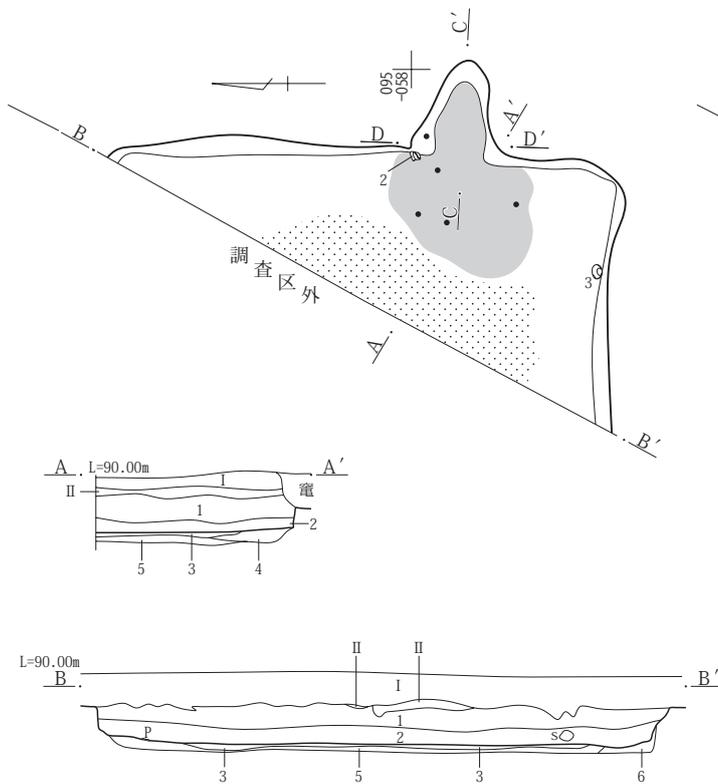
第2節 竪穴住居

竪穴住居は5軒検出された。各竪穴住居の平面的な切り合い関係は認められず、調査区全体に散在する傾向がある。時代別にみると、9世紀第2四半期に帰属するものが2軒(1・3号竪穴住居)、9世紀第3四半期に帰属するものが1軒(2号竪穴住居)、9世紀後半に帰属するものが2軒(4・5号竪穴住居)確認された。

1号竪穴住居(第7・8図、P.L.3・4・5・27)

位置 X=42093~098、Y=-62057~061。

1号竪穴住居



1号竪穴住居

1. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石を含む。黒色土小ブロック、明赤褐色土粒、黄褐色土ブロックを少量含む。
2. 褐色土(10YR4/6) 細粒白色軽石、黄褐色土ブロックを少量含む。しまりない。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロックφ5mm~1cmを10%含む。貼り床。
4. 黒色土(10YR2/1) 灰主体で焼土粒をわずかに含む。しまりやや強い。
5. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土ブロックを5%含む。しまり強い。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒をわずかに含む。しまり強い。

重複 なし。

平面形状 西側の大部分が調査区外となるが、調査区にかかっている部分からすると方形と考えられる。

主軸方位 N-92°-E。

規模 長軸(3.98)m、短軸(2.21)m。

床面積 (4.88)m²。

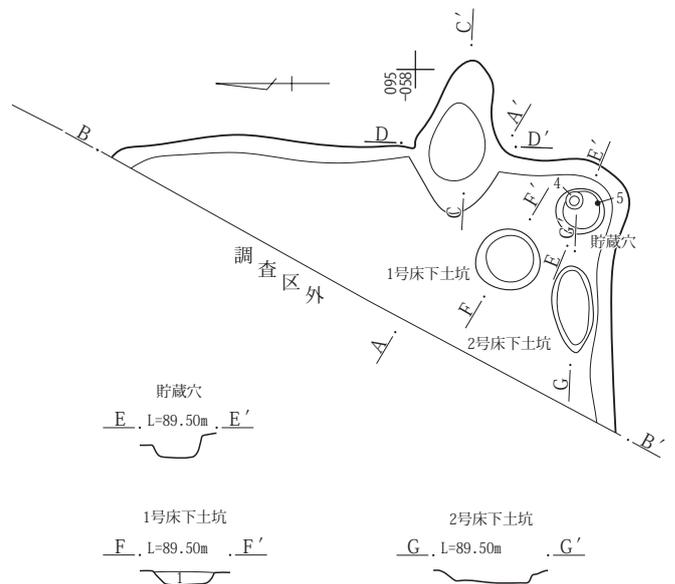
埋没土層 2層に分離されるが、いずれの土層も褐色土で細粒白色軽石が認められる。この細粒白色軽石は浅間C軽石の可能性が高い。

壁高 0.13~0.24m。

床面 ほぼ平坦であり、全体にわたり貼床となっている。

竈の前付近において広範囲に硬化面が認められた。

1号竪穴住居掘方



1号竪穴住居1号床下土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土ブロックφ5mm~1cmを5%含む。わずかに灰が混じる。しまりやや弱い。

第7図 1号竪穴住居平断面

掘方 竪穴住居の全体にわたり、深さ約10cmのほぼ一定の深さで認められる。4層に分離され、黒褐色土主体の土で埋め戻し床面としている。竪穴住居の中心部に、ロームブロックを含む土層(第7図の3層)によって貼床が造られている。

竈 東壁面、南よりに設置。長さ0.80m、幅0.45m。

貯蔵穴 南隅に設置。円形、径0.35m、深さ0.16m。

柱穴 確認されなかった。

床下土坑 1号床下土坑、円形、径0.51m、深さ0.10m。

2号床下土坑、楕円形、長径0.66m、短径0.36m、深さ0.12m。

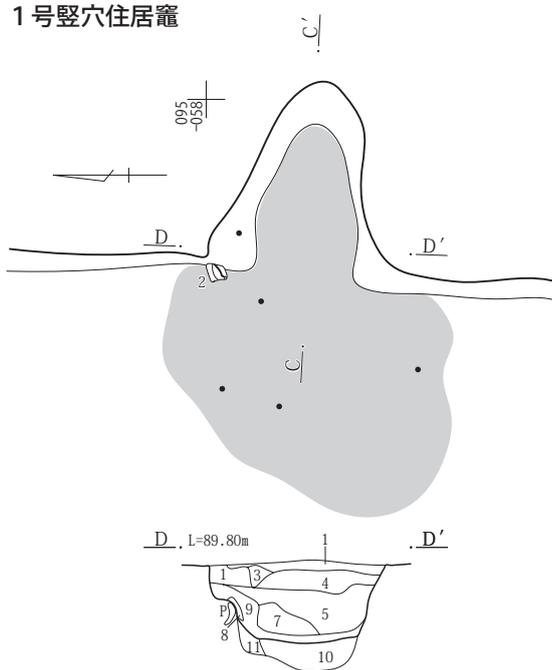
周溝 確認されなかった。

炭化材 確認されなかった。

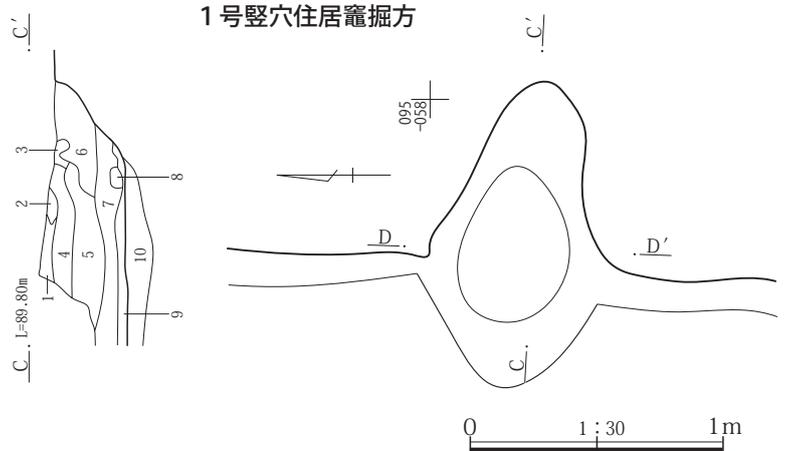
遺物 土師器杯1点(1)・甕1点(5)、須恵器杯3点(2・3・4)を図示した。土師器甕(5)と須恵器杯(4)は、いずれも貯蔵穴から出土した。他に、土師器片1041g、須恵器片286gが出土しているが、小破片のため掲載しなかった。

時期と所見 出土遺物から、本竪穴住居は9世紀第2四半期に帰属するものと推定される。

1号竪穴住居竈



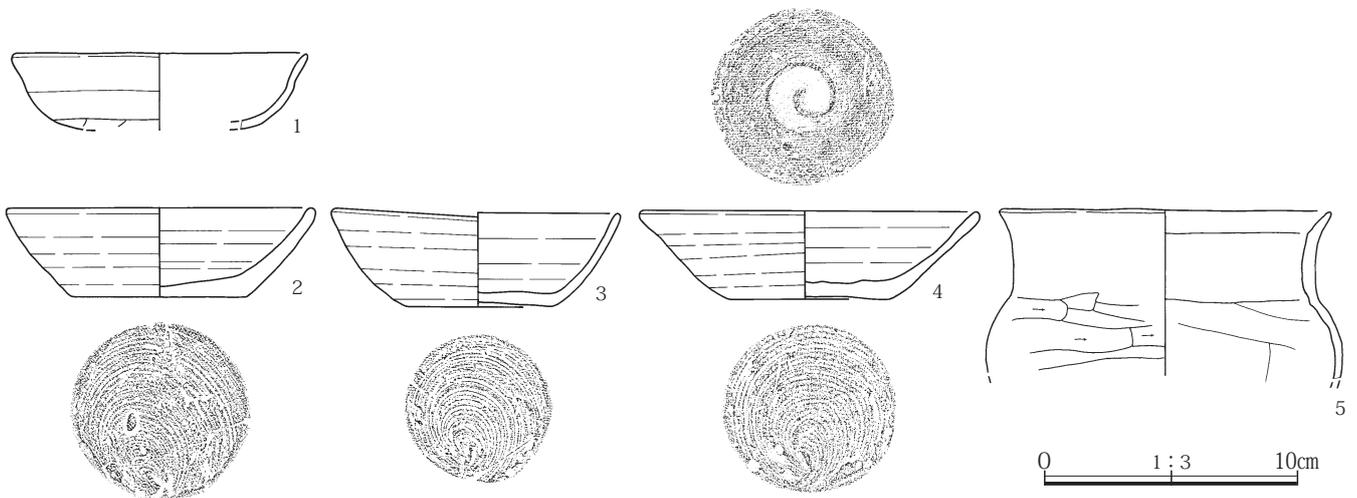
1号竪穴住居竈掘方



1号竪穴住居竈

1. 灰黄褐色土(10YR5/2) 細粒白色軽石を含む。焼土粒を少量含む。ややしまりあり。
2. 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土ブロック主体。
3. 黒色土と焼土粒の混合土。
4. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒、ローム粒を全体に混入する。粘質性帯びる。
5. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒、焼土ブロックを含む。細粒白色軽石を少量含む。
6. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒、焼土粒を含む。ややしまりあり。
8. 黒褐色土(10YR3/2) 赤褐色焼土粒を含む。
9. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒、ローム粒を全体に混入する。粘質性帯びる。
10. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒を全体に含む。しまりあり。
11. 黒色土(10YR2/1) 焼土ブロックを少量含む。

1号竪穴住居出土遺物



第8図 1号竪穴住居竈平面、出土遺物

2号竪穴住居(第9~11図、P.L. 6・7・8・9・10・27)

位置 X=42098~104、Y=-62053~058。

重複 1号溝、2号溝、1号土坑、20号ピットと重複。
本遺構が最も古い。

平面形状 西側の大部分が調査区外となるが、調査区にかかっている部分からすると方形と考えられる。

主軸方位 N-108°-E。

規模 長軸6.19m、短軸(3.52)m。

床面積 (14.03) m²。

埋没土層 8層に分離される。1層と2層には浅間B軽石を含む。3層から5層にかけては白色軽石が認められ

るが、これは浅間C軽石の可能性が高い。

壁高 0.09~0.16m。

床面 ほぼ平坦であり、全体にわたり貼床となっている。

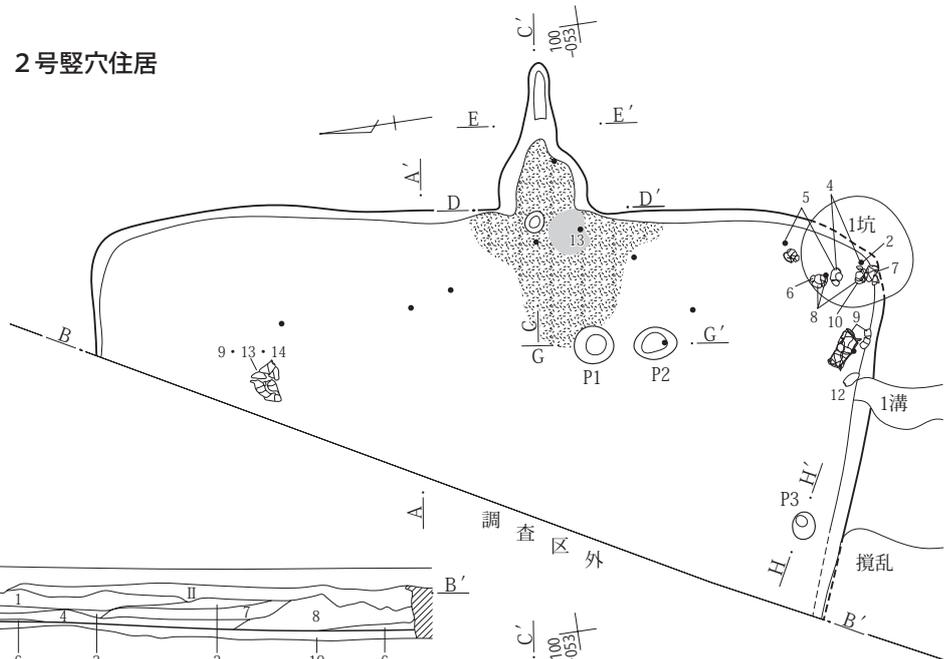
掘方 竪穴住居の全体にわたり、深さ5~10cmのおおむね一定の深さで認められる。2層に分離され、ロームブロックを含む土で埋め戻して床面としている。

竈 東壁面ほぼ中央に設置。長さ1.19m、幅0.50m。

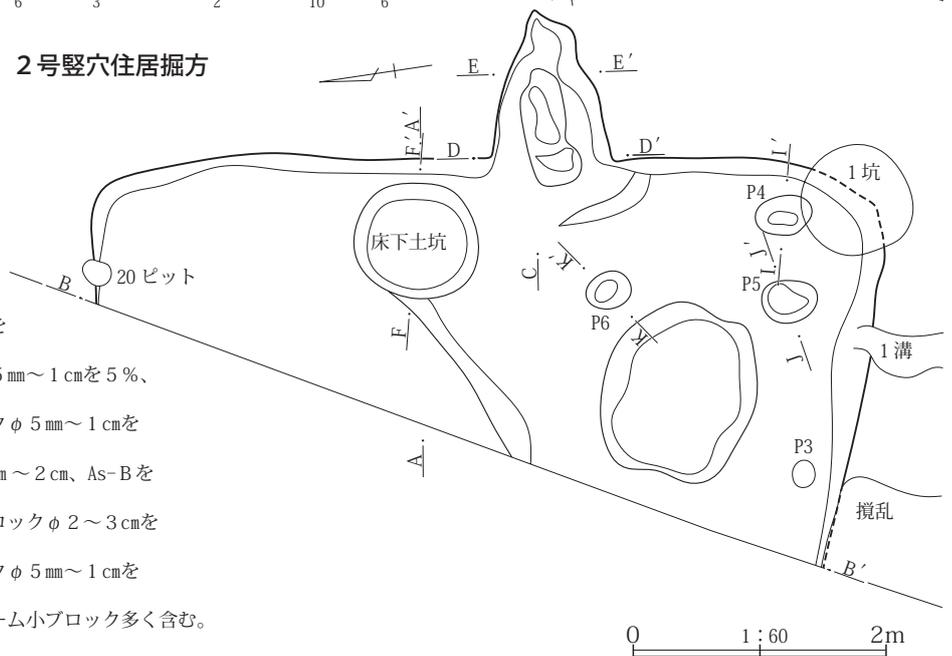
貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 P1、円形、径0.31m、深さ0.14m。P2、楕円形、長径0.34m、短径0.25m、深さ0.10m。P3、楕円形、長径0.22m、短径0.18m、深さ0.25m。P4、楕円形、

2号竪穴住居



2号竪穴住居掘方



2号竪穴住居

1. 黒褐色土(10YR3/2) As-Bを多量に含む砂質土。かたくしまり強い。
2. 黒褐色土(10YR2/3) As-Bを多量に含む砂質土。しまり強い。
3. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石を5%、炭化物粒、ローム粒をわずかに含む。かたくしまり強い。
4. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石、ローム粒をわずかに含む。かたくしまり強い。
5. 黒褐色土(10YR3/1) 灰、焼土ブロックφ5mm~1cmを5%、白色軽石をわずかに含む。しまり強い。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックφ5mm~1cmをわずかに含む粘質土。しまり強い。
7. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックφ1cm~2cm、As-Bを5%含む。しまり強く粘性あり。
8. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒、ロームブロックφ2~3cmをわずかに含む。しまり強くやや粘性あり。
9. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロックφ5mm~1cmをわずかに含む。しまり強い。
10. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒、ローム小ブロック多く含む。

第9図 2号竪穴住居平断面

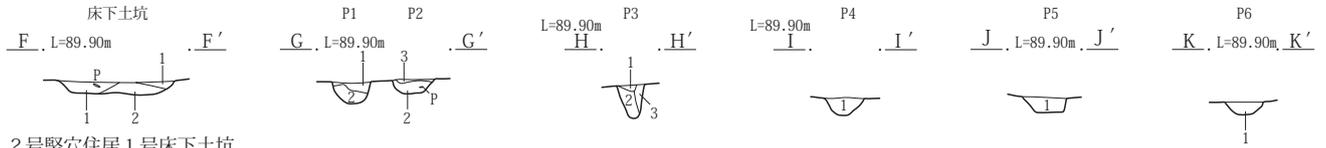
形、長径0.44m、短径0.31m、深さ0.15m。P 5、楕円形、長径0.43m、短径0.34m、深さ0.24m。P 6、楕円形、長径0.35m、短径0.30m、深さ0.13m。

床下土坑 楕円形、長径0.98m、短径0.91m、深さ0.10m。

周溝 確認されなかった。

炭化材 確認されなかった。

遺物 土師器杯9点(1～9)・甕2点(13・14)、黒色土器杯1点(10)、須恵器杯蓋1点(11)、灰釉陶器碗1点(12)を図示した。土師器杯(5)は掘方からの出土であり、土師器杯2点(2・8)・甕(13)と黒色土器杯(10)は床下土坑からの出土である。また、須恵器杯蓋(11)は竈掘方から出土した。



2号竪穴住居1号床下土坑

1. 褐灰色土(10YR4/1) 炭化物粒、焼土粒を5%含む。しまり強い。
2. 明黄褐色土(2.5Y6/8) 灰と粘土の互層に焼土粒を5%含む。しまり強い。

2号竪穴住居P1・P2

1. 黒褐色土(10YR2/2) 白色軽石をわずかに含む。しまり強くやや粘性あり。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) くすんだロームブロックφ1～2cmを10%含む。しまりやや強い。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 白色軽石を5%含む。しまり強い。

2号竪穴住居P3

1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土ブロックφ5mm～1cmを5%含む。わずかに灰が混じる。しまりやや弱い。
2. 黒褐色土(10YR2/2) くすんだローム粒をわずかに含む。しまりやや弱く粘性あり。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりかなり弱く粘性あり。

2号竪穴住居P4

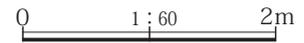
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土小ブロックを5%含む。しまりやや弱い。

2号竪穴住居P5

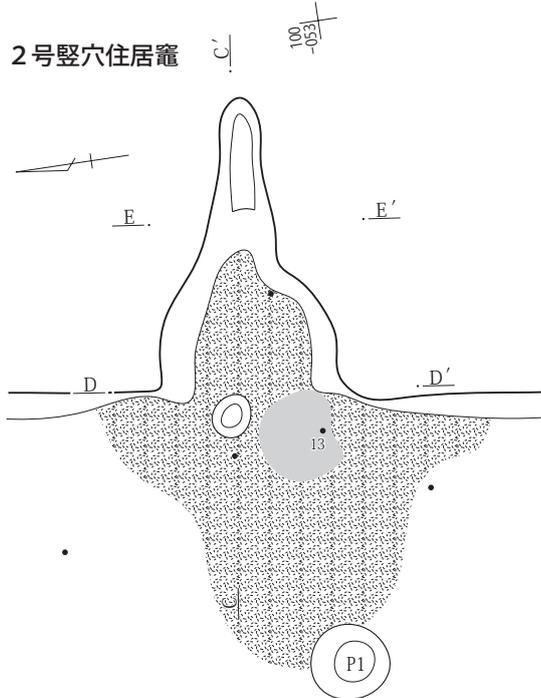
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土小ブロックを5%含む。しまりやや弱い。

2号竪穴住居P6

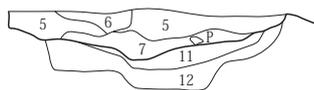
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土小ブロックわずかに含む。しまりやや弱い。



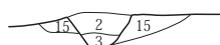
2号竪穴住居竈



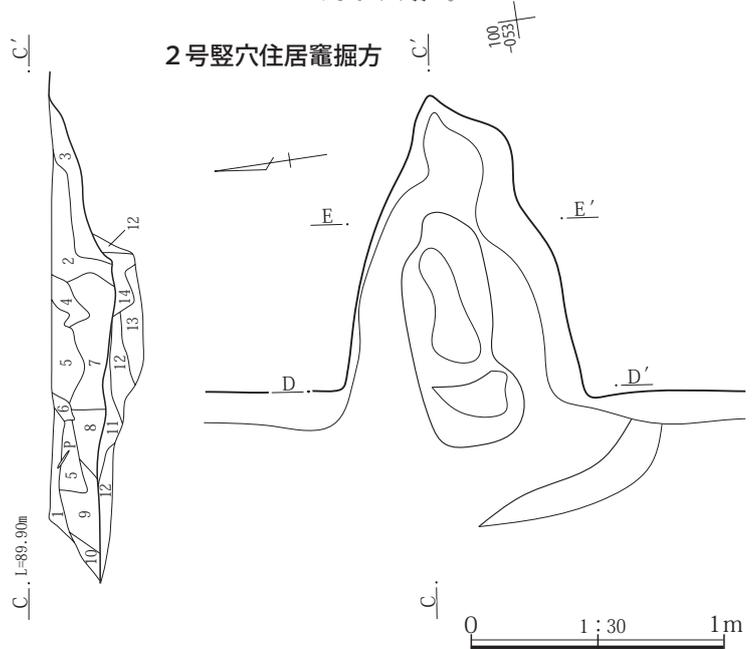
D, L=89.90m



E, L=89.90m

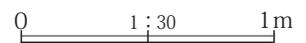


2号竪穴住居竈掘方



2号竪穴住居竈

1. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石、焼土粒をわずかに含む。
2. 灰褐色土(7.5YR5/2) 焼土(5YR6/8)ブロックφ1～3cmを20%含む。しまり強く粘性あり。
3. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土ブロックφ5mm～1cmをわずかに含む。灰が少量混じる。しまり強く粘性あり。
4. 褐灰色土(7.5YR5/1) 焼土粒、焼土ブロックを30%含む粘質土。かたくしまり強い。
5. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒、焼土粒をわずかに含む。しまり強くやや粘性あり。
6. にぶい黄色土(2.5Y6/3) 粘質土、ローム粒をわずかに含む。しまり強い。
7. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒、焼土ブロック1～2cmを10%、灰を3%含む。しまり強い。
8. 灰褐色土(7.5YR5/2) 粘土、灰、焼土含む。しまりやや強い。
9. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土ブロックφ5mm～1cmを10%含み、下部に灰が混じる。しまり強い。
10. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石をわずかに含む。しまり強い。
11. 黒色土(10YR2/1) 灰、焼土ブロックφ5mm～1cmを10%含む。しまりやや弱い。
12. 褐灰色土(10YR4/1) 炭化物粒・焼土粒をわずかに含む粘質土。しまり強い。
13. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ロームブロックφ5mm～1cmをわずかに含む。しまり強い。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土ブロックφ5mm～1cm、灰をわずかに含む。しまりやや弱い。
15. 橙色土(7.5YR7/6) 焼土粒主体で下部に暗褐色土が混じる。しまり強い。



第10図 2号竪穴住居断面、竈平面

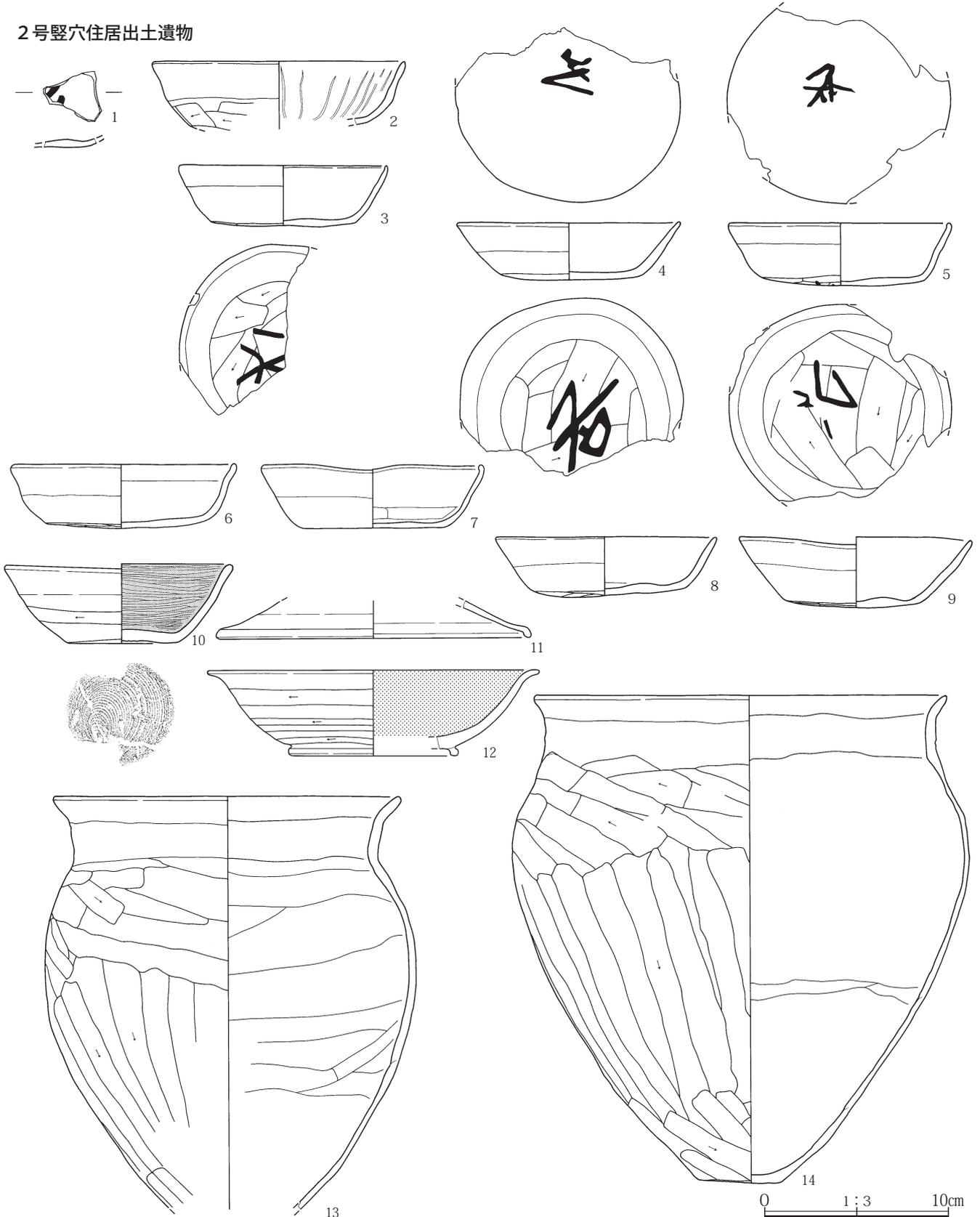
第3章 確認された遺構と遺物

土師器杯4点(1、3~5)には墨書がある。1は判読不能。3は「各」、4、5は内面外面ともに「各」と判読できる。他に、土師器片1375g、須恵器片116gが出土し

ているが、小破片のため掲載しなかった。

時期と所見 出土遺物から、本竪穴住居は9世紀第3四半期に帰属するものと推定される。

2号竪穴住居出土遺物



第11図 2号竪穴住居出土遺物

3号竪穴住居(第12~14図、P L. 10・11・12・13・14・28)

位置 X=42120~124、Y=-62043~046。

重複 5号土坑と重複。本遺構が5号土坑より古い。

平面形状 西側の大部分が調査区外となるが、調査区にかかっている部分からすると方形と考えられる。

主軸方位 N-97°-E。

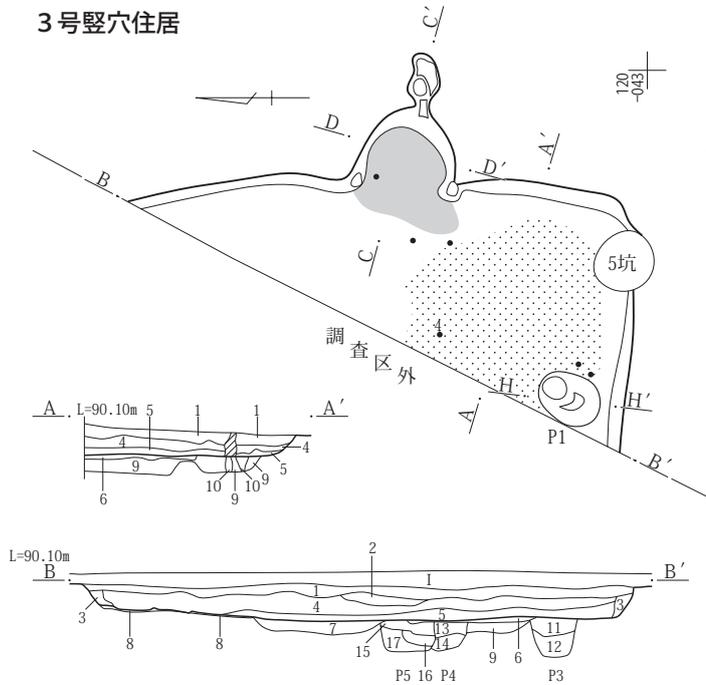
規模 長軸(3.85)m、短軸(2.26)m。

床面積 (5.08)m²。

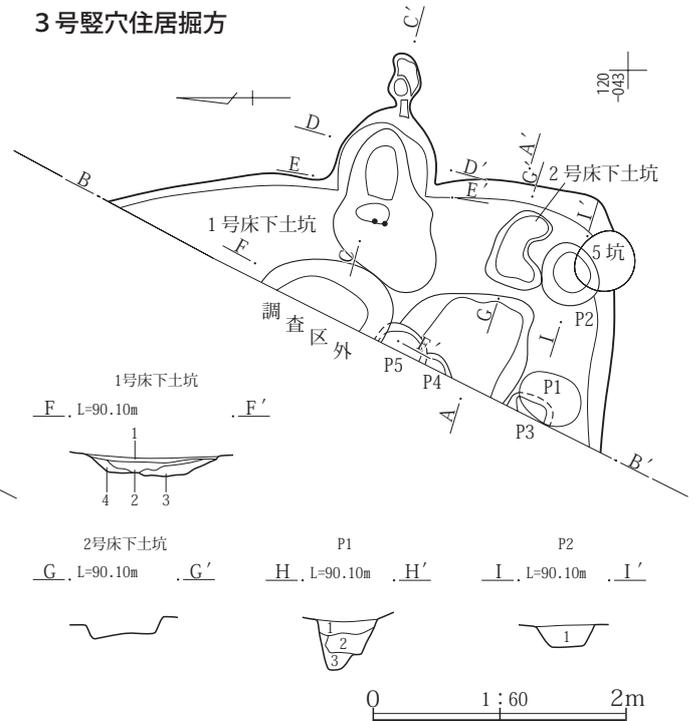
埋没土層 5層に分離される。1層、2層、4層、5層には細粒白色軽石が認められるが、これは浅間C軽石の可能性が高い。

壁高 0.02~0.18m。

3号竪穴住居



3号竪穴住居掘方



3号竪穴住居

1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石を多量に含む。浅黄橙色粒、褐色土ブロックを含む。しまりあり。
2. 褐色土(10YR4/6) 細粒白色軽石、浅黄橙色粒塊を含む。
3. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒、ブロックと黒色土が混合する。
4. 暗褐色土(10YR3/4) 細粒白色軽石を多量に含む。浅黄橙色粒、褐色土ブロック、黒色土ブロックを含む。下部に焼土粒が混入する。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 細粒白色軽石、浅黄橙色粒、焼土粒をわずかに含む。やや粘質性を帯びる。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック、細粒白色軽石を多量に含む。ややしまりあり。
7. 黒褐色土(10YR2/3) 細粒白色軽石、ロームブロック、粒を含む。しまり強い。
8. 黄褐色土(10YR5/8) ロームブロック、粒主体。黒色土を少量含む。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) 8層より大きいロームブロックを多量に含む。
10. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細粒白色軽石、ローム粒を含む。
11. 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロック、ローム粒を多量に含む。黒色土ブロックを含む。3号竪穴住居P 3。
12. 黄褐色土(10YR5/8) ロームブロック、ローム粒主体。黒褐色土を少量含む。3号竪穴住居P 3。
13. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒、細粒白色軽石、焼土粒が混在する。3号竪穴住居P 4。
14. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ロームブロック、黒色土ブロックを含む。3号竪穴住居P 4。
15. 黄褐色土(10YR5/8) ロームブロック、ローム粒主体。細粒白色軽石を少量含む。しまり強い。3号竪穴住居P 5。
16. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ロームブロック、ローム粒を含む。黒褐色土を少量含む。3号竪穴住居P 5。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック、ローム粒を多量に含む。黒色土ブロックを少量含む。しまり強い。3号竪穴住居P 5。

3号竪穴住居 1号床下土坑

1. 黒褐色土(10YR2/3) 細粒白色軽石、浅黄橙色粒、焼土粒をわずかに含む。やや粘質性を帯びる。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック、ローム粒、焼土粒を多量に含む。やや粘質性を帯びる。
3. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土粒を多量に含む。下部にロームブロックを含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ロームブロック、ローム粒を含む。しまり弱い。

3号竪穴住居 P 1

1. 黒褐色土(10YR2/3) 細粒白色軽石、ローム粒を含む。やや粘質。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック、ローム粒を多量に含む。黒色土ブロックを少量含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ロームブロック、ローム粒を含む。しまり弱い。

3号竪穴住居 P 2

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック、ローム粒を多量に含む。細粒白色軽石、黒褐色土ブロックを少量含む。

第12図 3号竪穴住居平面断面

床面 ほぼ平坦である。中央付近を中心として広範囲が貼床となっているが、一部に地山を床面としている箇所が認められる。竈の手前右側に広範囲にわたり硬化面が認められる。

掘方 竪穴住居の中央付近が深く、周辺部が浅い。中央付近の深さは約10cmであり、周辺部の深さは約3cm以下である。4層に分離され、ロームブロックを含む土で埋め戻して床面としている。

竈 東壁面中央に設置。長さ1.15m、幅0.70m。

貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 P 1、楕円形、長径0.51m、短径0.39m、深さ0.24m。P 2、楕円形、長径0.51m、短径0.44m、深さ0.14m。P 3、楕円形、長径0.37m、短径(0.18)m、深さ0.26m。P 4、楕円形、長径0.24m、短径(0.12)m、

深さ0.10m。P 5、楕円形、長径0.45m、短径(0.21)m、深さ0.10m。

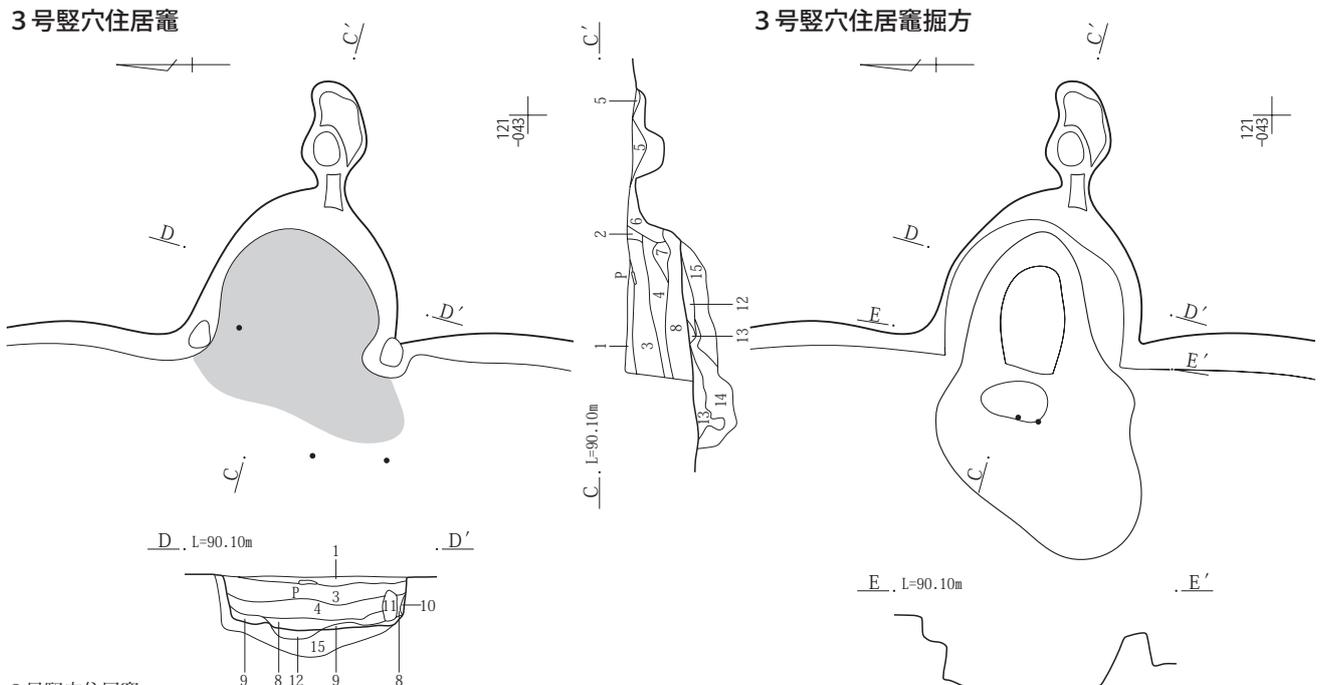
床下土坑 1号床下土坑、楕円形、長径1.06m、短径0.45m、深さ0.13m。2号床下土坑、不整形、長径0.62m、短径0.32m、深さ0.10m。

周溝 確認されなかった。

炭化材 確認されなかった。

遺物 土師器杯2点(1・2)・甕3点(3～5)を図示した。土師器甕(5)は掘方から出土した。他に、土師器片890g、須恵器片74gが出土しているが、小破片のため掲載しなかった。

時期と所見 出土遺物から、本竪穴住居は9世紀第2四半期に帰属するものと推定される。

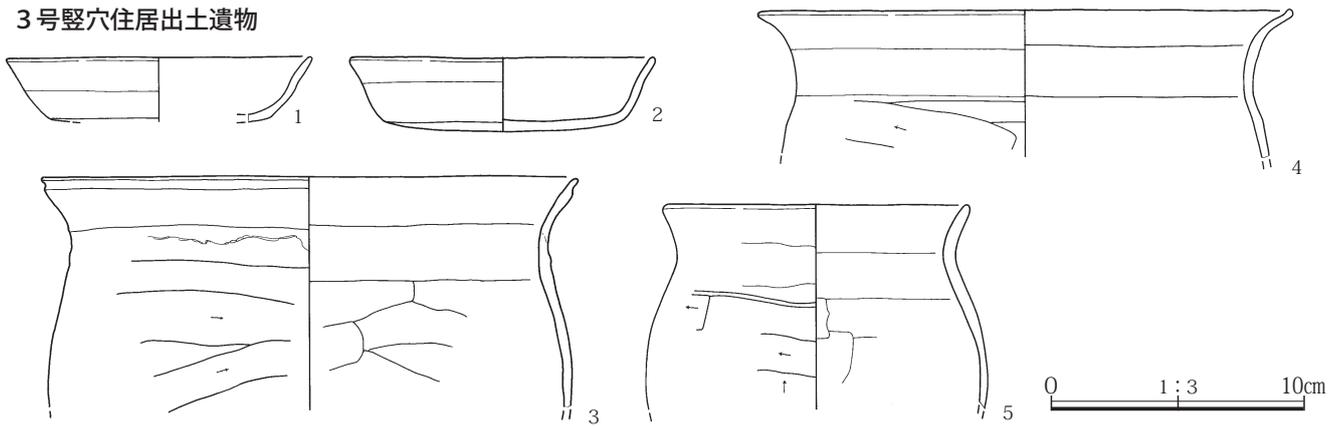


3号竪穴住居竈

1. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒、細粒白色軽石を少量含む。
2. 褐灰色土(7.5YR5/1) 焼土粒をわずかに含む。ややしまりあり。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒、ブロック、ロームブロック、細粒白色軽石を多量に含む。しまり強い。
4. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒を少量含む。やや粘質。
5. 暗褐色土(10YR3/4) 細粒白色軽石を多量に含む。焼土粒を少量含む。
6. 灰褐色土(7.5YR5/2) 粘土、灰、焼土まじり。しまりやや強い。
7. 黒褐色土(10YR3/1) 灰ブロック、焼土ブロックを含む。しまりあり。
8. 黒褐色土(10YR2/3) 灰層、焼土ブロックを多量に含む。やや粘質。
9. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒を少量含む。
10. 焼土ブロック主体。
11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 細粒白色軽石を含む。焼土粒を少量含む。
12. 褐灰色土(10YR4/1) 灰層主体。焼土粒をわずかに含む。
13. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土粒、細粒白色軽石を含む。やや粘質。
14. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒、ロームブロックを含む。しまり弱い。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土ブロック、ロームブロック、細粒白色軽石を全体に含む。ややしまりあり。

第13図 3号竪穴住居竈平面

3号竪穴住居出土遺物



第14図 3号竪穴住居出土遺物

4号竪穴住居(第15図、P L. 14・15・28)

位置 X=42070~075、Y=-62063~067。

重複 なし。

平面形状 東側の大部分が調査区外となるが、調査区にかかっている部分からすると方形と考えられる。

主軸方位 N-96°-E。

規模 長軸(3.77)m、短軸(2.65)m。

床面積 (7.52)m²。

埋没土層 5層に分離される。竪穴住居埋没後に全体を覆う土層(第15図の1層)には、浅間B軽石を含む。2層と4層には白色軽石が認められるが、これは浅間C軽石の可能性が高い。

壁高 0.25~0.33m。

床面 ほぼ平坦である。広範囲に貼床が認められるが、一部に地山を床面とする箇所が確認されている。

掘方 竪穴住居の全面にわたり認められ、深さ約10cm以下である。2層に分離され、ロームブロックを含む土で埋め戻して床面としている。

竈 確認されなかった(調査区外の可能性あり)。

貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 P 1、楕円形、長径0.44m、短径0.34m、深さ0.13m。

床下土坑 不整形、長径(0.78)m、短径(0.45)m、深さ0.10m。

周溝 確認されなかった。

炭化材 確認されなかった。

遺物 土師器杯1点(1)を図示した。他に、土師器片143g、須恵器片24gが出土しているが、小破片のため掲載しなかった。

時期と所見 出土遺物から、本竪穴住居は9世紀後半に帰属するものと推定される。

5号竪穴住居(第16図、P L. 16・17・28)

位置 X=42062~067、Y=-62066~070。

重複 6号溝と重複。本遺構が6号溝より古い。

平面形状 東側の大部分が調査区外となるが、調査区にかかっている部分からすると方形と考えられる。

主軸方位 N-96°-E。

規模 長軸(3.87)m、短軸(2.33)m。

床面積 (5.82)m²。

埋没土層 3層(第16図)については、その堆積状況からすると、竪穴住居埋没途上あるいは埋没後に掘削された土坑等の痕跡であることが想定される。竪穴住居埋没土層である2層には白色軽石が含まれるが、これは浅間C軽石の可能性が高い。

壁高 0.10~0.23m。

床面 ほぼ平坦である。全面にわたり貼床となっている。

掘方 竪穴住居の全体にわたり、深さ約5cmのおおむね一定の深さで認められる。1層確認されており、ロームを含む土で埋め戻して床面としている。

竈 確認されなかった(調査区外の可能性あり)。

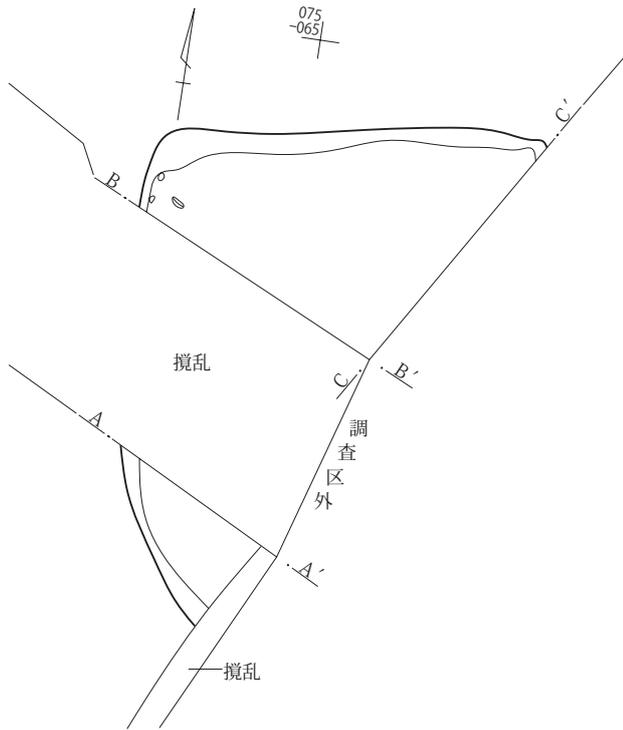
貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 P 1、楕円形、長径0.30m、短径0.24m、深さ0.11m。

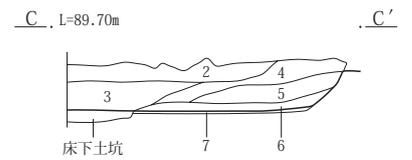
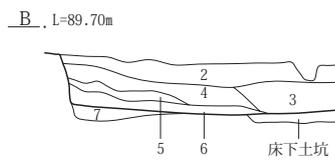
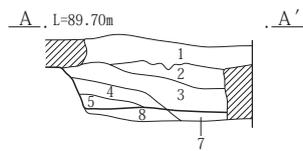
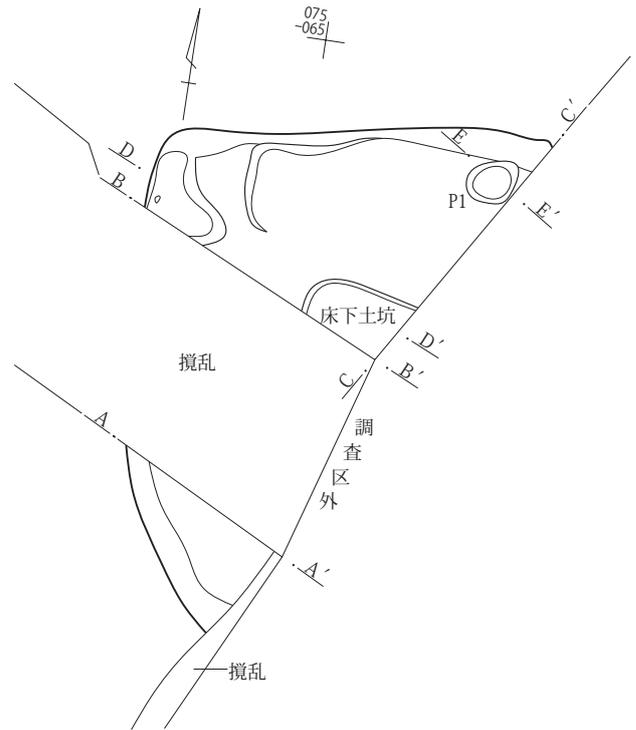
床下土坑 楕円形、長径0.50m、短径0.45m、深さ0.05m。

周溝 掘方段階において、竪穴住居周辺部をめぐる幅約15cm、深さ約10cmの溝を確認しており、これが周溝であったことも想定される。

4号竖穴住居

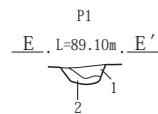


4号竖穴住居掘方



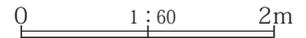
4号竖穴住居

1. 薄い灰黄褐色土でAs-Bを多量に含む砂質土
2. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石をわずかに含む。しまりやや強く粘性あり。
3. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを5%含む。しまりやや強く粘性あり。
4. 黒褐色土(10YR2/2) 白色軽石をわずかに含み、くすんだローム土が少量混じる。
5. 暗褐色土(10YR3/3) くすんだローム土・ロームブロックを15%含む。しまりやや強く粘性あり。
6. 黒褐色土(10YR3/2) くすんだローム小ブロックをわずかに含む。しまりやや弱い。
7. にぶい黄褐色土(10YR4/3) くすんだローム土主体でしまりやや強く粘性あり。
8. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロック多く含む。しまり強く粘性あり。

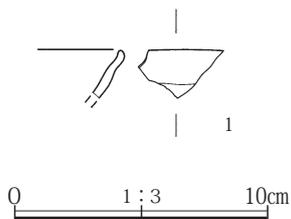


4号竖穴住居 P 1

1. 黒褐色土(10YR2/3) 灰ブロックを多く含む。焼土粒ごく少量含む。
1. 黒褐色土(10YR2/3) 灰ブロック、焼土粒を多く含む。



4号竖穴住居出土遺物



第15図 4号竖穴住居平断面、出土遺物

炭化材 確認されなかった。

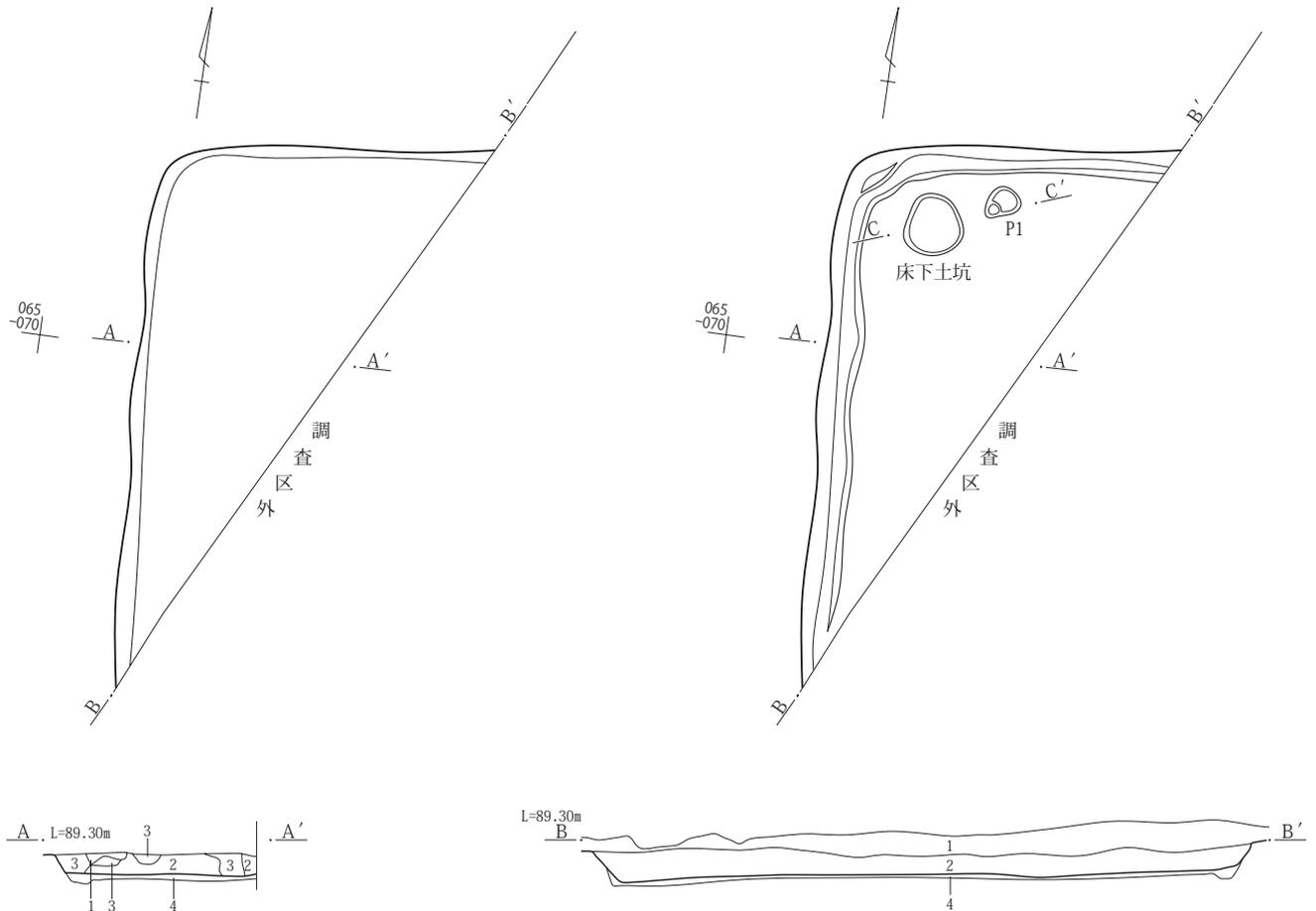
遺物 土師器杯1点(1)・甕2点(2・3)を図示した。
他に、土師器片172g、須恵器片14gが出土しているが、

小破片のため掲載しなかった。

時期と所見 出土遺物から、本竪穴住居は9世紀後半に
帰属するものと推定される。

5号竪穴住居

5号竪穴住居掘方



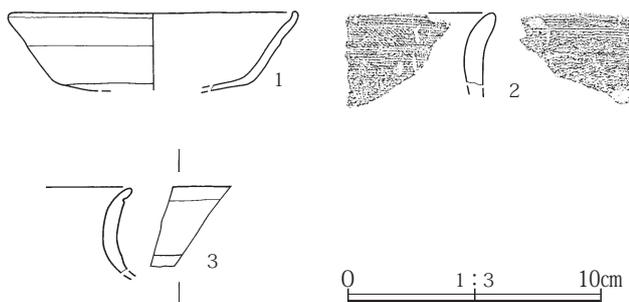
5号竪穴住居

1. 黒褐色土(10YR2/3) 細粒白色軽石を含む。褐色土ブロックを少量含む。ややしまりあり。
2. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石、褐色土ブロックを少量含む。しまり弱い。
3. 黒色土(10YR2/1) ロームブロック少量含む。しまりなし。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム30%含む。しまり強い。

5号竪穴住居床下土坑・P1

1. 黒褐色土(10YR2/3) くすんだロームをわずかに含む。しまりやや強く粘性あり。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 明るいロームを20%含む。しまりやや弱く粘性あり。

5号竪穴住居出土遺物



第16図 5号竪穴住居平断面、出土遺物

第3節 土坑

土坑は10基が確認された。発掘調査区の特定の地域に偏在することなく全体に散在する。

土坑の帰属年代としては、出土遺物から9世紀前半の可能性のあるもの1基(5号土坑)、平安時代の可能性のあるもの1基(8号土坑)が確認された。また、埋没土層との関係から、浅間C軽石降下後に帰属するもの2基(3・7号土坑)、浅間B軽石降下後に帰属するもの3基(1・2・4号土坑)、浅間A軽石降下後に帰属するもの2基(6・10号土坑)が確認され、時期不明のもの1基(9号土坑)である。

1号土坑(第17図、P.L.17)

位置 X=42097~099、Y=-62054~056。

重複 2号竪穴住居と重複。本遺構が2号竪穴住居より新しい。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-19°-W。

規模 長軸0.87m、短軸0.84m、深さ0.04m。

埋没土層 1層が観察された。浅間B軽石を多く含む砂質土である。

遺物 土師器片5gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 年代が特定できるような遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間B軽石降下後に帰属すると判断される。また、2号竪穴住居(9世紀第3四半期)との新旧関係から、少なくとも9世紀第3四半期以後の土坑と考えられる。

2号土坑(第17図、P.L.17)

位置 X=42101~102、Y=-62048。

重複 なし。

平面形状 隅丸方形。

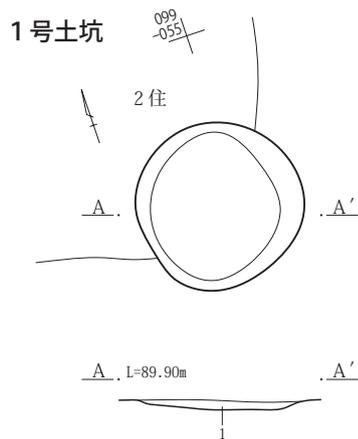
長軸方位 N-29°-W。

規模 長軸0.42m、短軸0.38m、深さ0.03m。

埋没土層 1層が確認された。浅間B軽石を多く含む砂質土である。

遺物 土師器片3gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

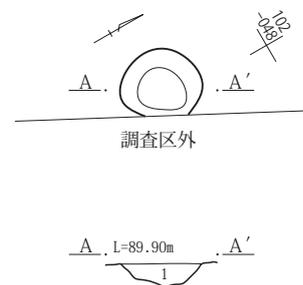
時期と所見 年代が特定できるような遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間B軽石降下後に帰属すると判断される。



1号土坑

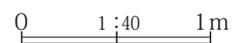
1. 黒褐色土(10YR2/3)
As-Bを多量に含む砂質土。
炭化物粒、焼土粒をわずかに含む。しまり強い。

2号土坑



2号土坑

1. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
As-Bを多量に含むあらい砂質土。
炭化物をわずかに含む。しまり強い。



第17図 1・2号土坑平面断面

3号土坑(第18図、P L. 18)

位置 X=42100~101、Y=-62051~052。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-14°-E。

規模 長軸0.39m、短軸0.37m、深さ0.26m。

埋没土層 2層が確認された。1層には白色軽石を多量に含んでいるが、これは浅間C軽石の可能性はある。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間C軽石の可能性のある白色軽石を多量に含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間C軽石降下後に帰属する可能性がある。

4号土坑(第18図、P L. 18)

位置 X=42092~093、Y=-62054~055。

重複 なし。

平面形状 不整形。

長軸方位 N-38°-E。

規模 長軸0.82m、短軸0.52m、深さ0.17m。

埋没土層 1層が確認された。浅間B軽石を含む。

遺物 土師器片3gが出土しているが、小破片のため図

示できなかった。

時期と所見 年代が特定できるような遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間B軽石降下後に帰属すると判断される。

5号土坑(第18図、P L. 18・28)

位置 X=42120~121、Y=-62044~045。

重複 3号竪穴住居と重複。本遺構が3号竪穴住居より新しい。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-20°-W。

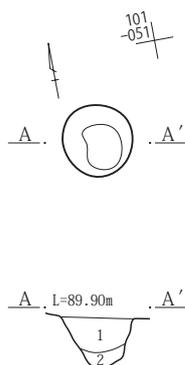
規模 長軸0.49m、短軸0.46m、深さ0.21m。

埋没土層 3層が確認された。1層には浅間B軽石を含む。3層はロームブロックと黒色土の混土層であり、人為的な埋め戻しも想定される。

遺物 須恵器杯1点を図示した。その他、土師器片8gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 出土遺物である須恵器杯の年代は9世紀前半に位置づけられることから、土坑の帰属年代も9世紀前半である可能性が指摘される。また、3号竪穴住居(9世紀第2四半期)との切り合い関係から、本土坑の方が新期に位置づけられるが、前述した須恵器杯の年代から想定される本土坑の帰属年代はこの結果に整合的である。

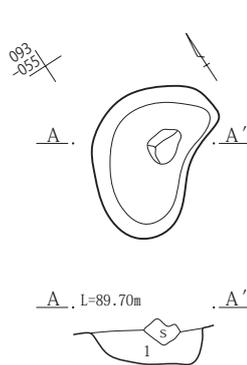
3号土坑



3号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4)
白色軽石、細粒黄色軽石を多量に含む。
炭化物粒を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)
1層より混入物少なく粘質性を帯びる。

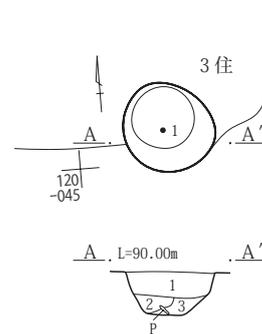
4号土坑



4号土坑

1. 褐灰色土(10YR4/1)
As-B含む。
灰白色シルトブロックを少量含む。

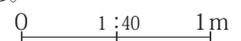
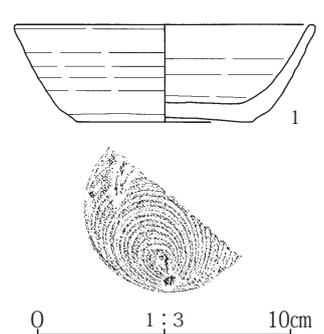
5号土坑



5号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4)
As-B、黒色土ブロック、ローム粒を全体に含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)
黒色土を多量に含む。ローム粒を含む。
しまりなし。
3. 黄褐色土(10YR5/6)
ロームブロックと黒色土が混合する。

5号土坑出土遺物



第18図 3～5号土坑平面断面、5号土坑出土遺物

6号土坑(第19図、P L. 18)

位置 X=42095~097、Y=-62050~052。

重複 なし。

平面形状 不整形。

長軸方位 N-38°-W。

規模 長軸1.39m、短軸0.52m、深さ0.14m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を多く含むが、これは浅間A軽石の可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

7号土坑(第19図、P L. 19)

位置 X=42111~113、Y=-62048~050。

重複 なし。

平面形状 長楕円形。

長軸方位 N-26°-E。

規模 長軸1.26m、短軸0.97m、深さ0.19m。

埋没土層 1層が確認された。細粒白色軽石を多く含むが、これは浅間C軽石の可能性はある。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間C軽石の可能性のある白色軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間C軽石降下後に帰属する可能性がある。

8号土坑(第19図、P L. 19・28)

位置 X=42068~069、Y=-62066~067。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-22°-E。

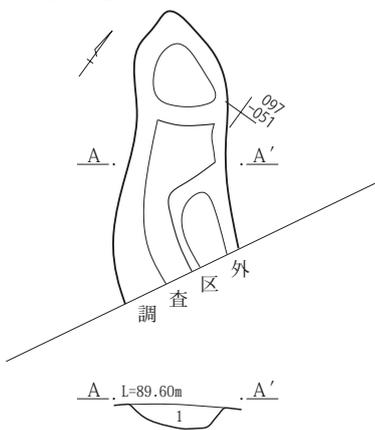
規模 長軸0.77m、短軸0.62m、深さ0.64m。

埋没土層 3層が確認された。1層と2層には白色軽石を含むが、いずれのテフラに比定されるか不明である。

遺物 須恵器杯1点を図示した。その他、土師器片48gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 出土遺物である須恵器杯の年代は、平安時代に位置づけられることから、土坑の帰属年代も平安時代である可能性が指摘される。

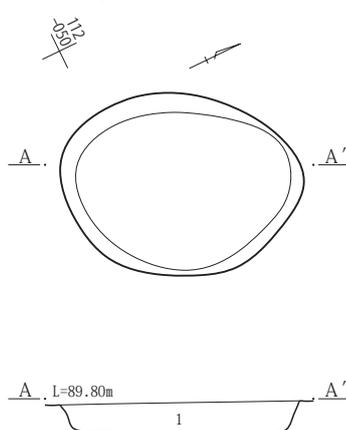
6号土坑



6号土坑

1. 黒色土(10YR2/1)
白色軽石(As-A?)を多量に含む。
しまりあり。

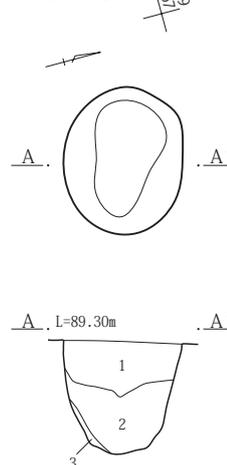
7号土坑



7号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3)
細粒白色軽石、ロームブロックを多量に含む。
やや粘質性を帯びる。

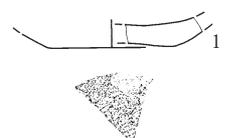
8号土坑



8号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4)
浅黄橙色シルトブロック、
細粒白色軽石を多量に含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)
細粒白色軽石、黄橙色土ブロックを含む。
3. 褐灰色土(10YR4/1)
浅黄橙色シルトブロックを多量に含む。

8号土坑出土遺物



0 1:3 10cm

0 1:40 1m

第19図 6~8号土坑平面断面、8号土坑出土遺物

9号土坑(第20図、P L. 19)

位置 X=42066~067、Y=-62072~073。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-51°-W。

規模 長軸0.53m、短軸0.42m、深さ0.48m。

埋没土層 4層が確認された。1層と2層には白色軽石を含むが、いずれのテフラに比定されるか不明である。

遺物 土師器片 5gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 年代が特定できるような遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。

10号土坑(第20図、P L. 19)

位置 X=42075、Y=-62065~066。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-64°-E。

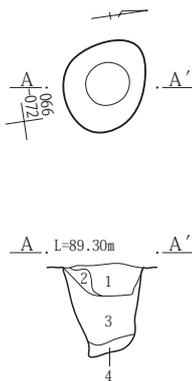
規模 長軸0.83m、短軸0.73m、深さ0.13m。

埋没土層 2層が確認された。1層には白色軽石を多く含むが、これは浅間A軽石の可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、土坑の詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を多く含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

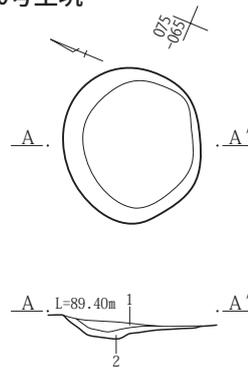
9号土坑



9号土坑

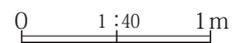
1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石を5%含む。しまり強い。
2. 黒褐色土(10YR3/2)
くすんだローム混じりで白色軽石をわずかに含む。
しまり強い。
3. 黒褐色土(10YR3/1)
土質ほぼ均一でくすんだローム粒をわずかに含む。
しまり強い。
4. 褐色土(10YR4/4)
ロームを多く含む。しまり強く粘性あり。

10号土坑



10号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2)
白色軽石を5%、焼土粒をわずかに含む。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
くすんだロームに1層が少量混じる。
ややシルト質でしまり強い。



第20図 9・10号土坑平面断面

第4節 ピット

ピットは25基が確認された。発掘調査区の中央に数多く分布する傾向があるが、掘立柱建物、柵列の存在をうかがわせるような規格的なピットの並びは認められない。

時期的には、埋没土層との関係から浅間A軽石降下後に位置づけられる可能性があるものが23基(1～14、16～21、23～25号ピット)、時期不明のもの2基(15・22号ピット)が確認された。

1号ピット(第21図、P L. 20)

位置 X=42098～099、Y=-62053。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-53°-W。

規模 長軸0.31m、短軸0.27m、深さ0.08m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

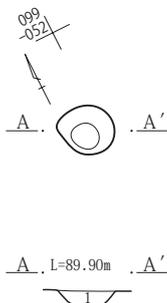
遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

2号ピット(第21図、P L. 20)

位置 X=42099、Y=-62052～053。

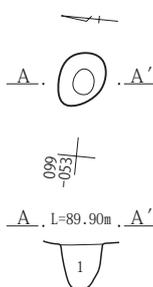
1号ピット



1号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
細粒白色軽石、黄橙色軽石を含む。
褐色土ブロックを少量含む。

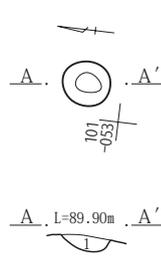
2号ピット



2号ピット

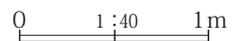
1. 暗褐色土(10YR3/3)
細粒白色軽石、黄橙色軽石を含む。
焼土粒を少量含む。

3号ピット



3号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
細粒白色軽石、黄橙色軽石を多量に含む。
焼土粒、焼土ブロックを含む。



第21図 1～3号ピット平面図

4号ピット(第22図、P L. 20)

位置 X=42102~103、Y=-62052~053。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-89°-E。

規模 長軸0.29m、短軸0.27m、深さ0.19m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

5号ピット(第22図、P L. 20)

位置 X=42106~107、Y=-62050~051。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-20°-W。

規模 長軸0.31m、短軸0.26m、深さ0.18m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

6号ピット(第22図、P L. 20)

位置 X=42099~100、Y=-62054。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-64°-E。

規模 長軸0.27m、短軸0.24m、深さ0.27m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

7号ピット(第22図、P L. 20)

位置 X=42110~111、Y=-62048~049。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-33°-E。

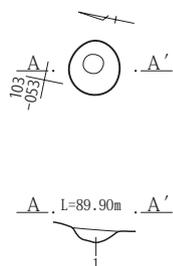
規模 長軸0.33m、短軸0.29m、深さ0.11m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

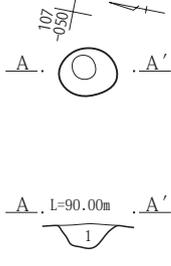
4号ピット



4号ピット

1. 暗褐色土(10YR3/3)
細粒白色軽石を含む。
褐色土ブロックを少量含む。

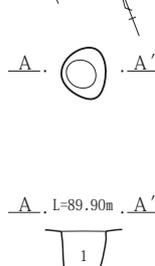
5号ピット



5号ピット

1. 黒褐色土(10YR3/1)
白色軽石を多量に含む。
しまり強い。

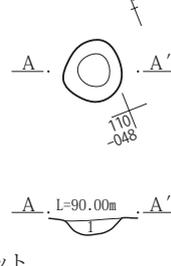
6号ピット



6号ピット

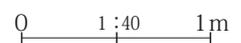
1. 褐灰色土(10YR4/1)
上部に細粒白色軽石、ローム粒を少量含む。
下部に鉄分が沈着する。

7号ピット



7号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
あらい砂質土。白色軽石を30%含む。
しまり強い。



第22図 4～7号ピット平面図

8号ピット(第23図、P L. 20・21)

位置 X=42105~106、Y=-62053~054。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-66°-E。

規模 長軸0.30m、短軸0.28m、深さ0.27m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

9号ピット(第23図、P L. 21)

位置 X=42096~097、Y=-62050。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-87°-W。

規模 長軸0.31m、短軸0.24m、深さ0.11m。

埋没土層 2層に分離された。1層には白色軽石を含む

が、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

10号ピット(第23図、P L. 21)

位置 X=42100、Y=-62049~050。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-15°-W。

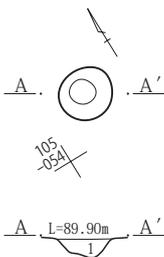
規模 長軸0.27m、短軸0.22m、深さ0.40m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

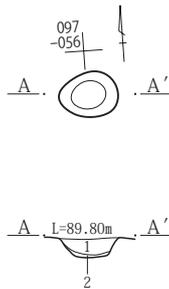
8号ピット



8号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
あらい砂質土。白色軽石を30%含む。
しまり強い。

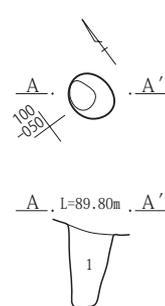
9号ピット



9号ピット

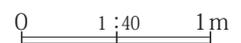
1. 黒褐色土(10YR2/2)
白色軽石を5%含む。
しまり強くやや粘性あり。
2. 暗褐色土(10YR3/3)
赤褐色土小ブロック少量含む。

10号ピット



10号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
白色軽石をわずかに含む。
しまり強い。



第23図 8～10号ピット平面図

11号ピット(第24図、P.L.21)

位置 X=42099、Y=-62051~052。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-53°-W。

規模 長軸0.27m、短軸0.24m、深さ0.22m。

埋没土層 2層に分離された。1層には白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 土師器片5gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 時期が特定できるような遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

12号ピット(第24図、P.L.21)

位置 X=42110~111、Y=-62046~047。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-33°-E。

規模 長軸0.45m、短軸0.39m、深さ0.42m。

埋没土層 1層が確認された。上部に白色軽石が混在するが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

13号ピット(第24図、P.L.21)

位置 X=42100~101、Y=-62052~053。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-63°-E。

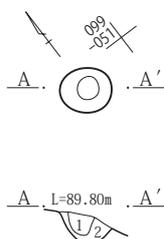
規模 長軸0.24m、短軸0.19m、深さ0.16m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

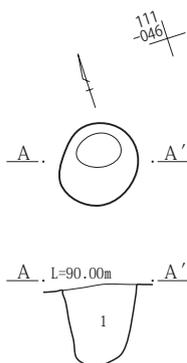
11号ピット



11号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2)
白色軽石を5%含む。
しまり強くやや粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR3/2)
ローム粒をわずかに含む。

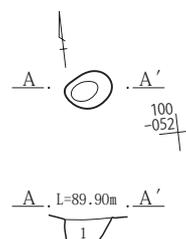
12号ピット



12号ピット

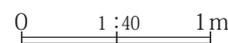
1. 褐灰色土(10YR5/1)
細粒白色軽石が上部に混在する。
さらさらしてしまらない。

13号ピット



13号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石、ロームブロックをわずかに含む。
しまり強くやや粘性あり。



第24図 11～13号ピット平面図

14号ピット(第25図、P.L.21)

位置 X=42110~111、Y=-62048~049。

重複 なし。

平面形状 (円形)。

長軸方位 N-28°-E。

規模 径(0.33)m、深さ0.18m。

埋没土層 2層に分離された。1層には白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

15号ピット(第25図、P.L.21)

位置 X=42105~106、Y=-62052~053。

重複 なし。

平面形状 (楕円形)。

長軸方位 N-29°-E。

規模 長軸0.26m、短軸(0.16)m、深さ0.20m。

埋没土層 3層に分離された。いずれの層にも白色軽石

が認められるが、いずれのテフラであるか比定することはできない。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。

16号ピット(第25図、P.L.21)

位置 X=42100~101、Y=-62053~054。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

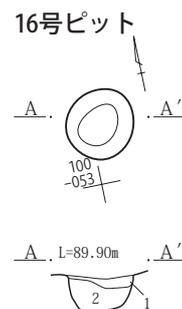
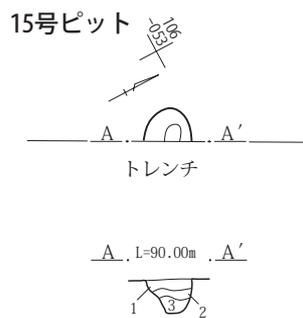
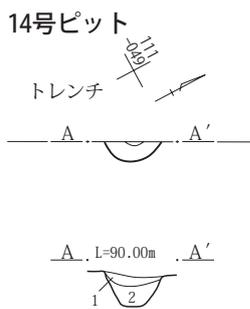
長軸方位 N-51°-E。

規模 長軸0.38m、短軸0.35m、深さ0.19m。

埋没土層 2層に分離された。1層には白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 土師器片9gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 時期が特定できるような遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。



14号ピット

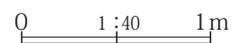
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒を10%、白色軽石と炭化物粒をわずかに含む。
しまり強い。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)
ロームブロックをわずかに含む。
しまり強くやや粘性あり。

15号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石を10%含む。
しまり強い。
2. 褐色土(10YR4/4)
白色軽石をわずかに含む。
しまり強い。
3. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石を少量含む。
しまり強い。

16号ピット

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)
白色軽石をわずかに含む。
しまりやや強い。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土粒をわずかに含む。
しまり強くやや粘性あり。



第25図 14～16号ピット平面図

17号ピット(第26図、P L. 21)

位置 X=42099~100、Y=-62053~054。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-55°-W。

規模 長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.14m。

埋没土層 2層に分離された。1層には白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

18号ピット(第26図、P L. 21)

位置 X=42101~102、Y=-62049~050。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-72°-W。

規模 長軸0.24m、短軸0.19m、深さ0.29m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石をわずかに含む

が、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

19号ピット(第26図、P L. 22)

位置 X=42096~097、Y=-62051~052。

重複 なし。

平面形状 円形。

長軸方位 -

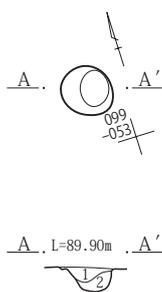
規模 径0.18m、深さ0.09m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

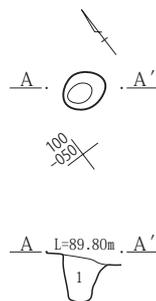
17号ピット



17号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石を5%含む。
しまりやや強い。
2. 黒褐色土(10YR2/3)
土質均一でしまりやや弱く粘性あり。

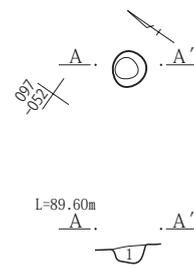
18号ピット



18号ピット

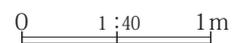
1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石をわずかに含む。
しまり強くやや粘性あり。

19号ピット



19号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/3)
白色軽石を10%含む。
しまり強い。



第26図 17～19号ピット平面図

20号ピット(第27図、P.L.22)

位置 X=42104~105、Y=-62054~055。

重複 2号竪穴住居。本遺構が2号竪穴住居より新しい。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-43°-E。

規模 長軸0.24m、短軸0.17m、深さ0.33m。

埋没土層 3層に分離された。1層と2層には白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

21号ピット(第27図、P.L.22)

位置 X=42102~103、Y=-62053~054。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-20°-W。

規模 長軸0.22m、短軸0.17m、深さ0.25m。

埋没土層 1層が確認された。上部に白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

22号ピット(第27図、P.L.22)

位置 X=42112~113、Y=-62047。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-84°-W。

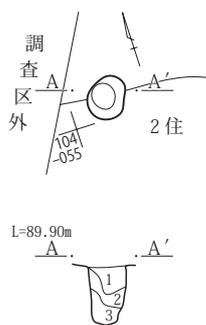
規模 長軸0.21m、短軸0.18m、深さ0.25m。

埋没土層 1層が確認された。黒色土を主体としてローム小ブロックを含む。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。

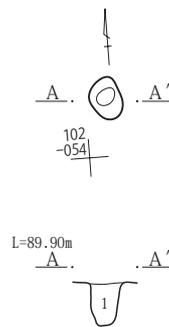
20号ピット



20号ピット

1. 黒褐色土(10YR3/2)
白色軽石を5%含む。
しまり強い。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)
白色軽石・ローム粒を
わずかに含む。しまり強い。
3. 黒褐色土(10YR2/3)
大きなロームブロック
まじりで、しまり強く
やや粘性あり。

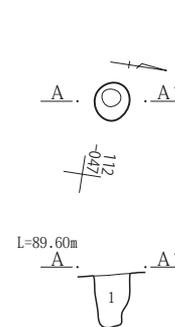
21号ピット



21号ピット

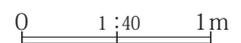
1. 褐色土(10YR4/4)
上部に細粒白色軽石を含む。
しまりあり。

22号ピット



22号ピット

1. 暗褐色土(10YR3/3)
黒色土ブロック、ローム小
ブロックを含む。
粘質性を帯びる。



第27図 20～22号ピット平面図

23号ピット(第28図、P L. 22)

位置 X=42065~066、Y=-62073。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-30°-E。

規模 長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.30m。

埋没土層 2層に分離された。1層に白色軽石を含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

24号ピット(第28図、P L. 22)

位置 X=42091~092、Y=-62059。

重複 なし。

平面形状 楕円形。

長軸方位 N-55°-E。

規模 長軸0.27m、短軸0.25m、深さ0.19m。

埋没土層 2層に分離された。1層に白色軽石が多く認められるが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

25号ピット(第28図、P L. 22)

位置 X=42091~092、Y=-62061~062。

重複 なし。

平面形状 (楕円形)。

長軸方位 N-30°-E。

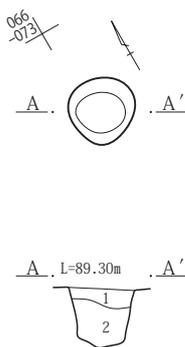
規模 長軸0.12m、短軸(0.10)m、深さ0.04m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石が多く認められるが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 遺物の出土が認められないため、ピットの詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性がある白色軽石を含む土層で埋没していることから、少なくとも浅間A軽石降下後に帰属する可能性がある。

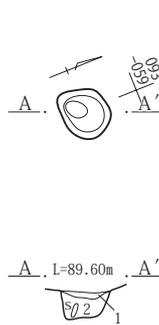
23号ピット



23号ピット

1. 黒褐色土(10YR3/2)
白色軽石をわずかに含む。
くすんだロームを10%含む。
しまり強くやや粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR2/2)
くすんだローム粒を
わずかに含む。しまりやや
弱く粘性あり。

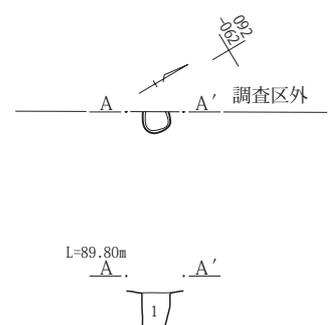
24号ピット



24号ピット

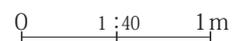
1. 黒褐色土(10YR3/1)
細粒白色軽石を多量に含む。
ロームブロック、焼土粒を少量含む。
2. 褐灰色土(10YR4/1)
焼土粒をわずかに含む。
しまり弱い。下部はやや粘質性を帯びる。

25号ピット



25号ピット

1. 黒褐色土(10YR3/2)
細粒白色軽石を多量に含む。
褐色土ブロックを含む。



第28図 23~25号ピット平面図

第5節 溝

溝は11条が確認された(10・12号溝は欠番)。いずれの溝も流水の形跡は認められず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。

特に、溝6条(5・7・8・9・11・13号溝)は、いずれも走向がほぼ北東-南西方向であり、同一地点に切り合い関係をもち集中分布する。遺構の平面的な切り合い関係及び土層断面から、(古)11号溝→13号溝→7号溝→5号溝→8号溝→9号溝(新)という年代的な変遷が追える。さらに、5号溝の埋没土層最下部には、浅間B軽石の一次堆積層が確認されている。

前述した6条以外の溝は、発掘調査区内に分散する。そのうちの溝3条(1・2・6号溝)は、埋没土層との関係から浅間B軽石降下後に帰属する可能性が高い。また、溝2条(3・4号溝)は同じく埋没土層との関係から浅間A軽石降下後に帰属する可能性が高い。

1号溝(第29図、P L. 23)

位置 X=42093~102、Y=-62055~058。

重複 2号竪穴住居と重複。本遺構が2号竪穴住居より新しい。

平面形状 走向はほぼ北-南である。途中にクランク状の屈曲部があるがほぼ直線状である。調査区の一部で長さ約9mにわたり確認された。底部に凹凸は認められないが、南に向かいわずかに傾斜している。

長軸方位 N-06°-E。

規模 全長8.64m、上幅0.06~0.36m、深さ0.01~0.07m。

埋没土層 1層が確認された。土層全体に浅間B軽石を含む砂質土である。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物が認められないことから、詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石を含む土層で埋没していることから、浅間B軽石降下後に帰属すると考えられる。

2号溝(第29図、P L. 23)

位置 X=42095~101、Y=-62056~058。

重複 2号竪穴住居と重複。本遺構が2号竪穴住居より新しい。

平面形状 走向はほぼ北-南であり、直線状である。西側調査区外から調査区内に続いており、調査区途中で確認できなくなる。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-10°-E。

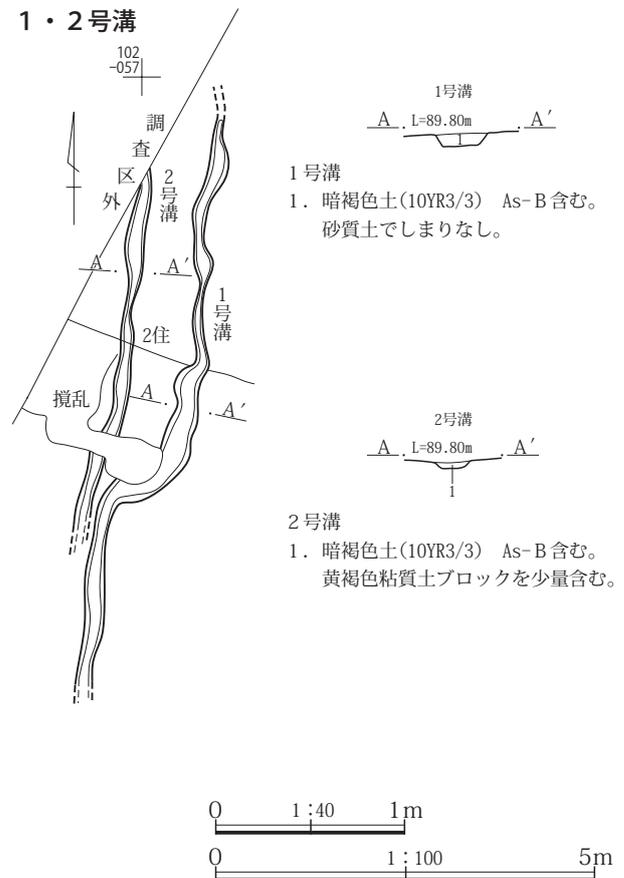
規模 全長7.02m、上幅0.08~0.25m、深さ0.03~0.05m。

埋没土層 1層が確認された。土層全体に浅間B軽石を含む。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物が認められないことから、詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石を含む土層で埋没していることから、浅間B軽石降下後に帰属すると考えられる。

1・2号溝



第29図 1・2号溝平面図

3号溝(第30図、P L. 23・24)

位置 X=42106~108、Y=-62045~053。

重複 4号溝と重複。土層断面では3号溝との新旧関係は確認できず、同時存在の可能性もある。

平面形状 走向は西北西-東南東である。西側調査区外から調査区を横断して東側調査区外に続いている。ほぼ直線状である。底部に傾斜は認められない。途中で3号溝が合流する。

長軸方位 N-80°-W。

規模 全長(7.84)m、上幅0.22~0.80m、深さ0.04~0.10m。

埋没土層 1層が確認された。土層全体に白色軽石を多く含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。平面では4号溝と合流するが、土層断面からは4号溝との新旧関係は確認できない。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 土師器片65g、須恵器片10gが出土しているが、小破片のため図示できなかつた。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。時期が特定できるような遺物が認められないことから、詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を多く含む土層で埋没していることから、浅間A軽石降下後に帰属する可能性が高い。

4号溝(第30図、P L. 23・24)

位置 X=42106~107、Y=-62047~051。

重複 3号溝と重複。土層断面では4号溝との新旧関係は確認できず、同時存在の可能性もある。

平面形状 走向はほぼ東-西である。平面形は直線状であり、3号溝に合流する。発掘調査区の一部で長さ約3mにわたり確認された。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-72°-E。

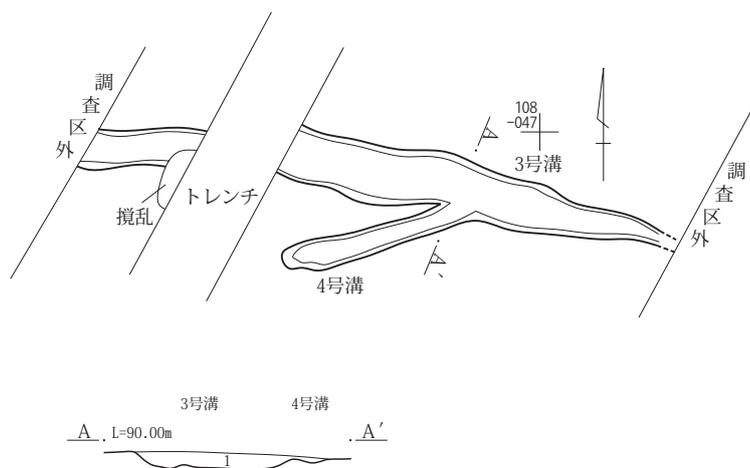
規模 全長(2.50)m、上幅0.30~0.44m、深さ0.04~0.13m。

埋没土層 1層が確認された。土層全体に白色軽石を多く含むが、これは浅間A軽石が主体である可能性が高い。平面では3号溝と合流するが、土層断面からは3号溝との新旧関係は確認できない。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 遺物の出土は認められなかつた。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物が認められないことから、詳細な帰属時期は不明である。浅間A軽石の可能性のある白色軽石を多く含む土層で埋没していることから、浅間A軽石降下後に帰属する可能性が高い。

3・4号溝



3・4号溝

1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石、黄色軽石を多量に含む。しまりあり。3・4号溝は土層断面では切り合い関係は認められず。

0 1:40 1m

0 1:100 5m

第30図 3・4号溝平面断面

5号溝(第33・34・35図、P L. 23)

位置 X=42068~090、Y=-62054~073。

重複 7号溝、8号溝、9号溝、11号溝、13号溝と重複。本遺構が7号溝、11号溝より新しく、8号溝、9号溝より古い。13号溝との新旧関係については、土層断面からはほぼ同時存在と読み取れるが、遺構の平面的な切り合い関係から、13号溝の方が本遺構より古い。

平面形状 走向はほぼ北東-南西である。東側調査区外から調査区を斜めに横断して西側調査区外に続いている。途中に1箇所の屈曲部が認められる。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-39°-E・N-84°-W。

規模 全長(29.04)m、上幅1.26~2.15m、深さ0.04~0.08m。

埋没土層 10層に分別された。最下部には浅間B軽石の一次堆積層が認められる。断面形状は浅い椀状であり、流水の形跡はみられない。

遺物 土師器片711g、須恵器片430gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。時期が特定できるような遺物は認められない。埋没土層の最下層に浅間B軽石の一次堆積層が認められることから、浅間B軽石降下時に溝として機能していたと考えられる。

6号溝(第31図、P L. 24)

位置 X=42063~065、Y=-62069~072。

重複 5号竪穴住居と重複。本遺構が5号竪穴住居より新しい。

平面形状 走向は東北東-西南西であり、ほぼ直線状である。南側調査区外から調査区を斜めに横断するが、5号竪穴住居と交差する。発掘調査区東端の土層断面には6号溝の痕跡は認められないことから、調査区内で消滅している可能性が高い。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-70°-E。

規模 全長(2.33)m、上幅0.26~0.34m、深さ0.04~0.08m。

埋没土層 2層に分離された。1層に含まれる白色軽石は浅間B軽石が主体である可能性が高い。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

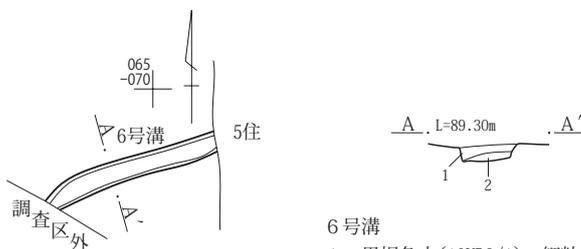
時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物が認められないことから、詳細な帰属時期は不明である。浅間B軽石の可能性のある白色軽石を含む土層で埋没していることから、浅間B軽石降下後に帰属する可能性が高い。

7号溝(第32~34・36図、P L. 24・28)

位置 X=42070~091、Y=-62054~074。

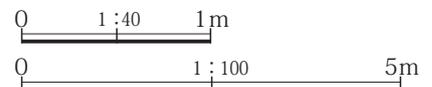
重複 5号溝、8号溝、9号溝、11号溝、13号溝と重複。

6号溝



6号溝

1. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石、浅黄橙色軽石を多量に含む。ややしまりあり。
2. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒非常に多く含む。細粒白色軽石をわずかに含む。しまりない。



第31図 6号溝平面断面

本遺構は5号溝、8号溝、9号溝より古く、11号溝、13号溝より新しい。

平面形状 走向はほぼ北東—南西である。5号溝と走向がほぼ一致する。途中にクランク状の屈曲部があるがほぼ直線状である。東側調査区外から調査区を斜めに横断して西側調査区外に続いている。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-40°-E・N-79°-W。

規模 全長(26.34)m、上幅1.25~2.42m、深さ0.14~0.44m。

埋没土層 5層に分離された。最上層は浅間B軽石を多く含む。断面形状は浅い椀状であり、流水の形跡はみられない。

遺物 土師器杯3点(1~3)、須恵器椀1点(4)・広口壺1点(5)を図示した。他に、土師器片498g、須恵器片143gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物の年代的位置付けから、本遺構は8世紀から9世紀にかけてに帰属すると考えられる。

また、遺構の新旧関係から本遺構は5号溝より古期に位置づけられる。5号溝は先述したとおり浅間B軽石の一次堆積層が埋没土層の最下層に認められる。このような遺構の新旧関係に認められる年代的な位置づけは、出土遺物から考えられる本遺構の帰属年代(8世紀から9世紀にかけて)に整合的である。

8号溝(第33・34・36図、P L. 24)

位置 X=42087~093、Y=-62054~064。

重複 5号溝、7号溝、9号溝、11号溝、13号溝と重複。本遺構が5号溝、7号溝、11号溝、13号溝より新しく、9号溝より古い。

平面形状 走向はほぼ東北東—西南西である。途中に直角に近い角度の屈曲部がある。東側調査区外から調査区内に続いており、西側調査区境付近で確認できなくなる。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-56°-E・N-59°-W。

規模 全長(11.80)m、上幅0.34~0.42m、深さ0.02~0.12m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石、黄橙色軽石を含むが、いずれのテフラも由来等は不明である。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 土師器片6gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。年代を特定できるような出土遺物が認められないことから、詳細な帰属年代は不明である。

遺構の新旧関係から本遺構は5号溝より新期に位置づけられる。5号溝は先述したとおり浅間B軽石の一次堆積層が埋没土層の最下層に認められる。よって、本遺構は少なくとも浅間B軽石降下後のものと言える。

9号溝(第33・34・36図、P L. 24)

位置 X=42089~091、Y=-62054~060。

重複 5号溝、7号溝、8号溝、11号溝、13号溝と重複。本遺構が最も新しい。

平面形状 走向はほぼ東北東—西南西である。途中に直角に近い角度の屈曲部がある。東側調査区外から調査区内に続いており、調査区内途中で確認できなくなる。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-44°-E・N-81°-W。

規模 全長(6.08)m、上幅0.29~0.50m、深さ0.03~0.10m。

埋没土層 1層が確認された。白色軽石を含むがテフラの由来等は不明である。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。年代を特定できるような出土遺物が認められないことから、詳細な帰属年代は不明である。

遺構の新旧関係から本遺構は5号溝より新期に位置づけられる。5号溝は先述したとおり浅間B軽石の一次堆積層が埋没土層の最下層に認められる。よって、本遺構は少なくとも浅間B軽石降下後のものと言える。

11号溝(第32～35図、P L. 25・28)

位置 X=42075～089、Y=-62055～069。

重複 5号溝、7号溝、8号溝、9号溝、13号溝と重複。
本遺構が最も古い。

平面形状 走向はほぼ北東-南西である。途中に屈曲部があるがほぼ直線状である。東側調査区外から調査区を斜めに横断しているが、調査区南において5号溝及び7号溝に切られており、それより南側へ続いていたかどうかは不明である。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-49°-E。

規模 全長(17.44)m、上幅0.40～0.92m、深さ0.14～0.35m。

埋没土層 2層に分離された。その下層に白色軽石を含むが、浅間C軽石が主体である可能性が高い。断面形状は逆台形であり、流水の形跡はみられない。

遺物 土師器杯7点(1～7)・台付甕1点(9)、須恵器椀1点(8)・甕1点(10)を図示した。土師器杯2点(1、2)には墨書がある。1は判読不能。2は内面外面ともに「各」と判読できる。その他、土師器片434g、須恵器片469gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物の年代的位置づけから、本遺構は8世紀から9世紀にかけてに帰属すると考えられる。

また、遺構の新旧関係から本遺構は5号溝より古期に位置づけられる。5号溝は先述したとおり浅間B軽石の一次堆積層が埋没土層の最下層に認められる。このような遺構の新旧関係に認められる年代的な位置づけは、出土遺物から考えられる本遺構の帰属年代(8世紀から9世紀にかけて)に整合的である。

13号溝(第32～34・36図、P L. 25・28)

位置 X=42083～087、Y=-62056～066。

重複 5号溝、7号溝、8号溝、9号溝、11号溝と重複。
本遺構は5号溝、7号溝、8号溝、9号溝より古い。11号溝より新しい。

平面形状 走向はほぼ東南東-西南西である。直線状である。東側調査区外から調査区を斜めに横断し西側調査区外に続いている。底部に傾斜は認められない。

長軸方位 N-79°-E。

規模 全長(8.63)m、上幅1.10～2.84m、深さ0.10～0.29m。

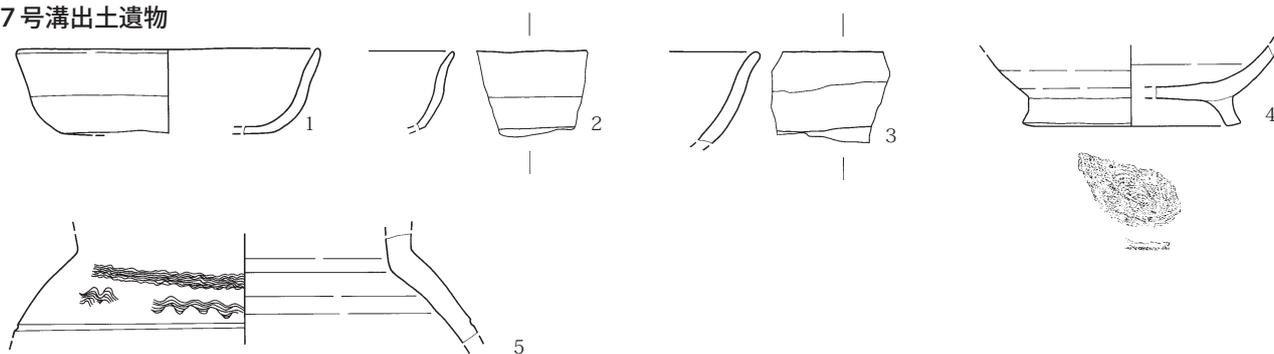
埋没土層 5層に分離された。覆土全体に白色軽石を含むが、テフラの由来等については不明である。断面形状は逆台形であるが、部分的に底部中央が盛り上がり凸状を呈する部分がある。流水の形跡はみられない。

遺物 土師器杯1点(1)・鉢1点(2)、須恵器椀1点(3)を図示した。その他、土師器片349g、須恵器片65gが出土しているが、小破片のため図示できなかった。

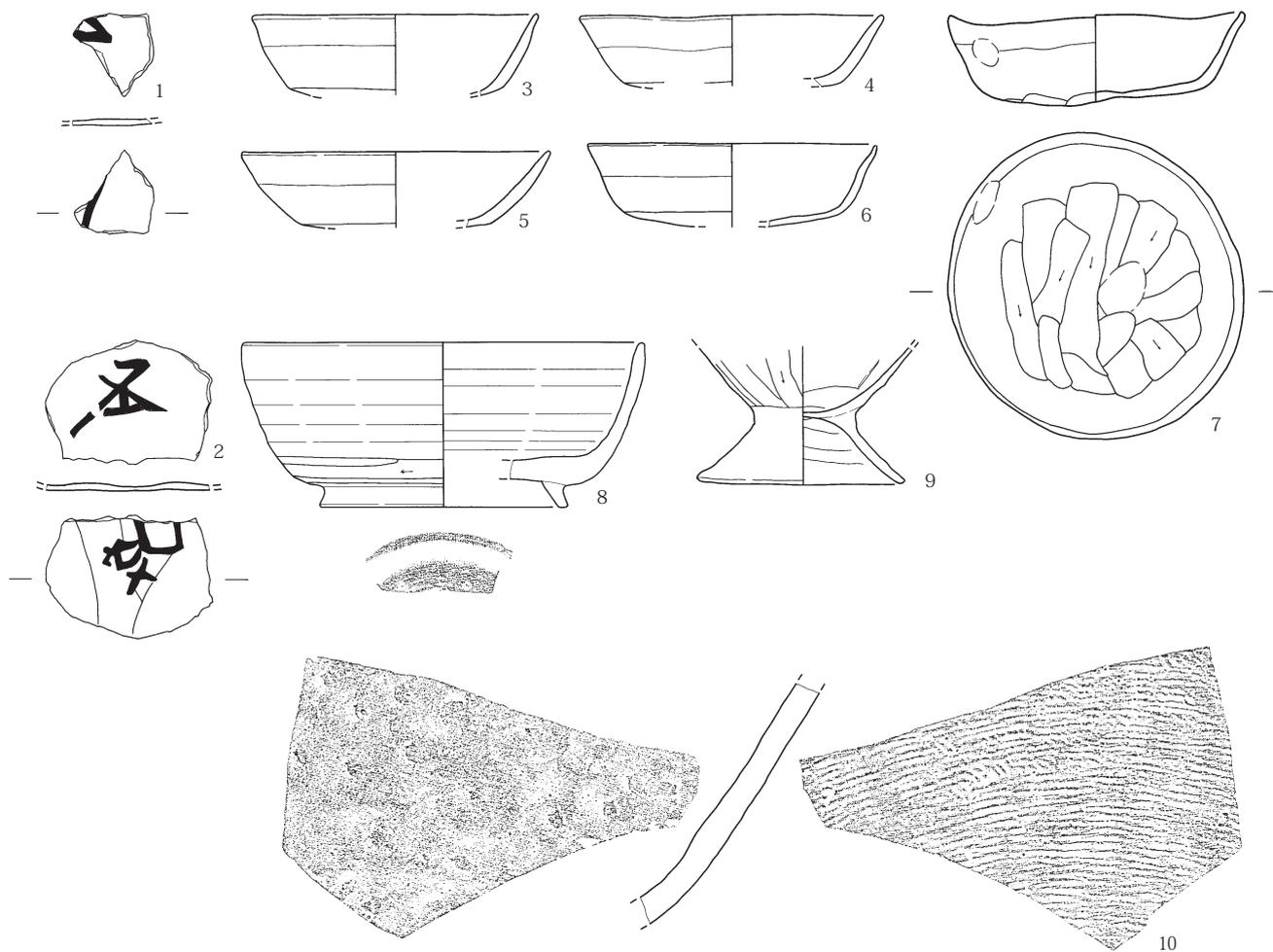
時期と所見 流水の形跡はみられず、何らかの区画を意図したものである可能性が高い。出土遺物の年代的位置づけから、本遺構は8世紀から9世紀にかけてに帰属すると考えられる。

また、遺構の新旧関係から本遺構は5号溝より古期に位置づけられる。5号溝は先述したとおり浅間B軽石の一次堆積層が埋没土層の最下層に認められる。このような遺構の新旧関係に認められる年代的な位置づけは、出土遺物から考えられる本遺構の帰属年代(8世紀から9世紀にかけて)に整合的である。

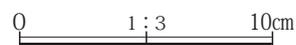
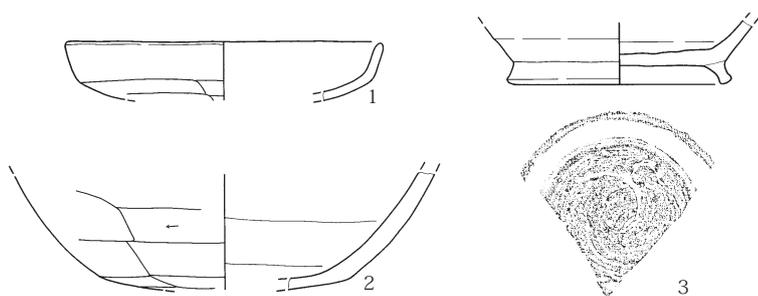
7号溝出土遺物



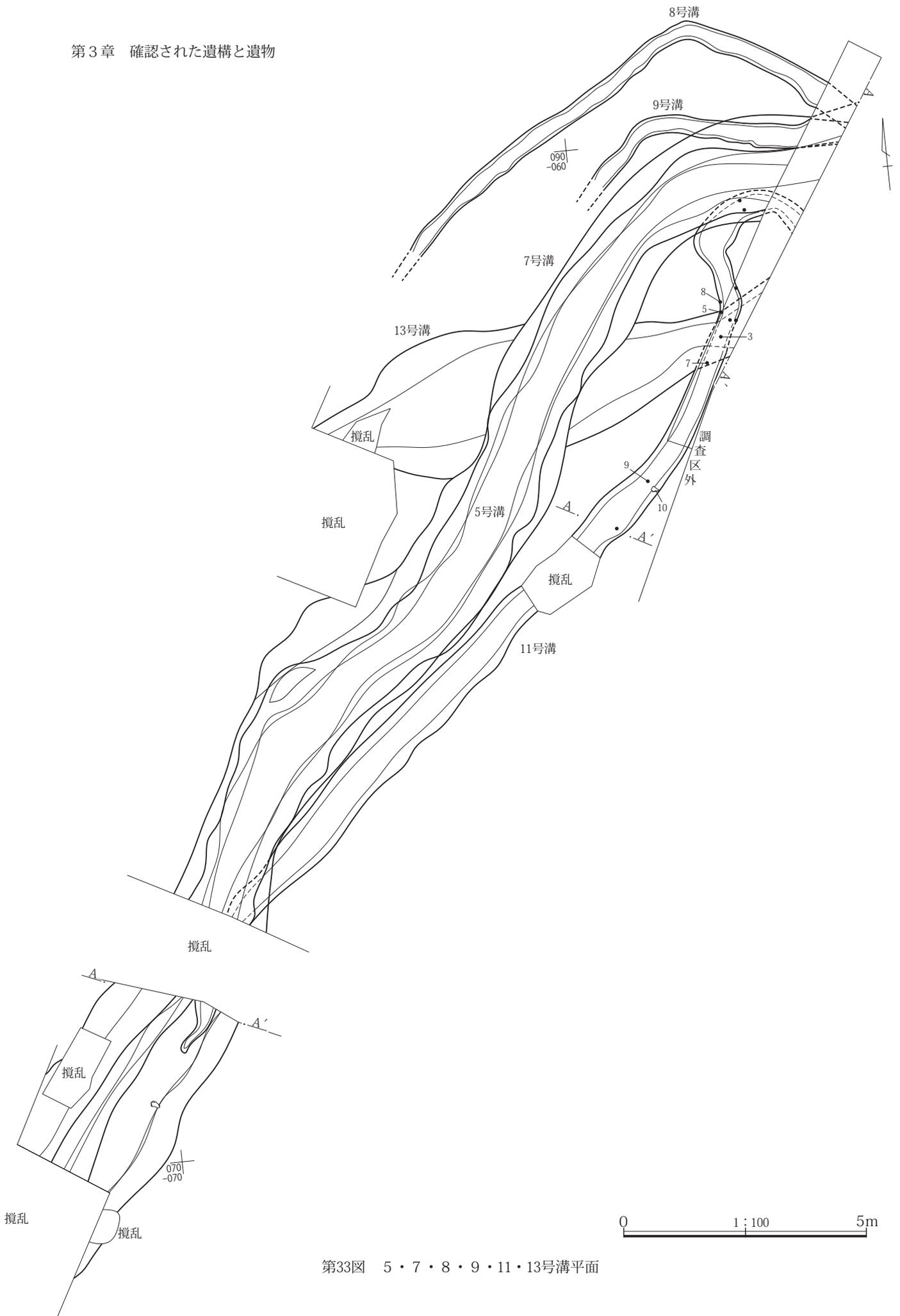
11号溝出土遺物



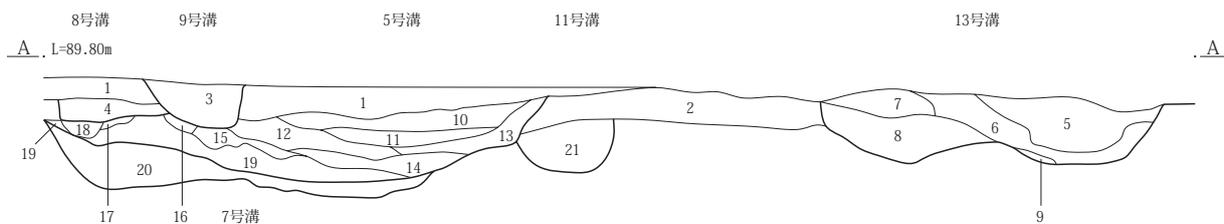
13号溝出土遺物



第32図 7・11・13号溝出土遺物

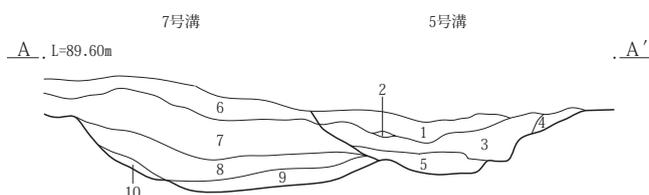


第33図 5・7・8・9・11・13号溝平面



5・7・8・9・11・13号溝

1. 褐灰色土(10YR4/1) 細粒軽石を含む。褐色土ブロックを含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 細粒白色軽石、黒色土ブロックを含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 細粒白色軽石を含む。黒褐色土ブロックを少量含む。9号溝。
4. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 細粒白色軽石、細粒黄褐色軽石を含む。8号溝。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 細粒白色軽石、細粒黄褐色軽石を含む。暗褐色土ブロックを少量含む。13号溝。
6. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石、浅黄褐色軽石を多量に含む。ややしまりあり。13号溝。
7. 褐色土(10YR4/6) 細粒白色軽石を多量に含む。褐色土ブロックを少量含む。13号溝。
8. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 細粒白色軽石を多量に含む。褐色土ブロックを含む。13号溝。
9. 暗褐色土(10YR3/3) 褐灰色シルトブロックを含む。13号溝。
10. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石、にぶい黄褐色土を含む。ややしまりあり。5号溝。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 細粒白色軽石、にぶい黄褐色土、黄褐色土ブロックを含む。5号溝。
12. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石、にぶい黄褐色土を含む。ややしまりあり。5号溝。
13. 褐色土(10YR4/4) にぶい黄褐色土を含む。細粒白色軽石を少量含む。5号溝。
14. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石、にぶい黄褐色土を少量含む。5号溝。
15. 明赤灰色土(5R7/1) As-B多く含む。5号溝。
16. 灰色土(7.5Y6/1) As-B非常に多く含む。5号溝。
17. 暗褐色土(10YR3/3) As-Bブロックを少量含む。5号溝
18. 暗褐色土(10YR3/4) 黒色土ブロック、As-Bブロックを少量含む。5号溝。
19. As-B一次堆積層。5号溝。
20. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石を多量に含む。浅黄褐色軽石を少量含む。7号溝。
21. 黒褐色土(10YR2/3) ロームを20%含む。しまりやや弱く粘性あり。11号溝。



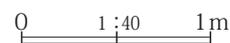
5・7号溝

1. 褐色土(10YR4/4) As-B多く含む。黒褐色土ブロックを含む。しまりあり。5号溝。
2. 褐色土(10YR4/6) As-B多く含む。5号溝。
3. 暗褐色土(10YR3/3) As-B多く含む。5号溝。
4. 明黄褐色土(10YR7/6) 黄褐色土主体。わずかにAs-Bが混入する。5号溝。
5. As-B一次堆積層。5号溝。
6. 褐色土(10YR4/4) As-B多く含む。黒褐色土ブロックを含む。しまりあり。7号溝。
7. 褐灰色土(10YR5/1) にぶい黄褐色土ブロックを含む。やや粘質。7号溝。
8. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石を多量に含む。浅黄褐色軽石を少量含む。7号溝。
9. 褐灰色土(10YR6/1) 褐灰色シルトブロック、浅黄褐色土ブロックを含む。7号溝。
10. 褐灰色土(10YR5/1) にぶい黄褐色土ブロック、細粒白色軽石を含む。7号溝。



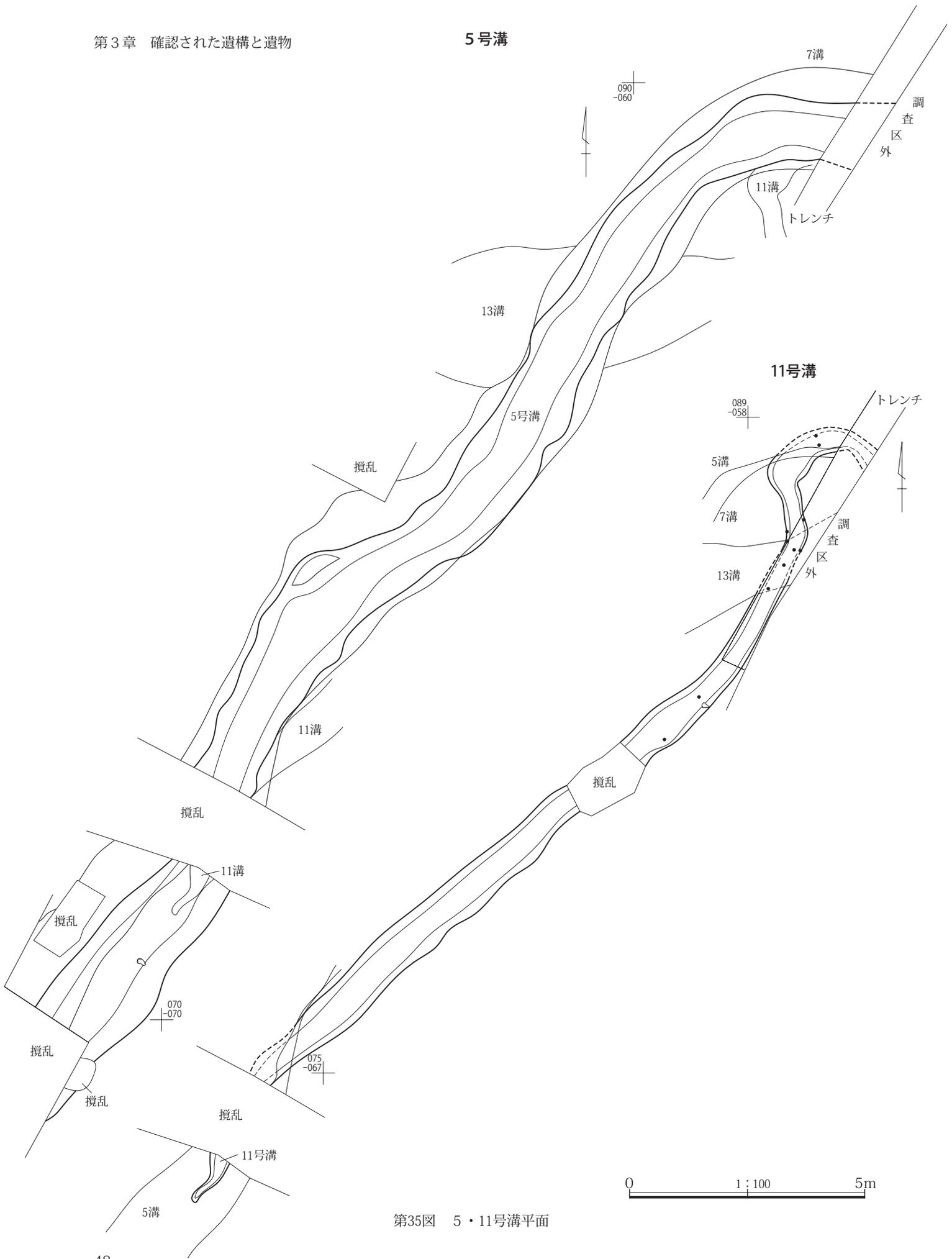
11号溝

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を5%、ローム小ブロックをわずかに含む。しまりやや弱い。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石を少量含む。ロームを20%含む。しまりやや弱く粘性あり。

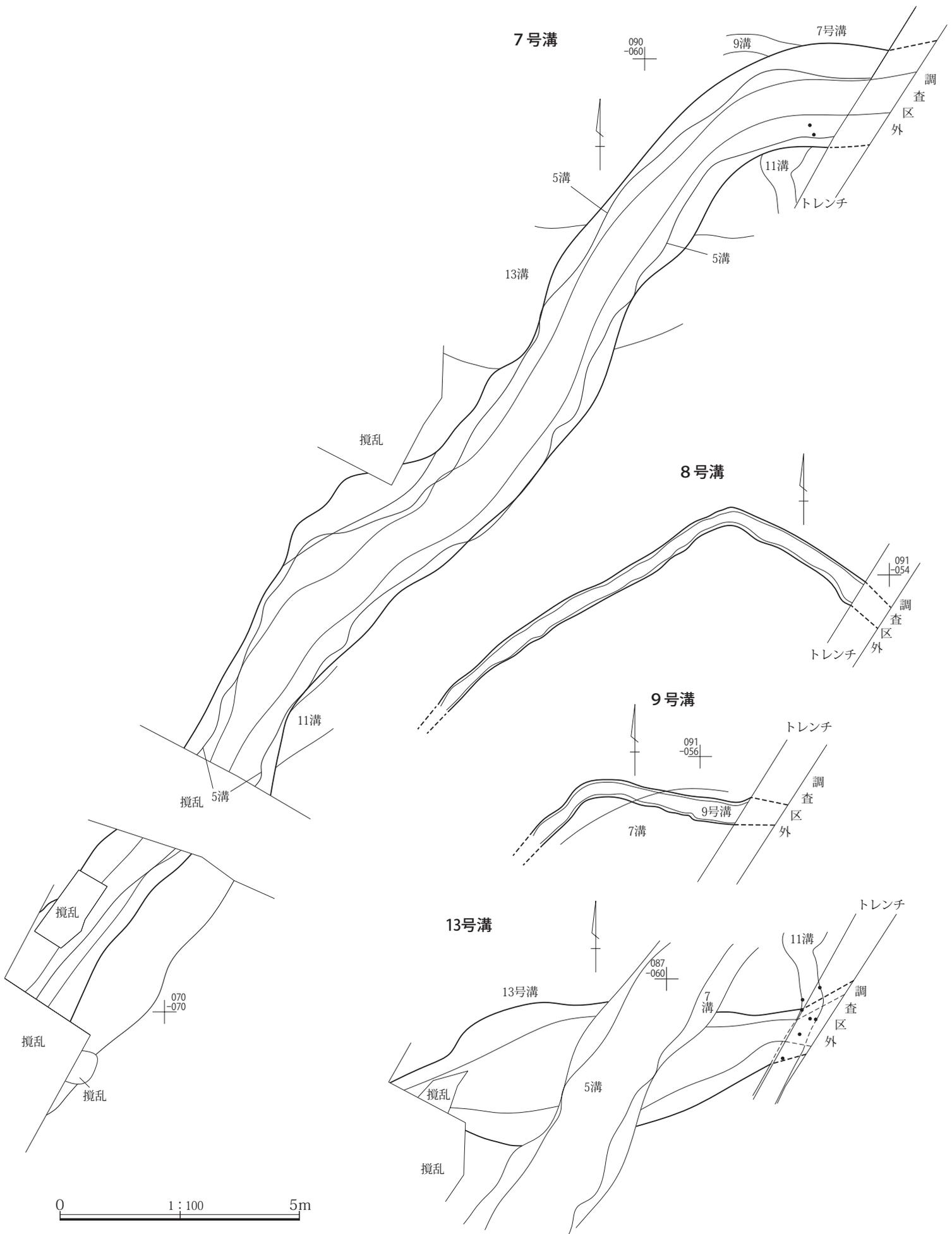


第34図 5・7・8・9・11・13号溝断面

5号溝



第35図 5・11号溝平面



第36図 7・8・9・13号溝平面

第6節 遺構外出土の遺物

(第37～39図、P.L. 29)

表土や攪乱など遺構外からも遺物が出土している。

縄文時代の遺物としては、深鉢13点(1～13)を図示した。1～6は縄文時代早期・茅山式、7・8は縄文時代前期・諸磯b式、9～13は縄文時代前期末葉に帰属する。その他、早期・茅山式が11点・150g、前期に帰属すると考えられる土器片が16点・147g、前期・諸磯b式が5点・36g、中期後半から後期後半に帰属すると考えられる土器片が4点・70g出土している。

縄文時代に帰属すると考えられる石器2点(39・40)を図示した。39はチャート製の石鏃であり、40は黒色頁岩製の船底形を呈する石器である。大形の剥片を素材として、二次加工により船底形に整形されている。エンドス

クレイパーとして器種分類される可能性もある。その他、微細剥片類が13点・379gが確認された。

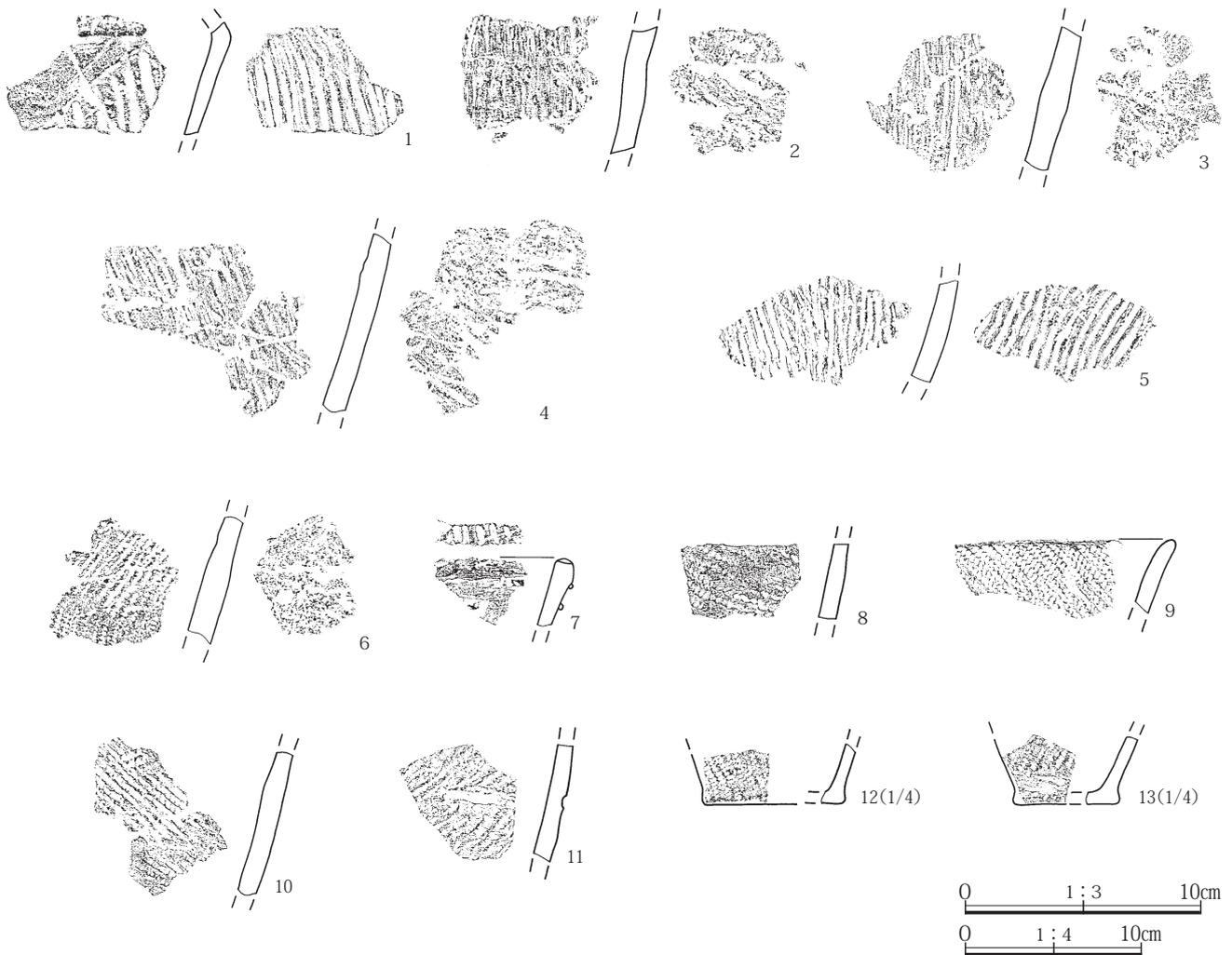
古墳時代以降の遺物としては、土師器杯9点(14～22)・高杯2点(23・24)・壺2点(32・33)・甕2点(34・35)、須恵器杯2点(25・26)・椀2点(27・28)・甕2点(36・37)、灰釉陶器皿2点(29・30)・椀1点(31)を図示した。

土師器高杯(24)と土師器壺(32)は、古墳時代に帰属する遺物である。他の土器類は、9世紀を主体とする遺物群である。土師器杯2点(14、15)には墨書がある。14は判読不能。15は「各」と判読できる。

また、土師器片2893g、須恵器片1818g、灰釉陶器片29gが出土したが、小破片のため掲載しなかった。

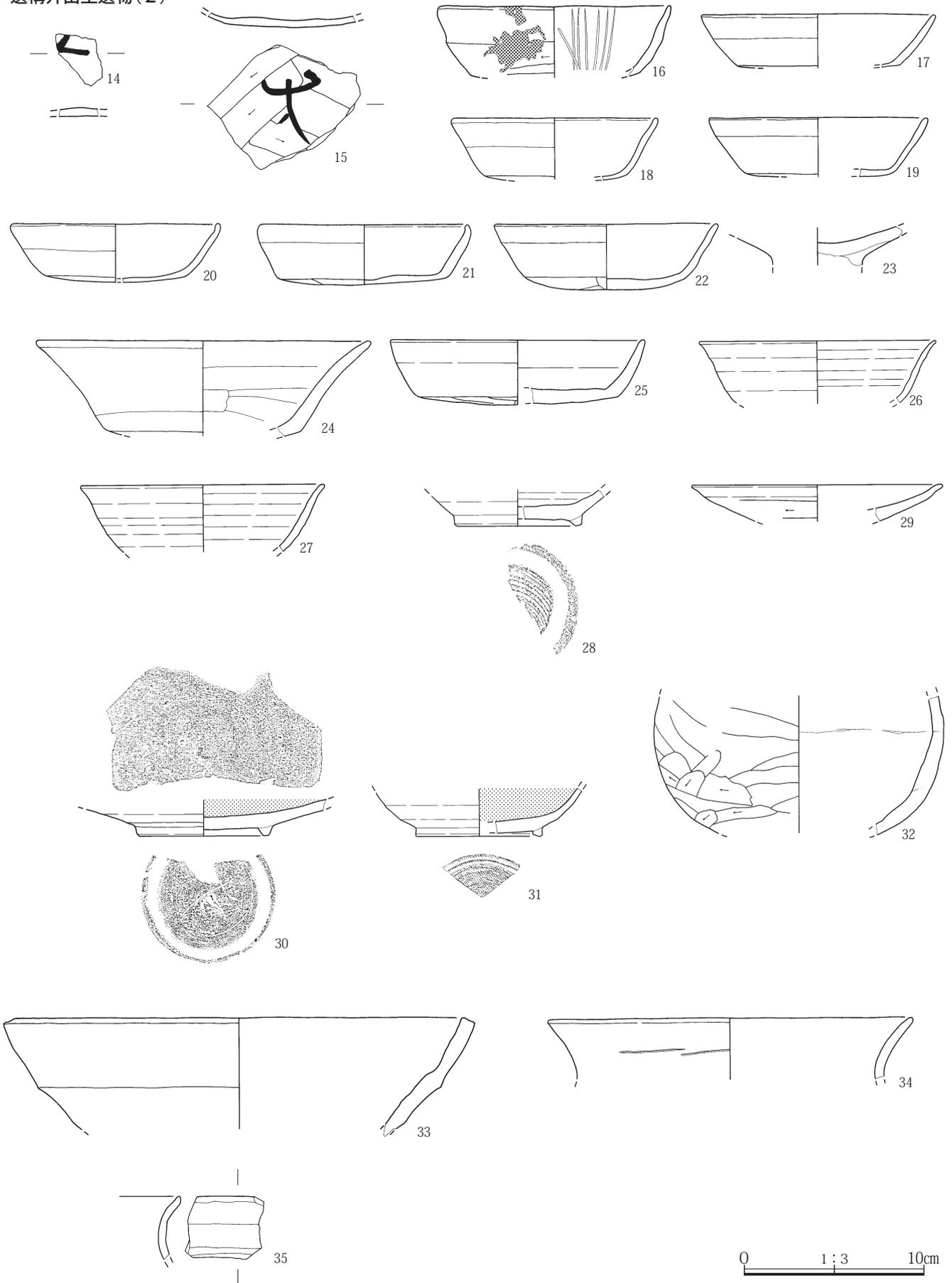
その他、遺構外から羽口1点(38)が確認され、これを図示した。

遺構外出土遺物(1)



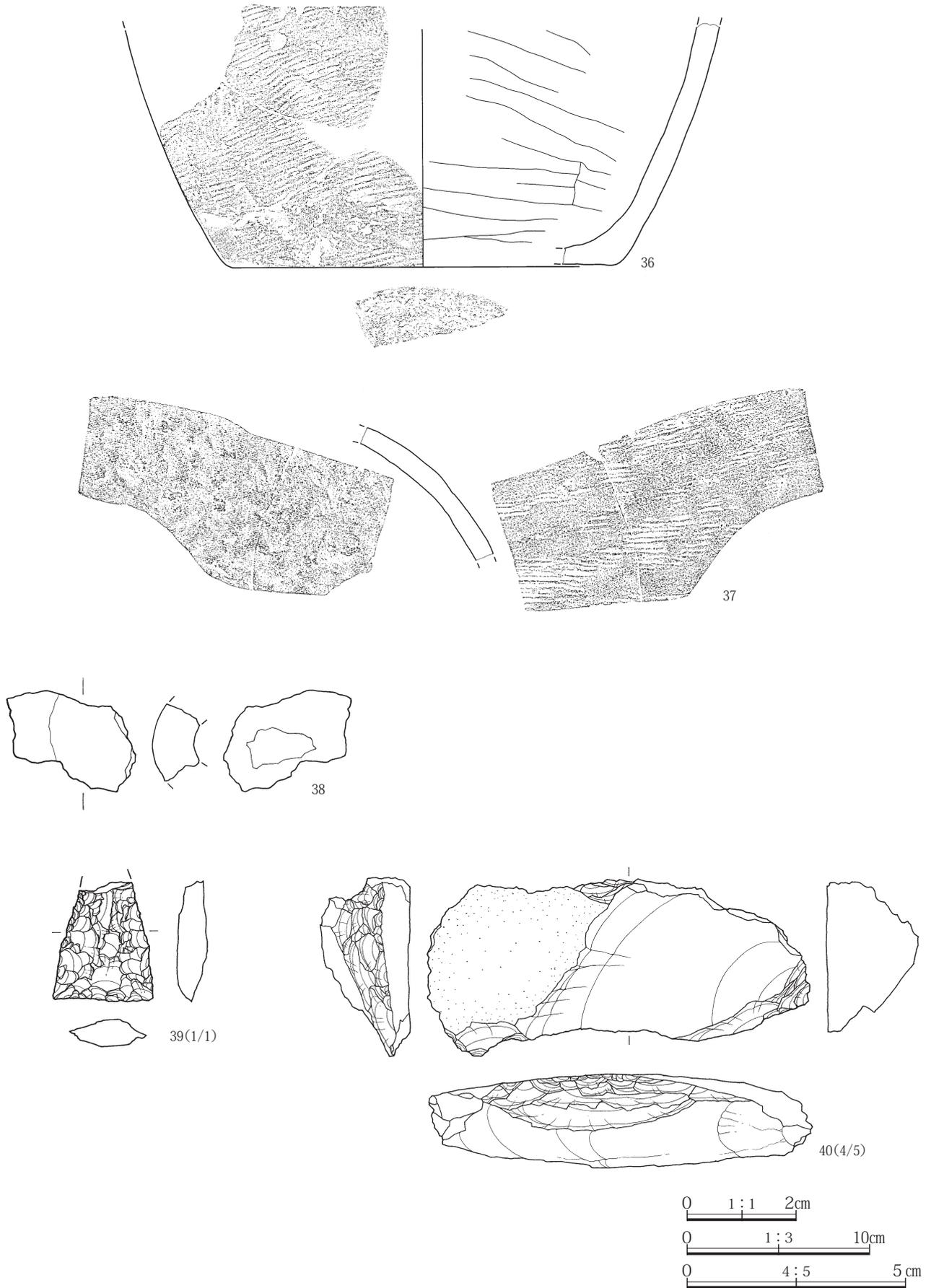
第37図 遺構外出土遺物(1)

遺構外出土遺物(2)



第38図 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物(3)



第39図 遺構外出土遺物(3)

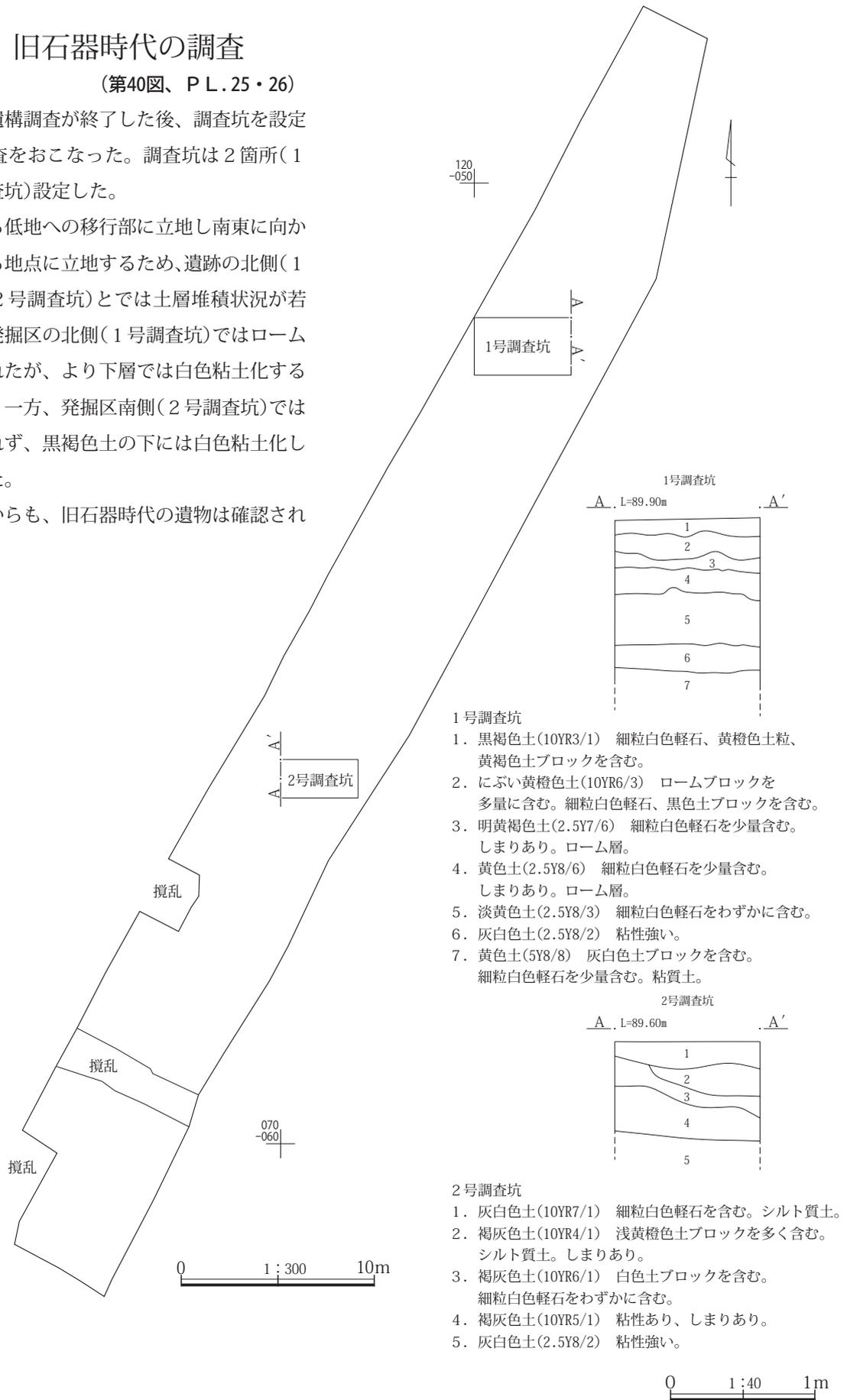
第7節 旧石器時代の調査

(第40図、P.L.25・26)

縄文時代以降の遺構調査が終了した後、調査坑を設定し旧石器時代の調査をおこなった。調査坑は2箇所(1号調査坑・2号調査坑)設定した。

遺跡が、台地から低地への移行部に立地し南東に向かい緩やかに傾斜する地点に立地するため、遺跡の北側(1号調査坑)と南側(2号調査坑)とでは土層堆積状況が若干異なっている。発掘区の北側(1号調査坑)ではローム層の堆積は認められたが、より下層では白色粘土化する傾向が確認された。一方、発掘区南側(2号調査坑)ではローム層は認められず、黒褐色土の下には白色粘土化した土壌が観察された。

いずれの調査坑からも、旧石器時代の遺物は確認されなかった。



第40図 旧石器時代調査坑配置・土層断面

第4章 まとめ

第1節 地形と遺構の概要

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)は前橋市の南東部に位置し、前橋市富田町に所在する。遺跡は、赤城山南麓地域の標高約90mの地点に立地する。赤城山の南麓地域では数多くの小河川が流れ下り、それらの小河川に伴う低地域と台地が入り組んだ複雑な地形的様相をみせる。本遺跡の東約500mには、赤城山南麓の主要河川の一つである荒砥川が南流し、それに伴う低地が広がる。

遺跡地の東側近接地には大泉坊川が南流し、それに伴う低地が広がる。また西には、江木新沼方面から下る小河川とそれに付随する低地が認められる。これら二つの低地域は、遺跡の南約600mの場所で合流し、二つの低地に挟まれた台地は南北に細長く延びて舌状台地を形成している。

本遺跡は、そのような舌状台地の先端付近から約600m北方向の台地側に入った場所にあり、台地の東端に立地する。まさに台地から低地への移行部分にあたり、南東方向に緩やかに傾斜している。現在、遺跡周辺での台地と低地との比高差は1m程度であり、低地域は専ら水田として、台地上は集落域として土地利用されている。

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)において検出された遺構は以下の通りである。

- ・ 竪穴住居 5軒
- ・ 土坑 10基
- ・ ピット 25基
- ・ 溝 11条

竪穴住居の帰属時期については、出土遺物との関係から全て9世紀代に帰属すると考えられた。竪穴住居以外の遺構に関しては、出土遺物がほとんど認められず帰属時期に関する情報がきわめて少ない。それらの遺構については、埋没土層、特にテフラとの関係からおおよその帰属時期について推測した。

第2節 集落の変遷

奈良・平安時代に比定される竪穴住居が5軒確認された。竪穴住居以外の遺構としては、土坑2基、溝6条が奈良・平安時代に帰属する可能性がある。竪穴住居については出土遺物から帰属時期は次のように考えられる。

- ・ 9世紀第2四半期 1・3号竪穴住居
- ・ 9世紀第3四半期 2号竪穴住居
- ・ 9世紀後半 4・5号竪穴住居

本遺跡地では、9世紀代の集落が展開していたことになる。

本遺跡周辺をみると、主要地方道藤岡大胡線改築事業に伴い富田宮田遺跡、富田新井遺跡、富田大泉坊A遺跡、富田大泉坊B遺跡の発掘調査が実施されており、発掘調査報告書も刊行されている((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009)。それらの遺跡の遺構分布状況を含め本遺跡の位置付けについて考えたい(第41図)。

富田新井遺跡(前橋市0244)遺跡では、9世紀代の竪穴住居5軒が確認されたが、周辺では8世紀前半から9世紀後半に位置づけられる竪穴住居群が検出されている。富田新井遺跡と富田大泉坊B遺跡をみると、ローム台地の全域にわたり当該期の集落が展開している状況が読み取れる。本遺跡で検出された竪穴住居群も、このような8世紀代から9世紀代にかけての地域的な集落展開の一部として位置づけられよう。

ところで、富田新井遺跡では、調査区南部の低地間際において古墳時代(4世紀代)の竪穴住居3軒が検出されている。これは藤岡大胡線の拡幅事業に伴い平成16年から平成18年にかけて実施された発掘調査によって確認されたものである。一方、8世紀代と9世紀代の集落が検出されているローム台地中央域では、古墳時代の竪穴住居は全く確認されていない。古墳時代と8世紀から9世紀にかけての時期では、集落の占地状況が全く異なっている現象が認められる。

赤城山南麓地域のこのような居住域の変化について、農耕社会における水田耕作といった生産活動との因果的

な関係の中で理解しようとする論考がある(小島2009)。それによると、古墳時代前期の遺跡は、谷頭周辺や小河川の縁辺に立地し、特に小河川とその支流の合流点に面した台地縁辺に立地するものが多いとされる。それは河川合流点の比較的広い地点、つまり発展性のある地点を生産域とするために、小河川や谷頭からの湧水を効率的に利用することを目指したためとされている。先述した富田新井遺跡の4世紀代の竪穴住居群の立地環境をみると、大泉坊川に伴う低地域と江木新沼方面から続く低地域に挟まれた舌状台地のまさに先端付近に位置している。これはこれまで考えられてきた古墳時代前期の集落域のあり方を追証するものである。富田新井遺跡の4世紀代の集落は、水田経営の発展性のある低地を生産域とするために、低地域を間近に望む舌状台地の先端部に展開していたと考えられる。

古墳時代中・後期の集落をみると、その多くは前期から継続したものであり、そして居住域の範囲を台地内部に移行させながら継続するとされる。それは、水田耕作地を台地縁辺の傾斜地部分にまで拡大させたためである。また、中・後期にはそれまで集落が展開していなかった地点が居住域となっていく場合もある。その背景には、溜井の掘削や灌漑土木技術の導入に支えられた生産域の拡大があったと考えられている。

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)周辺に目をやると、台地部では古墳時代中・後期の竪穴住居は検出されていない。舌状台地の先端部付近では古墳時代の4世紀代の集落が認められたわけであるが、古墳時代のその後には台地内部に集落が展開していない可能性が指摘される。

当該地域の奈良・平安時代の集落に関しては、古墳時代から継続するものが多い一方で、古墳時代には居住域となっていなかった地点にまで集落が及ぶようになる。それは古墳時代以降に開拓した水田耕作地を継承するだけでなく、さらなる水田域の拡大が背景にあったと考えられている。

本遺跡周辺については、先述したように台地内部に8世紀前半から9世紀後半にかけての集落が広範囲に展開している。また、古墳時代の4世紀代の竪穴住居が舌状台地の先端部に位置する一方で、その後の古墳時代の集落が台地内部から検出されていない。これらのことから、富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)周辺の8世紀から9世紀

にかけての集落は、古墳時代に居住域でなかった地域に展開した集落と解釈できる。その背景には、やはり古墳時代以降のさらなる水田域の拡大を指摘できる。

第3節 溝について

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)からは11条の溝が検出された。特に、溝6条(5・7・8・9・11・13号溝)は、いずれも走向がほぼ北東から南西方向であり、同一地点に切り合い関係をもち集中分布する。遺構の平面的な切り合い関係及び土層断面から、(古)11号溝→13号溝→7号溝→5号溝→8号溝→9号溝(新)という年代的な変遷が追える。さらに、5号溝の埋没土層最下部には、浅間B軽石の一次堆積層が確認されており、浅間B軽石降下を相前後する年代において、当該地周辺を区画する目的で繰り返し同じ場所に溝が作成された可能性がある。

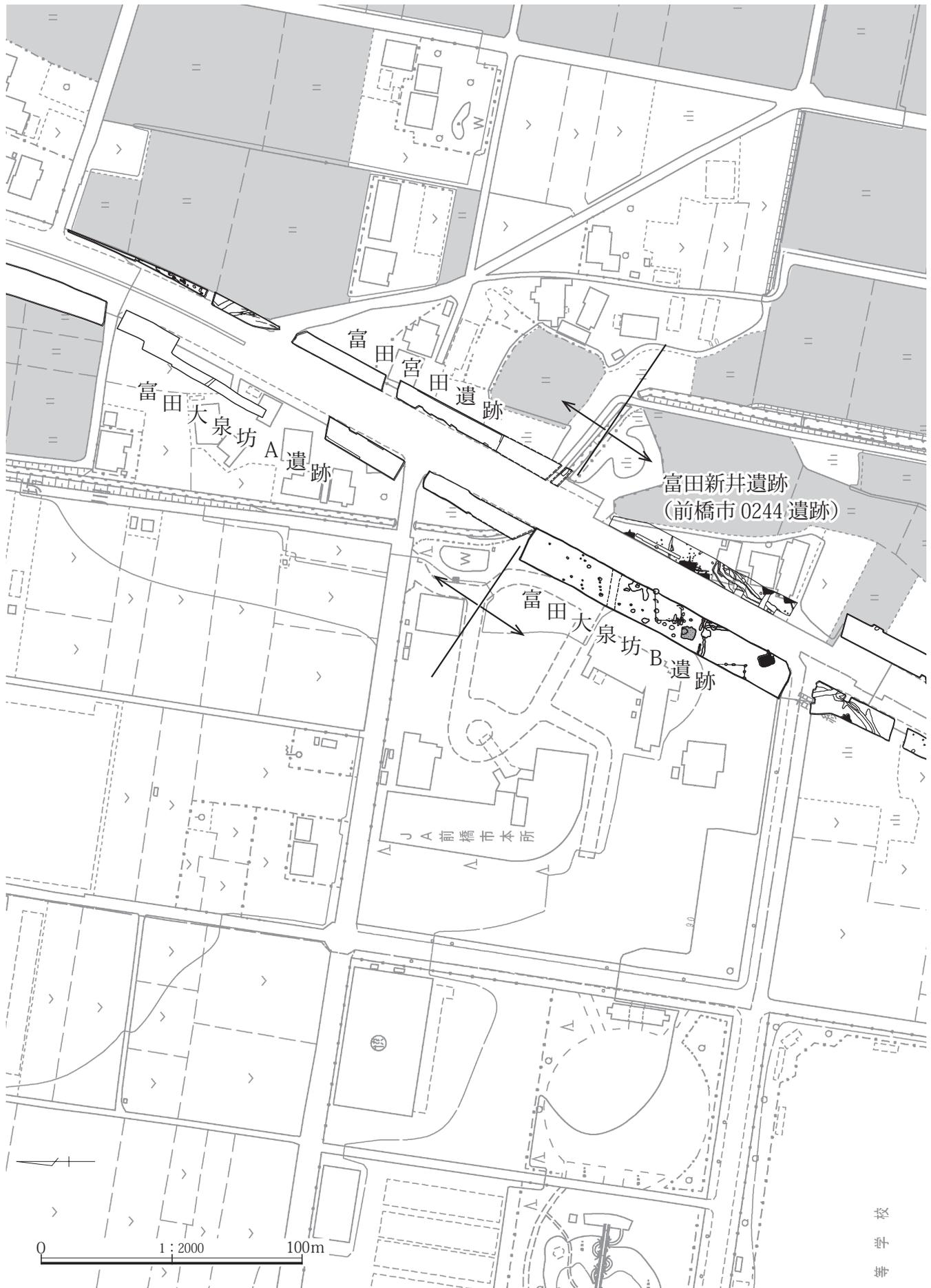
遺跡周辺を概観すると、富田大泉坊B遺跡においてこれらの溝の延長部分と考えられる複数の溝(7～11号溝)が検出されている。これらは本調査地の南西部、道路(藤岡大胡線)反対側にあたる。溝が複数の遺跡地で確認されたことにより、当該地域を広範囲に区画していると想定される。

これらの溝と帰属時期が重なる可能性のある遺構としては、富田大泉坊B遺跡からは10世紀前半と考えられる竪穴住居1軒が検出されている。これは、本遺跡の西、道路(藤岡大胡線)反対側にあたる。また、富田新井遺跡では、律令期と想定される掘立柱建物群が確認されている。これは富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)から200mほど南にあたり、複数の掘立柱建物が平面的な切り合い関係をもち検出されている。

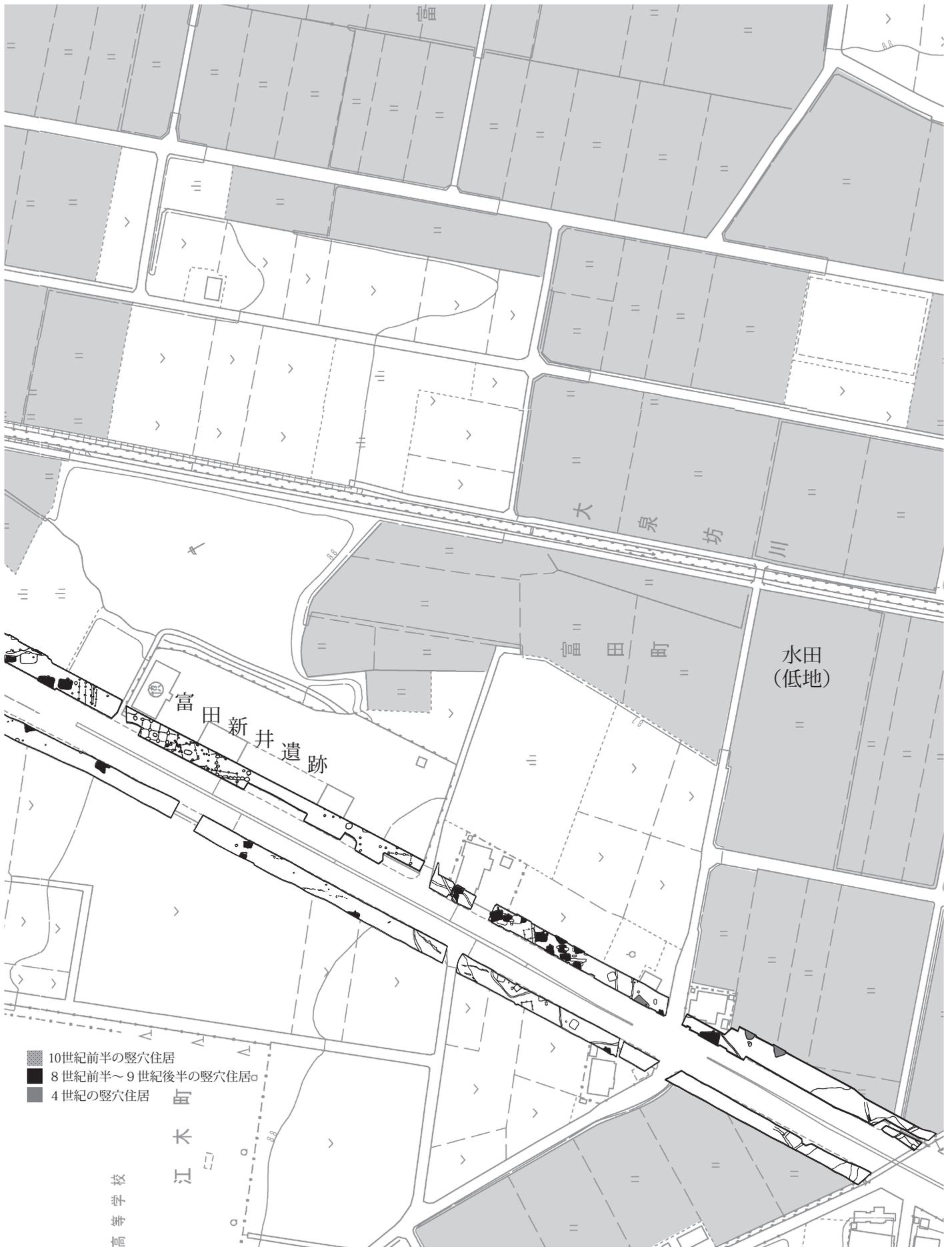
富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)周辺で検出された複数の溝は、浅間B軽石降下を相前後する時期のものである。前述した10世紀前半の竪穴住居や律令期の掘立柱建物群との帰属時期的関係については直接的な証拠はない。ここではそれらの遺構群が、それぞれ関係したものである可能性を指摘するにとどめたい。

引用文献

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
小島敦子2009「第3章遺跡の立地と環境」『荒砥前田II遺跡 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第472集』15～24頁



第41図 周辺遺跡の遺構分布(藤岡大胡線)
(前橋市作成の地形図2千分の1を使用し編集した)



遺物観察表 凡例

出土位置 竪穴住居等の遺構から出土している遺物のうち、出土位置が挿図にドットで示されているものについては、床面とのレベル差を+○(cm)と示す。cmは省略。床面直上から出土したものは「+0」と表記する。

計測値 土器・陶磁器は基本的に口径・底径・器高を計測し、それぞれ「口」・「底」・「高」と略している。その他、「台」＝高台径などを用いた場合がある。ただし、縄文土器はほとんどが小破片であるため、計測値を示していない部分が多い。石器・土製品は長さ・幅・厚さ・重量を記載してある。単位は全てcmであり、重さの単位はgである。()内の数字は残存値である。

胎土 古墳時代～古代の土器では夾雑物を記述する。砂粒の場合は2mm以下を「細砂粒」、2mmより大きい場合は「粗砂粒」とする。その他、小礫、白色・黒色鉱物粒、赤色・赤黒色・赤茶色・灰黒色粘土粒、雲母、チャート、輝石、海綿骨針などの混入を記述する。

縄文土器は、下記のA～Dに分類しそのアルファベットを記入する。

- A 中量の長石、黒・白色岩石と少量の石英・角閃石の粗・細砂及び微量の繊維を含むやや粗雑な胎土。
- B 中量の角閃石や黒・白色岩石と少量の石英・長石の粗・細砂及び繊維を含む粗雑な胎土。
- C 多量の角閃石と少量の長石及び黒・白色岩の粗砂を含むやや緻密な胎土。
- D 多量の長石と少量の結晶片岩や角閃石及び黒・白色岩の粗砂を含むやや緻密な胎土。

焼成 古墳時代～古代の土器についてのみ記入してある。土師器の場合は「良好」か「不良」かを区別した。須恵器・黒色土器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別した。

色調 古墳時代～古代の土器についてのみ記述する。色調の名称は、『新版標準土色帖2005年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠する。

第2表 遺物観察表(1)

1号竪穴住居出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第8図 PL.27	1	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部~底部片	口底	11.5 8.5	高	-	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第8図 PL.27	2	須恵器 杯	床面-1 3/4	口底	11.8 6.9	高	3.5	細砂粒・粗砂粒・ 石英/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第8図 PL.27	3	須恵器 杯	床面-1 3/4	口底	11.1 5.6	高	3.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第8図 PL.27	4	須恵器 杯	貯蔵穴床面+12 完形	口底	13.1 6.5	高	3.5	細砂粒・粗砂粒・ 石英/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第8図 PL.27	5	土師器 甕	貯蔵穴床面+12 口縁部~肩部片	口底	12.9 -	高 胴	- 14.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
2号竪穴住居出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第11図 PL.27	1	土師器 杯	覆土一括取上 底部	口底	-	高	-	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部は外面がヘラ削り、内面はナデ。 底部内面に墨書。	
第11図 PL.27	2	土師器 杯	床下土坑床面+4 1/2	口底	13.4 9.8	高	-	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面に放射状暗 文。	
第11図 PL.27	3	土師器 杯	覆土一括取上 1/4	口底	11.0 7.8	高	3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。 底部内外面に墨書。	
第11図 PL.27	4	土師器 杯	床面+4 2/3	口底	11.8 7.4	高	3.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。 底部内外面に墨書。	
第11図 PL.27	5	土師器 杯	掘方床面+0、覆 土一括取上 2/3	口底	11.8 8.6	高	3.4	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。 底部内外面に墨書。	
第11図 PL.27	6	土師器 杯	床面-1 3/4	口底	11.8 8.8	高	3.5	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第11図 PL.27	7	土師器 杯	床面+5 完形	口底	11.7 7.8	高	3.4	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内 面は体部がヘラナデ、口縁部は横ナデ。	
第11図 PL.27	8	土師器 杯	床下土坑床面+3 完形	口底	11.7 8.2	高	3.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第11図 PL.27	9	土師器 杯	床面+5 完形	口底	12.4 7.4	高	3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第11図 PL.27	10	黒色土器 杯	床下土坑床面 +5、覆土一括取 上 3/4	口底	12.0 6.0	高	4.3	細砂粒/酸化焰/明 赤褐	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切 り無調整、体部下半は回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
第11図 PL.27	11	須恵器 杯蓋	竈掘方 口縁部片	口底	16.8 -	高	-	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
第11図 PL.27	12	灰釉陶器 椀	床面+7 1/3	口底	17.6 8.8	高 台	4.6 9.0	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、体部は回転ヘラ削り。施 釉方法は内面浸し掛け。黒笹14号窯式 期。	
第11図 PL.27	13	土師器 甕	床下土坑床面 +5、覆土一括取 上、竈 2/3	口底	18.4 -	高 胴	- 20.0	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第11図 PL.27	14	土師器 甕	床面+5、覆土一 括取上 1/2	口底	21.9 4.5	高 胴	26.4 24.6	細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
3号竪穴住居出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第14図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部片	口底	12.0 8.6	高	-	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第14図 PL.28	2	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部~底部片	口底	11.8 8.6	高	-	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第14図 PL.28	3	土師器 甕	竈、覆土一括取 上 口縁部~肩部片	口底	20.8 -	高	-	細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第14図 PL.28	4	土師器 甕	床面+18 口縁部~肩部片	口底	20.8 -	高	-	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第14図 PL.28	5	土師器 甕	掘方、覆土一括 取上 口縁部~肩部片	口底	11.8 -	高	-	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
4号竪穴住居出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第15図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部片	口底	-	高	-	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。	
5号竪穴住居出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第16図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 破片	口底	11.0 7.4	高	-	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第16図 PL.28	2	土師器 甕	覆土一括取上 口縁部片	口底	-	高	-	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は外面が横ナデ、内面も横ナデで一部に斜めのヘラ ナデ。	
第16図 PL.28	3	土師器 甕	覆土一括取上 口縁部片	口底	-	高	-	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は横ナデ。	

遺物観察表

第3表 遺物観察表(2)

5号土坑出土遺物										
挿図 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調/ 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第18図 PL.28	1	須恵器 杯	床面+5 1/3	口 底	11.5 7.0	高 -	3.8 -	細砂粒・粗砂粒/ 黒粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
8号土坑出土遺物										
第19図 PL.28	1	須恵器 杯	覆土一括取上 底部片	口 底	- 5.0	高 -	- -	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	
7号溝出土遺物										
第32図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部～底部片	口 底	13.7 8.4	高 -	- -	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	2	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	3	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り。	
第32図 PL.28	4	須恵器 椀	覆土一括取上 体部下位～底部 片	口 底	- 8.0	高 台	- 7.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第32図 PL.28	5	須恵器 広口壺	覆土一括取上 頸部～肩部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部上位に凹線が巡り、その 上位に2段の波状文が巡る。	
11号溝出土遺物										
第32図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 底部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/良好/橙	底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	2	土師器 杯	覆土一括取上 底部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	3	土師器 杯	床面+5、表土 口縁部片	口 底	11.3 8.5	高 -	- -	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	4	土師器 杯	覆土一括取上 1/4	口 底	12.0 8.6	高 -	- -	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	5	土師器 杯	床面+3、覆土一 括取上 1/3	口 底	12.2 7.6	高 -	- -	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	6	土師器 杯	覆土一括取上、 表土 1/2	口 底	11.6 9.0	高 -	- -	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	7	土師器 杯	床面+6 完形	口 底	11.8 8.0	高 -	3.7 -	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.28	8	須恵器 椀	床面+2 1/4	口 底	15.9 11.0	高 台	6.6 9.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り、体部下 位に回転ヘラ削り、高台は貼付。	
第32図 PL.28	9	土師器 台付甕	床面+4、表採 台部片	口 底	- -	高 脚	- 8.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	脚部は接合。胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面は胴部 がヘラナデ、脚部は上半がヘラナデ、下半が横ナデ。	
第32図 PL.28	10	須恵器 甕	床面+16 胴部片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/還元焰/黄 灰	外面は平行叩き痕が残る。内面はヘラナデ、アテ具痕はか すかに残る。	
13号溝出土遺物										
第32図 PL.28	1	土師器 杯	覆土一括取上 口縁部片	口 底	12.3 -	高 -	- -	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	
第32図 PL.28	2	土師器 鉢	覆土一括取上 体部下位～底部 片	口 底	- 10.0	高 -	- -	細砂粒/良好/にぶ い褐	底部から体部はヘラ削り。	
第32図 PL.28	3	須恵器 椀	覆土一括取上 底部1/3	口 底	- 8.2	高 台	- 8.0	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
遺構外出土遺物										
第37図 PL.29	1	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					A	口縁部は「く字状」に内折すると推定。屈折部下位に粗い条 痕文を鋸歯状に構成。内面は縦位の条痕文を施文。	茅山式
第37図 PL.29	2	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					B	粗い条痕文を外面は縦位に内面は斜位に施文するが、内面 は風化が著しい。	茅山式
第37図 PL.29	3	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					B	2と同一個体。	茅山式
第37図 PL.29	4	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					B	内外面ともに粗い条痕文を斜位に施文。内面は風化。	茅山式
第37図 PL.29	5	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					B	内外面ともに粗い条痕文を縦・斜位に施文。	茅山式
第37図 PL.29	6	縄文土器 深鉢	表土 胴部片					B	縄文LRを横位多段に施文。内面に条痕文を施すが風化。	茅山式
第37図 PL.29	7	縄文土器 深鉢	表土 口縁片					C	口唇部に刻目を施し、以下に横位浮線文(剥落)を施文。内 面横撫で。	諸磯b式
第37図 PL.29	8	縄文土器 深鉢	1住竈 胴部片					C	縄文RLを横位に施文。内面風化。	諸磯b式

第4表 遺物観察表(3)

遺構外出土遺物

第37図 PL.29	9	縄文土器 深鉢	1 住竈 口縁片						D	縄文RLを横位多段に施文。内面横撫で。	前期末葉
第37図 PL.29	10	縄文土器 深鉢	表土 胴部片						C	縄文Rを横位施文するが、部分的に縦位施文。内面縦磨き。	前期末葉
第37図 PL.29	11	縄文土器 深鉢	1 住竈 胴部片						C	縄文Lを横位施文。内面やや風化。	前期末葉
第37図 PL.29	12	縄文土器 深鉢	表土 底部1/8	底	(8.0)				C	縄文RLを横位施文。内面横磨き。	前期末葉
第37図 PL.29	13	縄文土器 深鉢	表土 底部1/8	底	(6.0)				C	縄文RLを横位施文。内面縦磨き。	前期末葉
第38図 PL.29	14	土師器 杯	表土 底部片	口底	-	高	-		細砂粒/良好/橙	底部は外面がヘラ削り、内面はナデ。	底部内面に墨書。
第38図 PL.29	15	土師器 杯	表土 底部片	口底	-	高	-		細砂粒/良好/明赤褐	底部は外面がヘラ削り、内面はナデ。	底部外面に墨書。
第38図 PL.29	16	土師器 杯	表土 口縁部片	口底	12.8	高	9.8		細砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面に放射状暗文。	内外面の一部にススが付着。
第38図 PL.29	17	土師器 杯	表土 1/4	口底	12.8	高	9.0		細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	18	土師器 杯	表土 1/4	口底	11.2	高	7.8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	19	土師器 杯	表土 1/4	口底	11.8	高	8.0	3.2	細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	20	土師器 杯	表土 1/3	口底	11.4	高	7.8	3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	21	土師器 杯	表土 3/4	口底	11.4	高	9.2	3.3	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	22	土師器 杯	表土 1/4	口底	12.2	高	8.8	3.6	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	23	土師器 高杯	表土 杯身底部片	口底	-	高	-		細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。外面は横ナデ、内面は底部中央部がヘラ磨き、周辺部はヘラナデ。	
第38図 PL.29	24	土師器 高杯	表土 杯身口縁部片	口底	18.4	高	-		細砂粒/良好/橙	口縁部上・中位は横ナデ、下位から底部はヘラナデ。内面は口縁部上位が横ナデ、中位以下がヘラナデ。	
第38図 PL.29	25	須恵器 杯	表土 破片	口底	13.8	高	11.0	3.5	細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.29	26	須恵器 杯	表土 口縁部片	口底	13.0	高	-		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。	
第38図 PL.29	27	須恵器 椀	表土 口縁部片	口底	13.1	高	-		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第38図 PL.29	28	須恵器 椀	表土 底部片	口底	-	高台	-		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第38図 PL.29	29	灰釉陶器 皿	表土 口縁部片	口底	13.4	高	-		微砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。体部は回転ヘラ削り。施釉範囲・方法不明。	
第38図 PL.29	30	灰釉陶器 皿	表土 底部3/4	口底	-	高台	7.6	7.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。内面にトチン痕が残る。施釉方法は浸し掛け。	黒笹14号窯式期
第38図 PL.29	31	灰釉陶器 椀	表土 底部片	口底	-	高台	6.9	6.7	微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は内面に浸し掛け。	黒笹14号窯式期
第38図 PL.29	32	土師器 壺	表土 胴部下半片	口底	-	高	-		細砂粒・粗砂粒・石英/良好/明赤褐	内面に輪積痕が残る。胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。	
第38図 PL.29	33	土師器 壺か	表土 口縁部片	口底	26.0	高	-		細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	内外面とも器面剥離のため整形不鮮明であるが、外面口縁部は横ナデ。	
第38図 PL.29	34	土師器 甕	表土 口縁部片	口底	20.0	高	-		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、頸部に胴部ヘラ削り時のヘラ痕あり。	
第38図 PL.29	35	土師器 甕	表土 口縁部片	口底	-	高	-		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ。	
第39図 PL.29	36	須恵器 甕	表土 胴部～底部	口底	-	高	21.0		細砂粒/還元焰/灰黄褐	底部はヘラ削り、胴部は平行叩き痕が残る。内面は底部・胴部ともヘラナデ。	
第39図 PL.29	37	須恵器 甕	表土 胴部片	口底	-	高	-		細砂粒・粗砂粒/還元焰/黄灰	外面は平行叩き痕が残る。内面のアテ具痕はかすかに残る。外面に自然釉が付着。	
第39図 PL.29	38	土製品 羽口	表土 破片	長幅	7.0	厚重	2.8 5.5 64.65			羽口先端付近の破片推定外径6cm・穴径2cm。基部側は黄褐色、先端側は灰黒色で端部付近では灰～灰黒色でわずかに発泡する。基部および先端とも欠損し全体形状は不明。	断面位置外形直径72 内径直径28
第39図 PL.29	39	剥片石器 石鏃	表土 4/5	長幅	(2.2) 1.9	厚重	0.6 2.1		チャート	面的な二次加工により整形している。先端部欠損。	
第39図 PL.29	40	剥片石器 船底形石器	表土 完形	長幅	(4.1) 8.7	厚重	2.1 79.9		黒色頁岩	厚手の大形剥片を素材とする。上面からの二次加工により船底形に整形している。スクレイパーに器種分類される可能性がある。	

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	とみだあらいいせき
書 名	富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)
副書名	主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	610
編著者名	津島秀章 関邦一 石坂茂 神谷佳明
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160215
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	とみだあらいいせき
遺 跡 名	富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししとみだまち
遺跡所在地	群馬県前橋市富田町
市町村コード	10201
遺跡番号	0244
北緯(世界測地系)	363775
東経(世界測地系)	1391417
調査期間	20140601-20140630
調査面積	633
調査原因	道路建設
種 別	包蔵地/集落
主な時代	縄文/奈良/平安/中世/近世
遺跡概要	縄文-土器+石器/古墳-土師器/奈良+平安-竪穴住居5+溝6+土坑2-土師器+須恵器/中世+近世-溝5+土坑7+ピット23-土器/時期不明-土坑1+ピット2
特記事項	奈良・平安時代の集落
要 約	富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)は、赤城山南麓地域の標高約90mの地点に立地する。舌状台地の先端付近から約600m北方向の台地側に入った場所にあり、台地の東端に立地する。まさに台地から低地への移行部分にあたる。9世紀代に帰属する竪穴住居群を確認するとともに、浅間B軽石降下前後に位置づけられる複数の溝を検出した。溝はいずれも流水の痕跡はなく、何らかの意図で土地を区画するものと考えられる。

写真図版



1. 遺跡から北を望む



2. 遺跡から南を望む



1. 調査区北半全景(北から)



2. 調査区南端部(北から)



1. 調査区南端部(南から)



2. 1号竪穴住居全景(南東から)



1. 1号竪穴住居掘方全景(南西から)



2. 1号竪穴住居断面(南東から)



3. 1号竪穴住居断面A-A'(南から)



4. 1号竪穴住居竈全景(西から)



5. 1号竪穴住居竈掘方全景(西から)



1. 1号竖穴住居竈断面C-C'(北から)



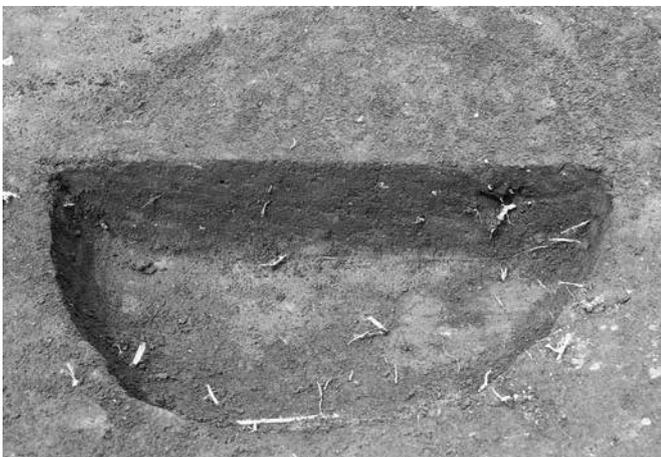
2. 1号竖穴住居竈断面C-C'(南から)



3. 1号竖穴住居竈断面D-D'(東から)



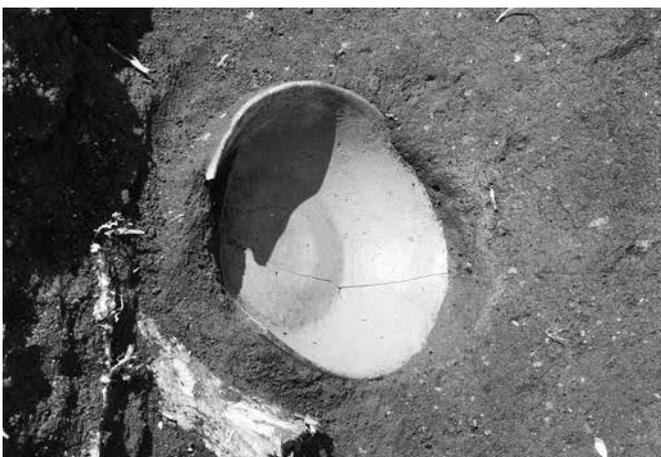
4. 1号竖穴住居貯蔵穴全景(北から)



5. 1号竖穴住居1号床下土坑断面F-F'(南から)



6. 1号竖穴住居貯蔵穴遺物出土状況(北から)



7. 1号竖穴住居遺物出土状況(東から)



8. 1号竖穴住居遺物出土状況(南から)



1. 2号竪穴住居全景(南西から)



2. 2号竪穴住居遺物出土状況(南西から)



1. 2号竪穴住居掘方全景(南から)



2. 2号竪穴住居断面A-A'(南から)



3. 2号竪穴住居断面B-B'(南から)



4. 2号竪穴住居掘方断面B-B'(南東から)



5. 調査風景(南から)



1. 2号竖穴住居竈全景(西から)



2. 2号竖穴住居竈掘方全景(西から)



3. 2号竖穴住居竈断面C-C'(南から)



4. 2号竖穴住居竈断面D-D'(西から)



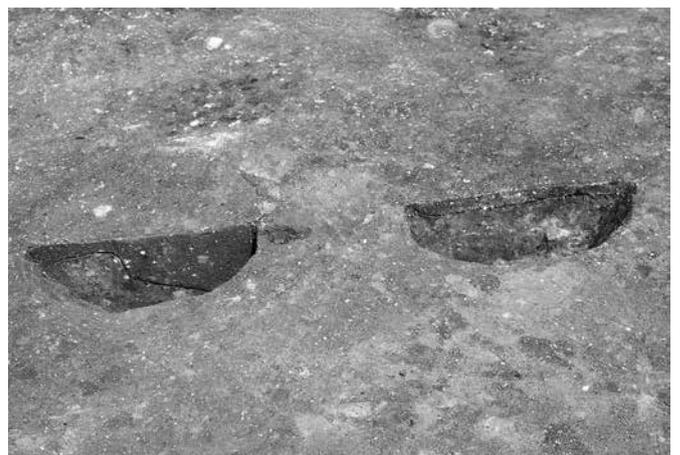
5. 2号竖穴住居床下土坑全景(西から)



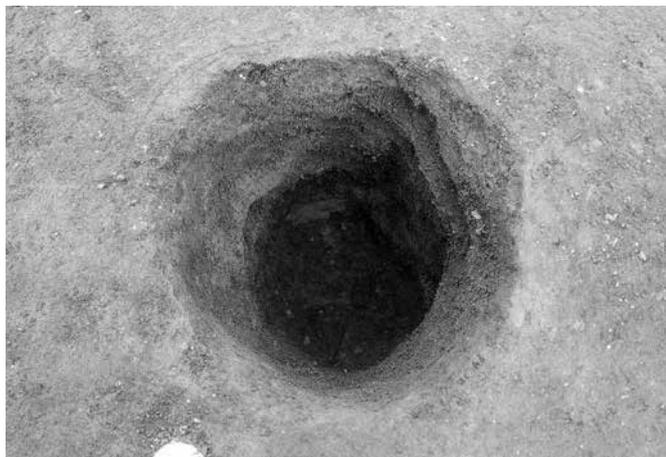
6. 2号竖穴住居床下土坑断面F-F'(南から)



7. 2号竖穴住居P1・P2全景(西から)



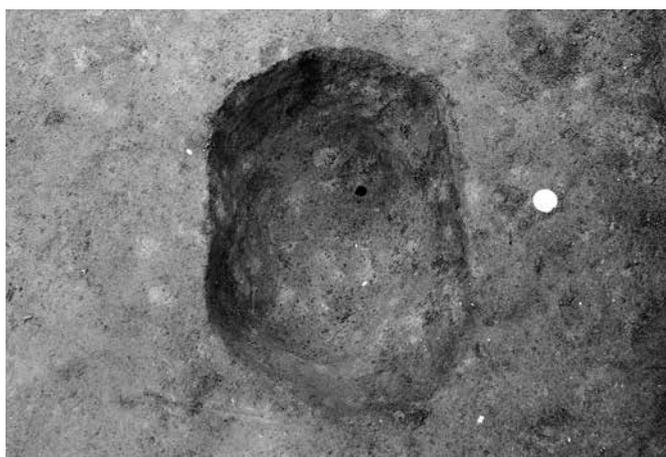
8. 2号竖穴住居P1・P2断面G-G'(西から)



1. 2号竪穴住居P 3全景(西から)



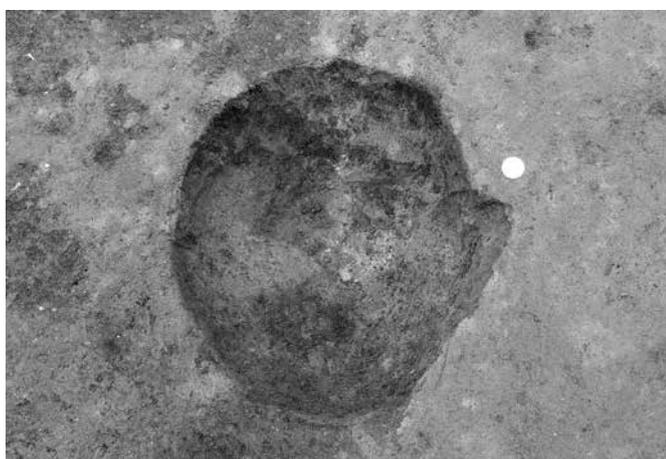
2. 2号竪穴住居P 3断面H-H'(南から)



3. 2号竪穴住居P 4全景(南から)



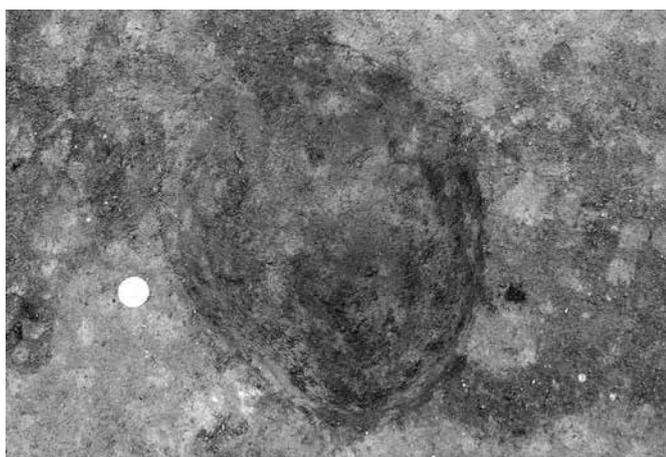
4. 2号竪穴住居P 4断面I-I'(南から)



5. 2号竪穴住居P 5全景(南から)



6. 2号竪穴住居P 5断面J-J'(南から)



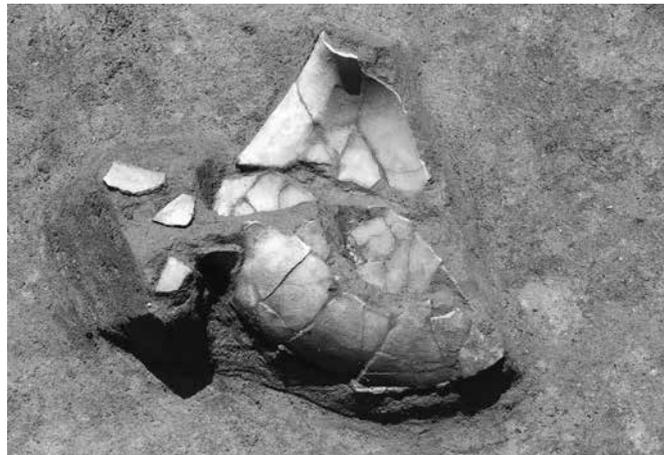
7. 2号竪穴住居P 6全景(南から)



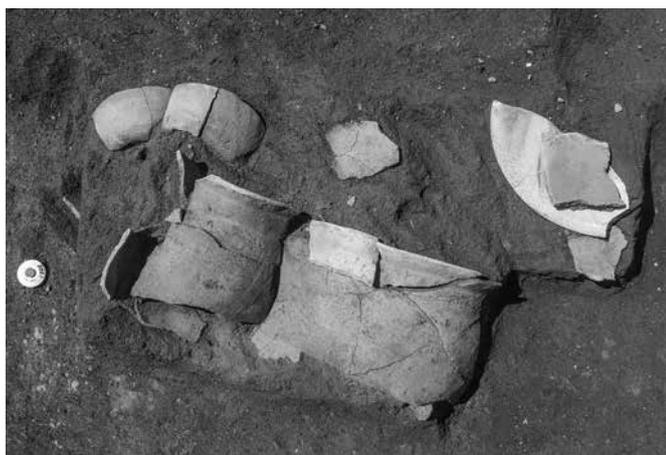
8. 2号竪穴住居P 6断面K-K'(東から)



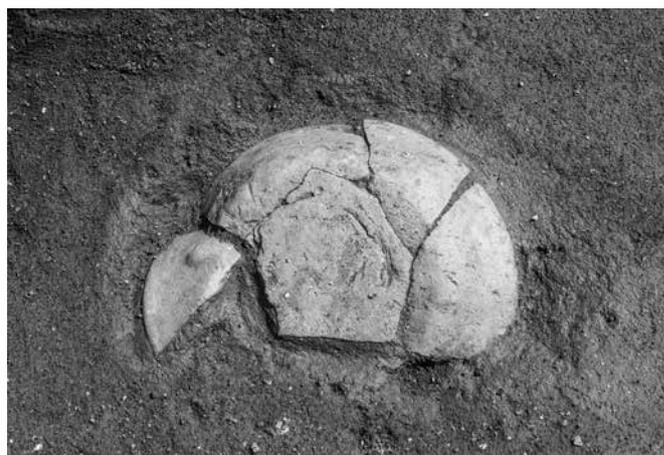
1. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から)



2. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から)



3. 2号竪穴住居遺物出土状況(西から)



4. 2号竪穴住居遺物出土状況(北から)



5. 3号竪穴住居全景(南から)



1. 3号竪穴住居遺物出土状況(南から)



2. 3号竪穴住居掘方全景(南から)



1. 3号竪穴住居断面A-A'(南から)



2. 3号竪穴住居掘方断面A-A'(南から)



3. 3号竪穴住居断面B-B'(東から)



4. 3号竪穴住居掘方断面B-B'(東から)



5. 3号竪穴住居竈全景(西から)



6. 3号竪穴住居竈掘方全景(西から)



7. 3号竪穴住居竈断面C-C'(南から)



8. 3号竪穴住居竈掘方断面C-C'(南から)



1. 3号竪穴住居竈断面D-D'(西から)



2. 3号竪穴住居床下土坑全景(東から)



3. 3号竪穴住居床下土坑断面F-F'(東から)



4. 3号竪穴住居P1全景(東から)



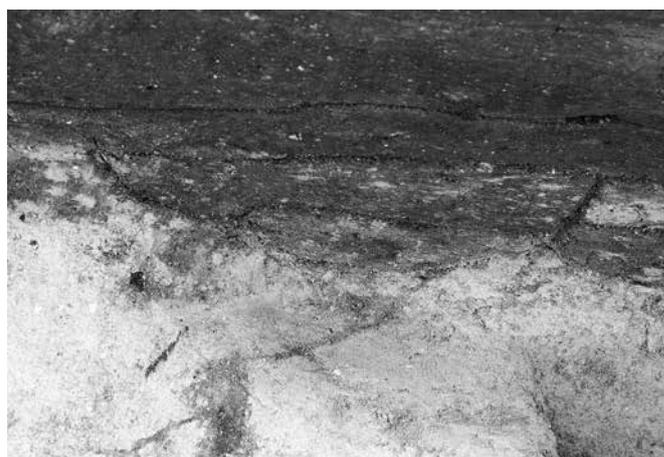
5. 3号竪穴住居P1断面G-G'(東から)



6. 3号竪穴住居P2全景(東から)



7. 3号竪穴住居P2断面H-H'(南から)



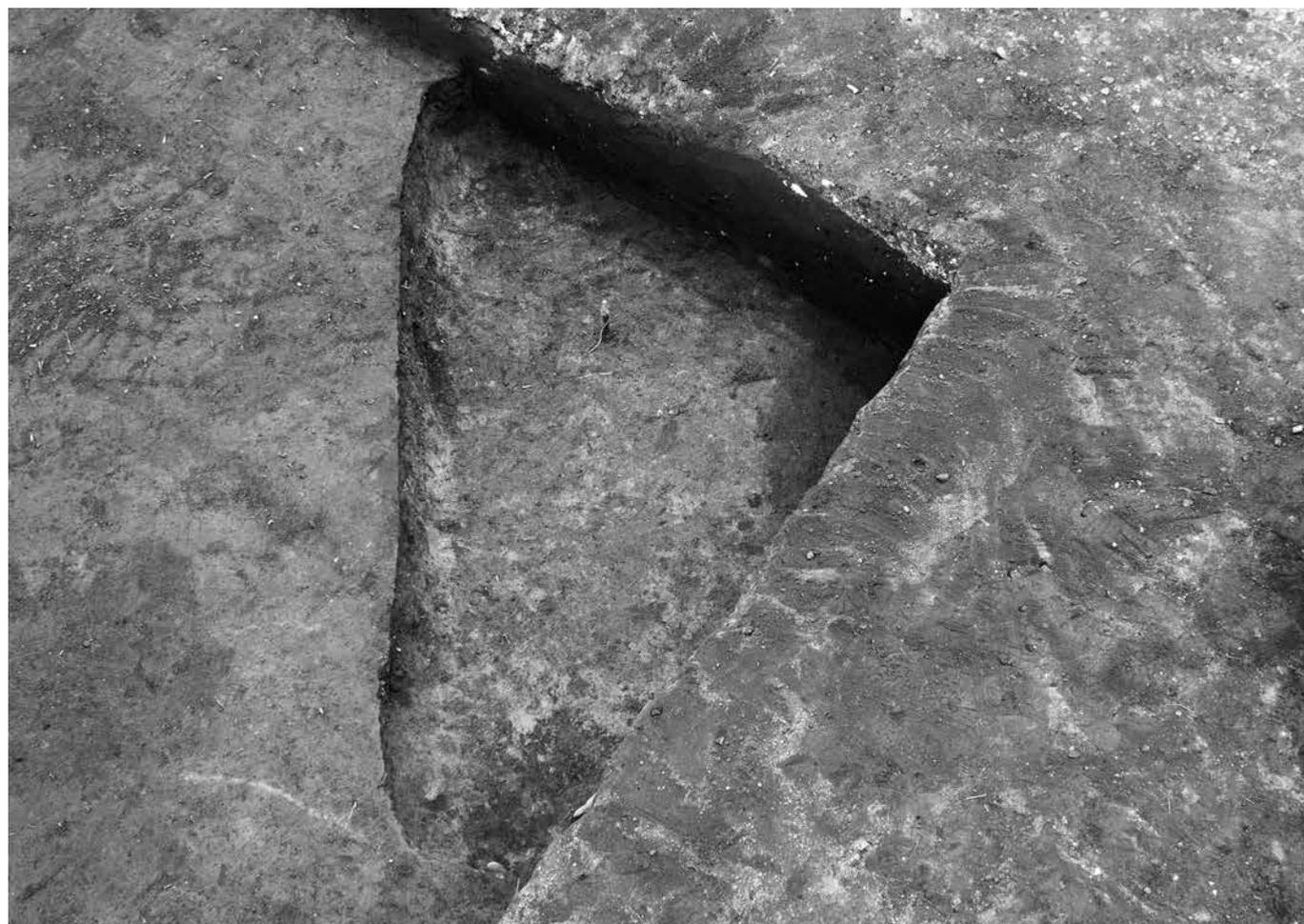
8. 3号竪穴住居P4全景(東から)



1. 3号竪穴住居P 5全景(東から)



2. 4号竪穴住居断面A-A'(南から)



3. 4号竪穴住居全景(南西から)



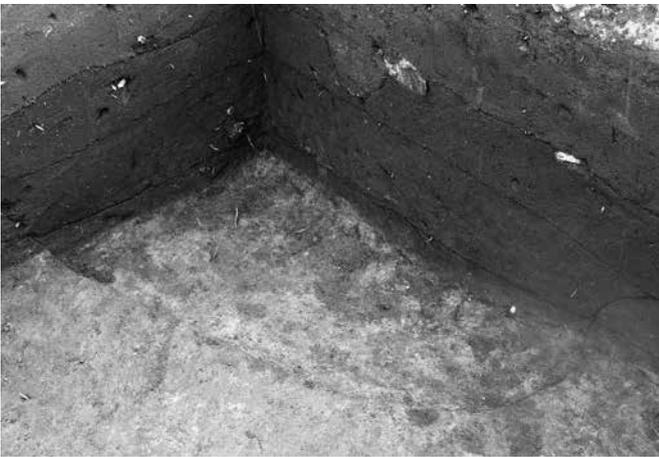
4. 4号竪穴住居断面B-B'(北西から)



5. 4号竪穴住居断面C-C'(北から)



1. 4号竪穴住居掘方全景(西から)



2. 4号竪穴住居床下土坑全景(北から)



3. 4号竪穴住居P1全景(南から)



4. 4号竪穴住居P1断面E-E'(南から)



5. 調査風景(南から)



1. 5号竪穴住居全景(西から)



2. 5号竪穴住居掘方全景(西から)



1. 5号竪穴住居断面A-A'(南から)



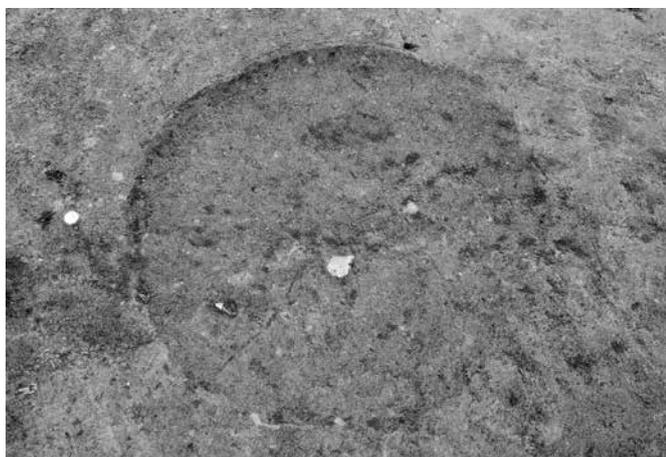
2. 5号竪穴住居断面B-B'(北西から)



3. 5号竪穴住居床下土坑・P1全景(南から)



4. 5号竪穴住居床下土坑・P1断面C-C'(南から)



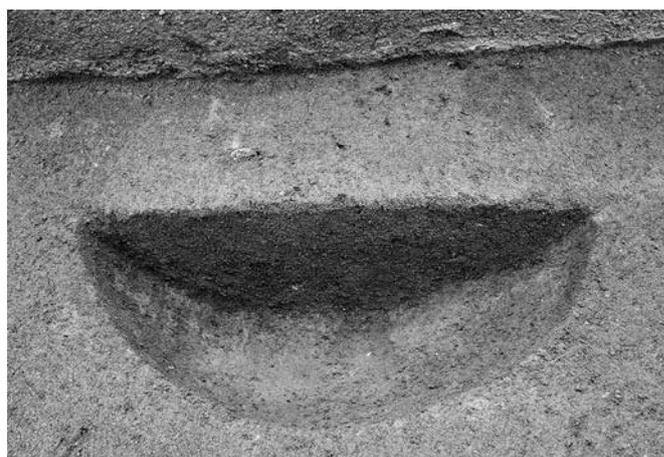
5. 1号土坑全景(南から)



6. 1号土坑断面A-A'(南から)



7. 2号土坑全景(西から)



8. 2号土坑断面A-A'(西から)



1. 3号土坑全景(南から)



2. 3号土坑断面A-A'(南から)



3. 4号土坑全景(北から)



4. 4号土坑断面A-A'(北から)



5. 5号土坑全景(北から)



6. 5号土坑断面A-A'(北から)



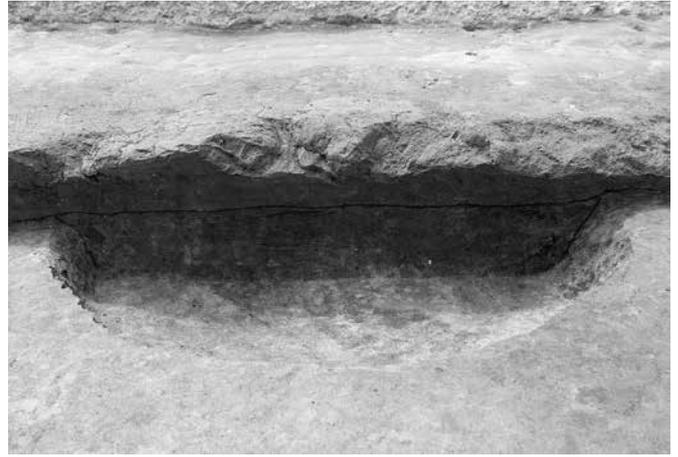
7. 6号土坑全景(東から)



8. 6号土坑断面A-A'(西から)



1. 7号土坑全景(東から)



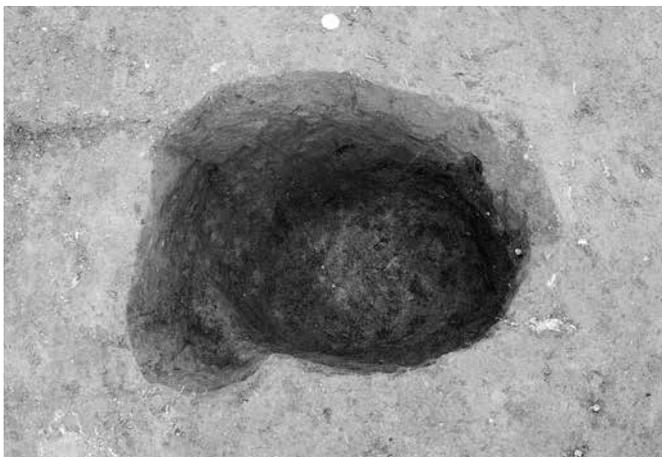
2. 7号土坑断面A-A'(東から)



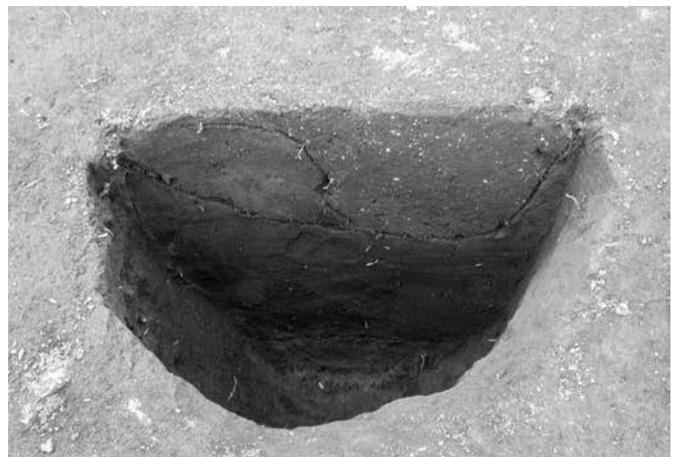
3. 8号土坑全景(東から)



4. 8号土坑断面A-A'(西から)



5. 9号土坑全景(東から)



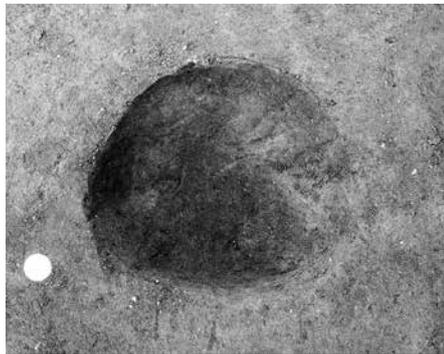
6. 9号土坑断面A-A'(東から)



7. 10号土坑全景(南から)



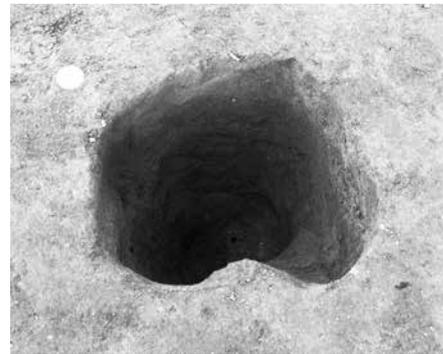
8. 10号土坑断面A-A'(南から)



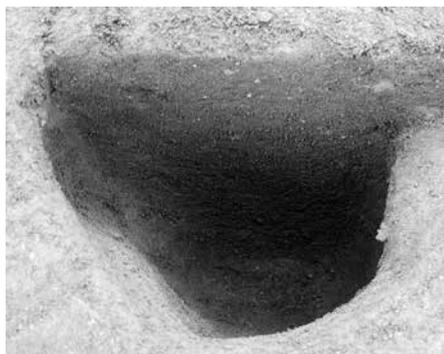
1. 1号ピット全景(南から)



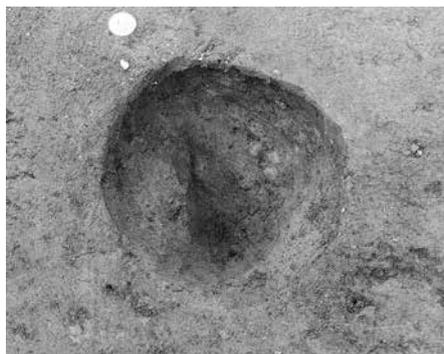
2. 1号ピット断面A-A'(南から)



3. 2号ピット全景(南から)



4. 2号ピット断面A-A'(南西から)



5. 3号ピット全景(南から)



6. 3号ピット断面A-A'(南西から)



7. 4号ピット全景(南から)



8. 4号ピット断面A-A'(南西から)



9. 5号ピット全景(南から)



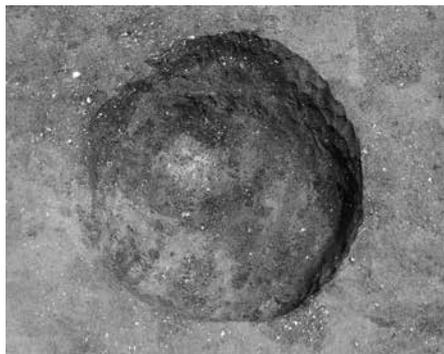
10. 5号ピット断面A-A'(南から)



11. 6号ピット全景(南から)



12. 6号ピット断面A-A'(南から)



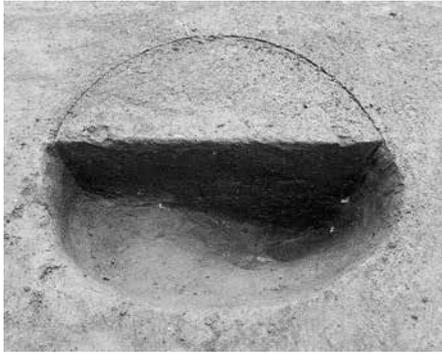
13. 7号ピット全景(南から)



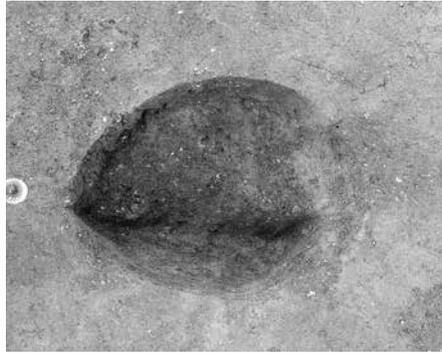
14. 7号ピット断面A-A'(南から)



15. 8号ピット全景(南から)



1. 8号ピット断面A-A'(南から)



2. 9号ピット全景(南から)



3. 10号ピット全景(西から)



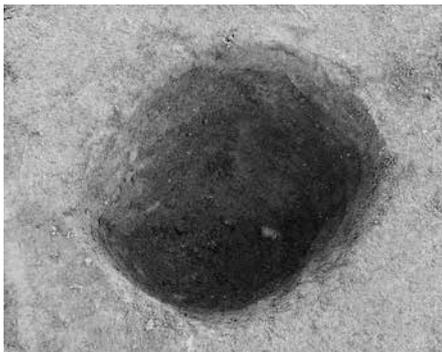
4. 11号ピット全景(西から)



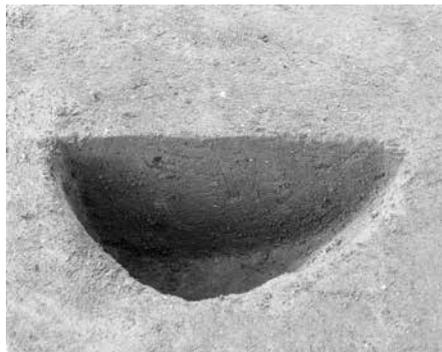
5. 11号ピット断面A-A'(西から)



6. 12号ピット断面A-A'(南から)



7. 13号ピット全景(南から)



8. 13号ピット断面A-A'(南から)



9. 14号ピット全景(西から)



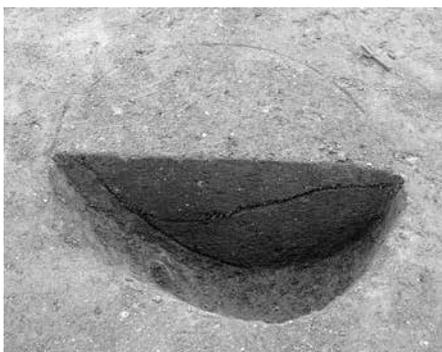
10. 14号ピット断面A-A'(西から)



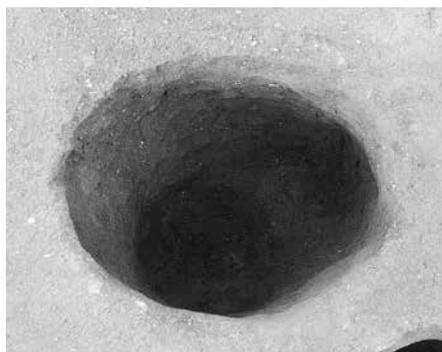
11. 15号ピット全景(東から)



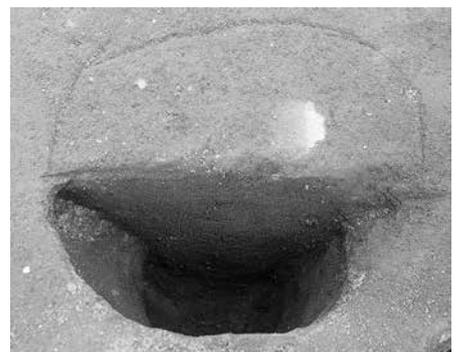
12. 16号ピット断面A-A'(南から)



13. 17号ピット断面A-A'(南から)



14. 18号ピット全景(南から)



15. 18号ピット断面A-A'(南から)



1. 19号ピット全景(南から)



2. 19号ピット断面A-A'(南から)



3. 20号ピット全景(北から)



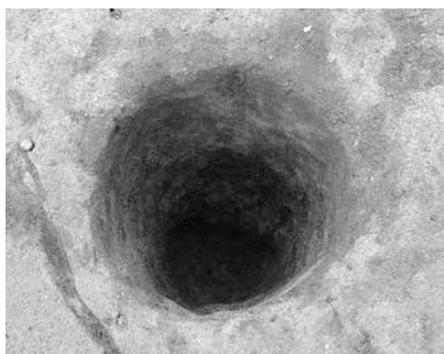
4. 20号ピット断面A-A'(南から)



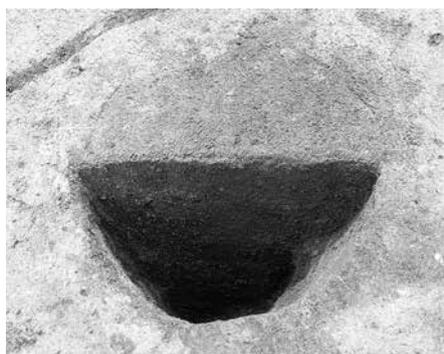
5. 21号ピット全景(南から)



6. 21号ピット断面A-A'(南から)



7. 22号ピット全景(南から)



8. 22号ピット断面A-A'(東から)



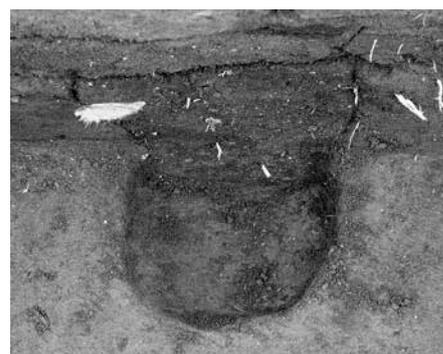
9. 23号ピット全景(南から)



10. 23号ピット断面A-A'(南から)



11. 24号ピット断面A-A'(西から)



12. 25号ピット全景(東から)



13. 調査風景(北から)



14. 調査風景(北から)



15. 調査風景(北から)



1. 1・2号溝全景(南から)



2. 1号溝断面A-A'(南から)



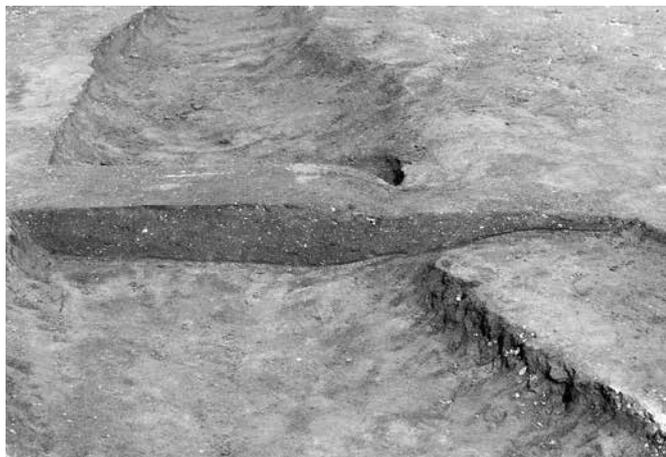
3. 2号溝断面A-A'(南から)



4. 3・4号溝全景(東から)



5. 5号溝全景(南から)



1. 3・4号溝断面A-A' (西から)



2. 6号溝断面A-A' (南西から)



3. 6号溝全景(南から)



4. 7号溝全景(南から)



5. 8・9号溝全景(北から)



1. 11号溝全景(南から)



2. 11号溝断面A-A'(北から)



3. 13号溝全景(北から)



4. 旧石器時代1号調査坑(東から)



1. 旧石器時代2号調査坑(東から)



2. 旧石器時代1号調査坑断面A-A'(南から)



3. 旧石器時代2号調査坑A-A'(南から)



4. 基本土層断面A-A'(東から)

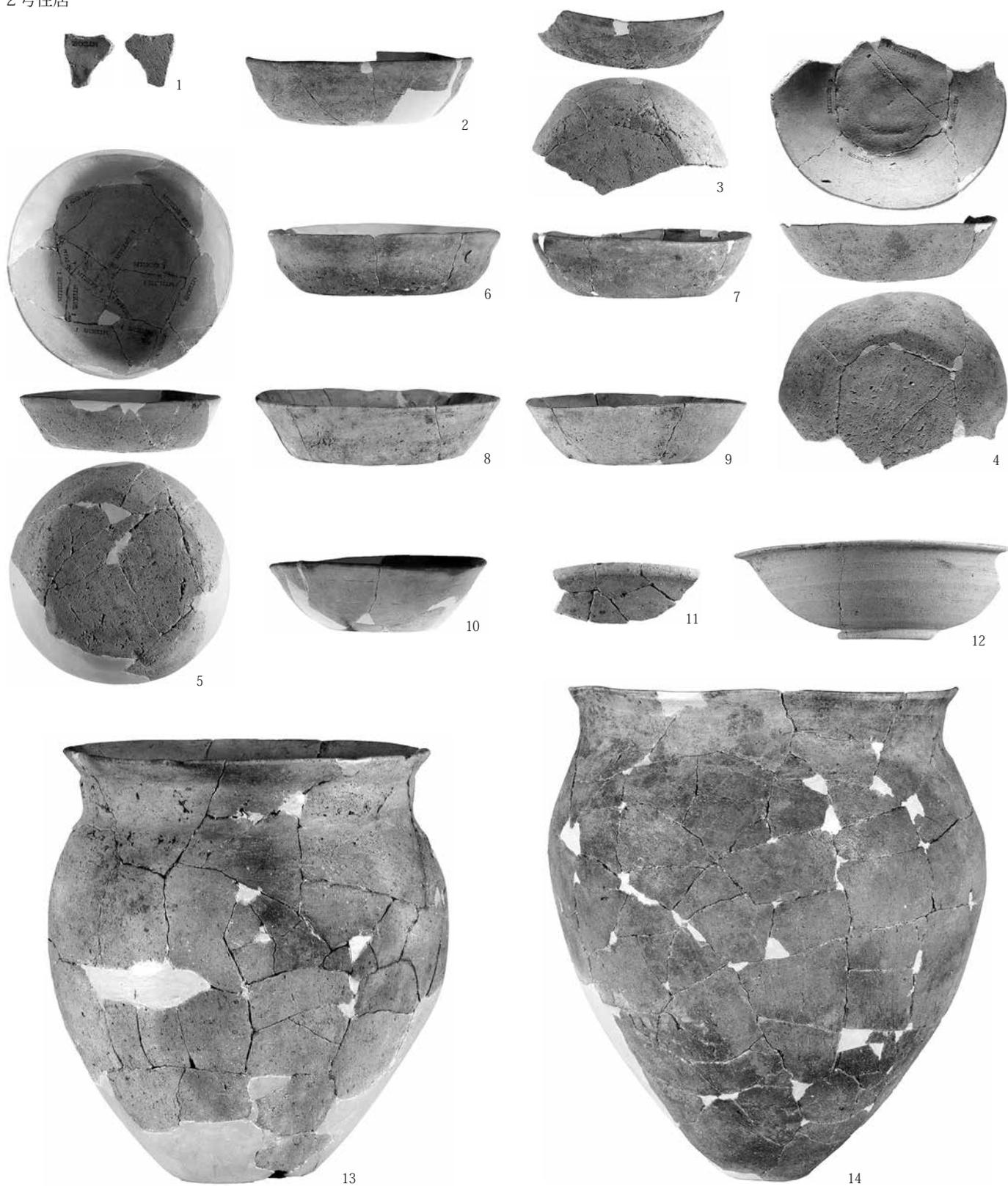


5. 調査風景

1号住居

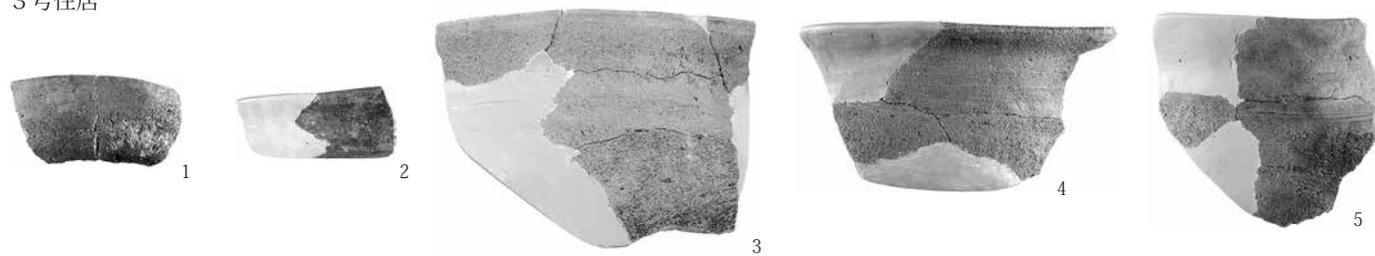


2号住居



PL.28

3号住居



4号住居



5号住居



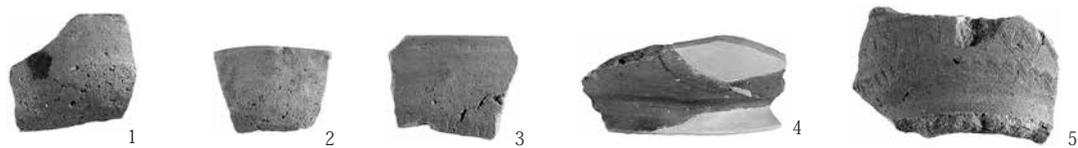
5号土坑



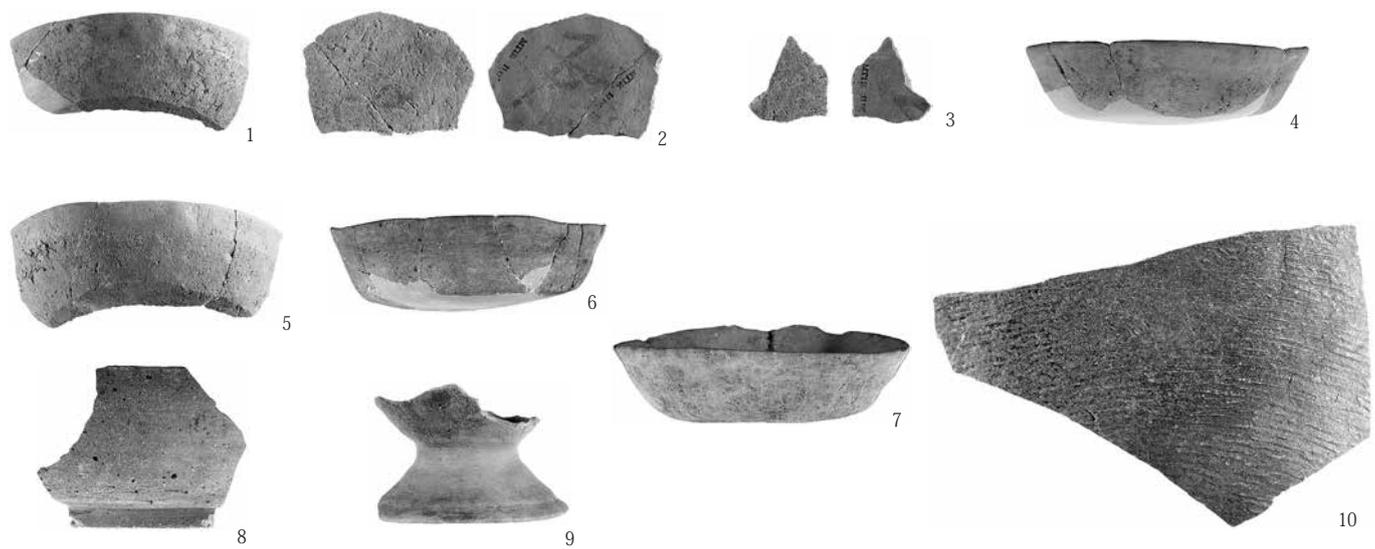
8号土坑



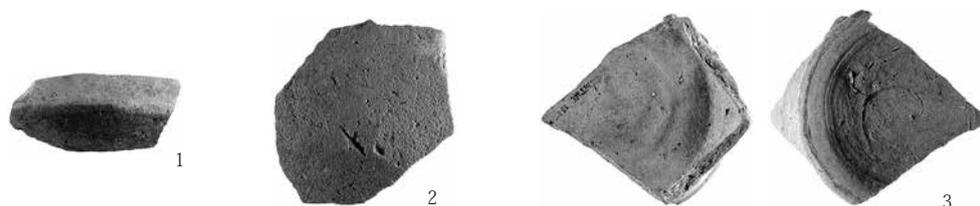
7号溝



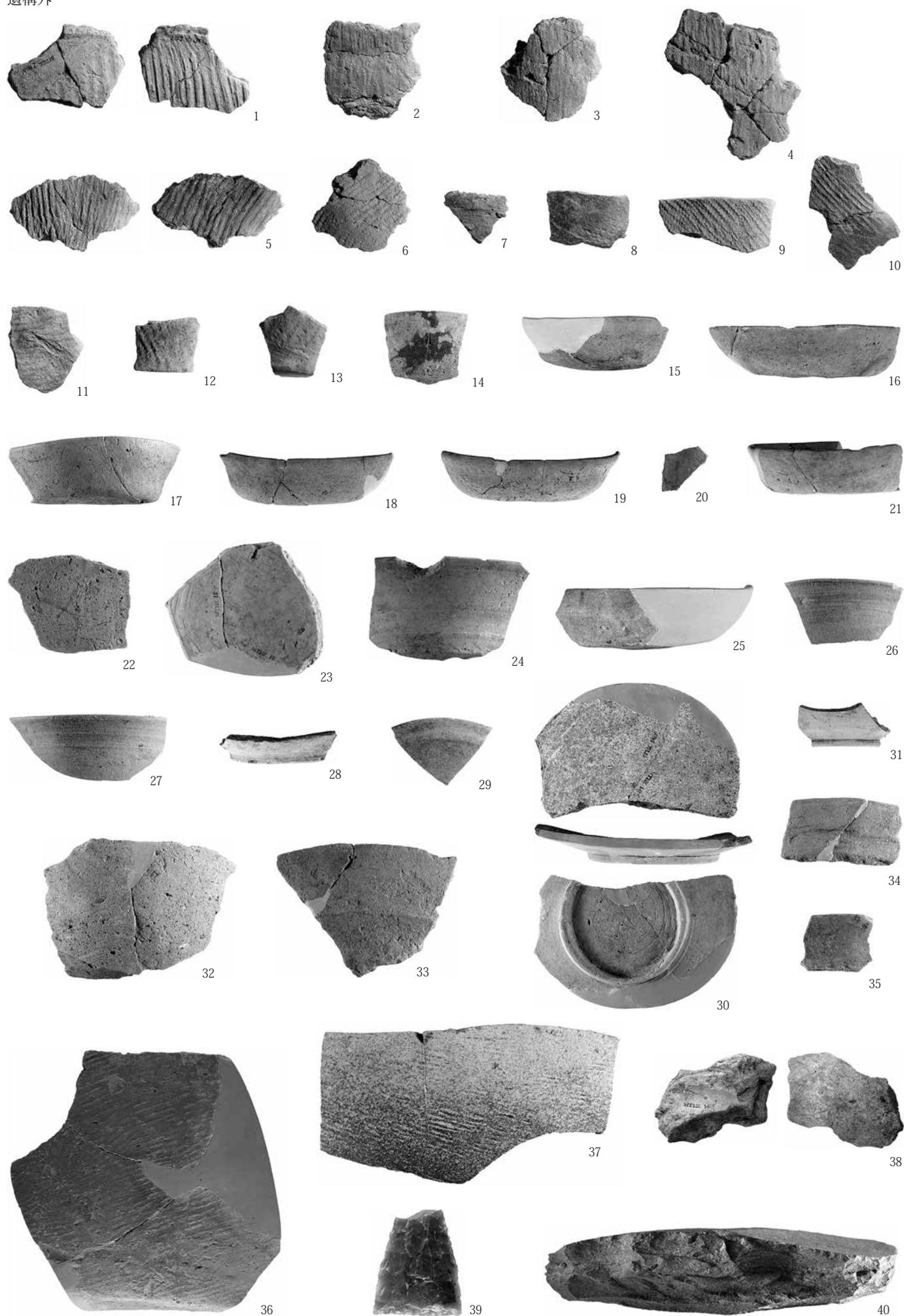
11号溝



13号溝



遺構外



公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第610集

富田新井遺跡(前橋市0244遺跡)

主要地方道藤岡大胡線単独道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成28(2016)年2月8日 印刷

平成28(2016)年2月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所
